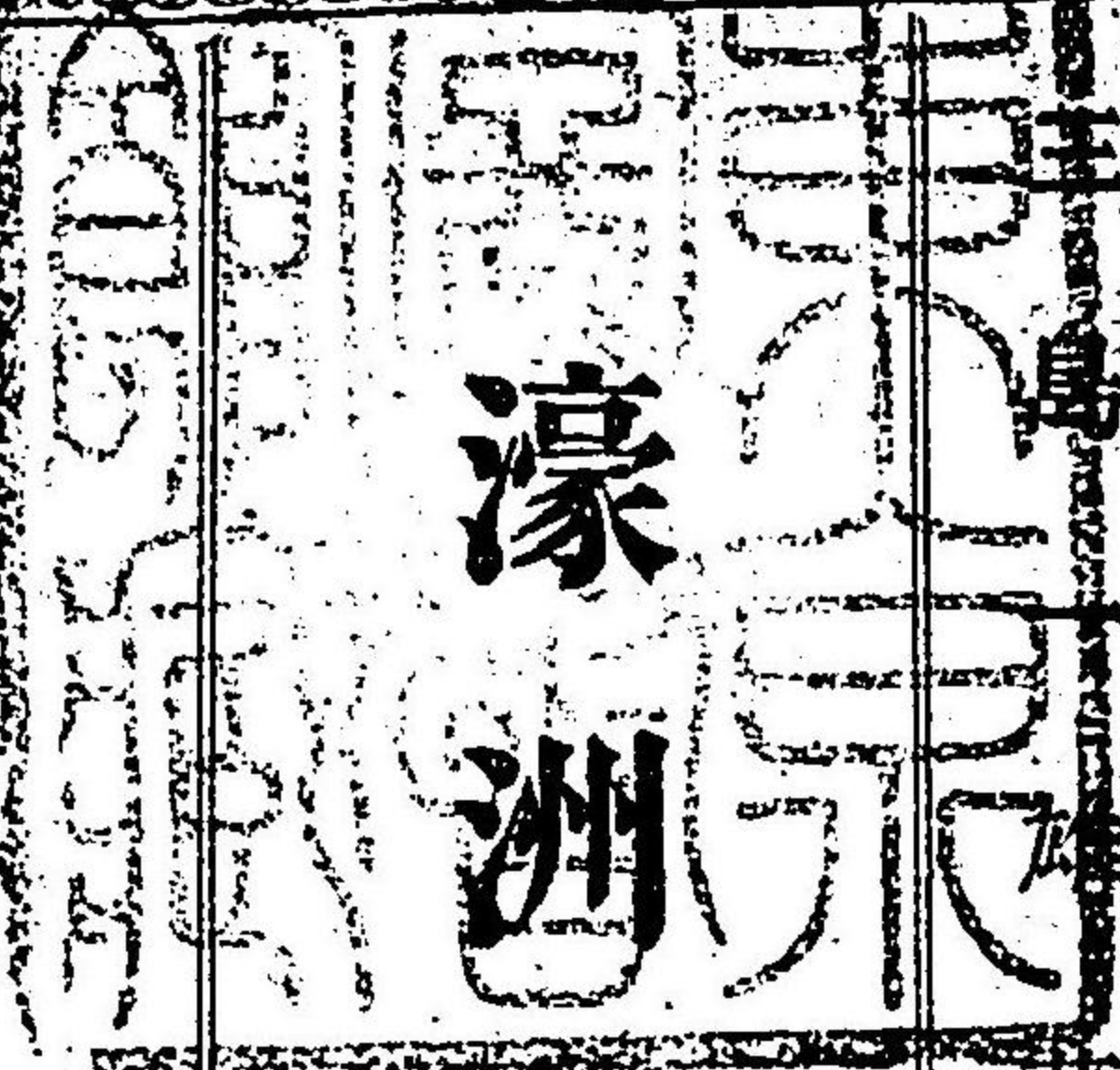


31-156.

2-90.17

伯爵 大隈重信君意見  
矧川漁長 志賀重昂君詠詩  
每日新聞社主 肥塚龍君序

在前印度カルカッタ府 工藤義介君書簡  
南嶋王 田口卯吉君序  
暗陸探檢家天劔子 田代安定君總評



濠洲及印度 完

發行所 每日新聞社



## 海外貿易に關する伯爵大隅重信君の意見

余一日、（註）を訪ふ、談海外貿易の事に及ぶ 伯即ち左の如く論ぜられ  
たり寫して卷旨に掲ぐ

世人輒もすれば日本今日の位地を論じて危急なりと云ひ貧困ありと稱  
す然れ共其の何の故に危急なるや將た貧困なるやと云ふに至ては毫も  
其の證左を示す能はず已れ自ら信じて危急なりとす國運危急あらざら  
んとするも得べからず已れ自ら信じて貧困ありとす國力困耗せざらん  
とするも得べからず去れば日本今日の地位を論じて危急なり貧困あり  
と稱するものも自ら好で危急貧困を致さんとするものと謂はざるべか  
らず

父母が其兒を教育するに二ツの途あり一は之を鞭撻と之を叱咤と其足  
らざるを擧げ其の及はざるを示し呵責交々至るの途是れあり他の一は



之れを褒賞し之れを勧誘し其の長けたるを擧げ其の進めるを示し百般の缺點を没して提撕轉た盡すの途是れなり而して前者の結果は勇氣欠乏の人を成育し後者の結果は才能豊満の人を成育す國民を導くと亦た斯の如し未だ國の將に興らんとするに當りて絶望の聲を聞きとてなく未だ國の將に亡びんとするに當りて希望の聲を聞きとてなく亡は他動的作用に非ずして全く自動的作用に屬せり何れの國か自から亡ほさずして人之を亡ぼしたるや又何れの國か自から興らずして人之を興したるや去れは假令國家に諸般の欠點ありとするも其の長所を示して之を勵まよ汝自らは世界の主人たるべき約束を有せるものなりと説くころ國家に盡すの親切と謂ふべけれ

洋の東西に亘りて國を建つるもの甚はだ多しと雖ども四千萬の人口を有し十四萬七千方哩の地積を有し二十年間に國力の五倍したる者曾て例あるとなし見ずや伊太利は近年歐洲紛亂の間に崛起して五大強國の

一に數へらるゝに至れり而して彼れが人口は八百萬以上を吾れに譲り彼れが版圖は三萬三千方哩を吾れに譲り建國以來年として國債を起さざるはなく殆ど吾れに十倍の公債を有し輸入は常に平均を得ず輸出に二倍の輸入を仰ぎ居るにも拘はらず天下擧りて強國と稱し居るにあらずや且つや倩々伊太利の地勢を案するに北は佛國の強敵を受け東は奧地利に接し南は地中海上英の威力を控へ一旦事起らは絲の亂るゝが如く其の措置の困難なる想像するに堪へたり況んや羅馬法王なるものは昔時の名を藉りて國政の上に少なからざる干渉を與へ居るに於ておや試みに之を日本に比すれば國勢の懸隔實に異常と稱せざるを得ず然るを論者漫りに語をなして日本の貧弱を號叫す吾其理の由て來る所を知らず

蓋し日本國民は確信の民あり希望の民なり狐疑絶望の民に非ず二千有餘年來吾國民が成し遂げたる大業を常に此の確信と希望との結果なら



ざるをなし支那の古聖は夙に彼れ何人吾れ何人と教へ吾等が祖先を親ら此語を履踐して偉大の事蹟を残し去れり吾等は如何なる大業も必ず成し得べしと確信せざるべからず又た如何なる幸運も必ず求め得べしと希望せざる可らず此の確信に據らず此の希望を棄て、強ちに國家の貧弱を説くが如きは言語に絶へたる次第なり

維新以後内國施政の紛亂に際し國民舉りて海外の事を放棄したりと雖ども今まや時勢の趣く處潮流の走る處漸次に偉大の冒險企業家を出すの傾きあり是れ即ち日本國民が海外的勢力の暢發したるの證據なり且つや海外貿易の實況は比年驚くべき割合を以て進歩せり海外貿易の進歩は即ち内國生産力の進歩に比例するものなれば内國の産業も亦た同様の發達を爲したるや疑を容れず蓋し昨年輸出入不平均の一條は氣候不順と稱する自然の作用より起りたるものにして米穀輸入の過多なり一は例外の事のみ敢て憂ふるに足らず又生絲の不捌は國內の事情と歐

洲市況の不振より來したる一時の現象にして毫も意とするに足らず予の意見に依れば昨年二千五百萬圓の金貨流出したるにも拘はらず其の趨勢は依然として貿易進暢の点に向へり之を祝せずして可ならんや今や國政緒に就き年少の志士は將に海外に向つて其の力を求むるの時至れり宜しく自ら大業の成功を確信し幸運の下降を希望し倦まず恐れず撓まず屈せず一直線に進行の道を求むべきなり



## 工藤義介君書簡

六

前略天涯相遇ふ豈偶然ならんや情思綿々として忘れ難きも亦た宜なり  
矣本月九日の夜吉生號にて君と手を分ちしより爾來面壁終日亦語るの  
友なと思ふに本狀到着の頃は君は既に舊知己に往事を談じ居らるゝの  
時からんと被存候御約束の物品は悉皆取寄せ了れり別紙目錄吳々も御  
心懸願上候此頃動物園外の巷路に出で不圖君と手を携へて日頃の赤情  
を吐露したる時の事を想起し感慨に不堪候凡そ團々たる宇宙漠々とし  
て意味もなく思慮もなし紛々たる人事聚合離散の跡唯是れ秋風の吹く  
がまに／＼散り行く落葉の形に異らず然れ共此の濛々暗々の世の中に  
唯一つ意味有り氣に小生が頭腦を犯し來るものは古今の歴史を貫徹し  
たる人間の血涙是れなり此の血涙を指して君は異種民族滅却の新氣運  
に名けられたり小生は高説を聞て始めて人類の動作は慥かに意味ある

ものなることを知り人間行爲の趣く處は唯異種民族滅却の事より外に他  
あるなき所以を承知致し候

此の大潮に抗し東洋民族の運命を負擔せんとする吾等の任は誠に重も  
し然れ共熟々思ふに日東興起は宇内文化の趨勢に照して争ふ可らざる  
の氣運なり此の氣運に乗じ一氣呵成二千有餘年來蘊蓄したる英氣を吐  
き來らは天下何れの民種か避易せざらん

御約束に依れば君には櫻花爛熳の候神洲の山河を背にと再び長征の途  
に上らるゝと思ふにオグリー河の軟風は君が歸來を待ち比馬拉亞ガン  
シスの山河亦君を迎ふるものあらん願はくは君決して已れが周圍の空  
氣に感化を受くることなく事務調はく速に來印あらんことを希望に堪へず  
君が再度の長征を思ふて一日千秋の感を爲す者は誰れぞ唯だ大印度の  
廣野に蹠蹠して目は愁胡の如く口常に火炎を吐き異種民族を叱咤せん  
とする君が同胞の友儘よ狂一に外ならず妄言多罪

七



廿三年十一月廿五日

三島一雄賢兄

工藤義介拜

八

拜啓十二月廿日附の御書狀拜誦御歸朝後の事情委細承及候假令米穀の不作生糸の不捌など申すことなく日本は飽迄景氣宜いとするも元來日本の商業社會は信用地を拂ひ前後の失敗常ふ事業家を畏縮せしめ手を袖にして彼碧眼人種が遺利を拾ふに任するの有様なり迎も貴下若しくは小生今日の心事は其の境を實踐したる人の外は何人も承知不致唯々獨立自信の外は無御座と存じ候兎角日本人は西班牙よりも一層猜疑心に富み外國人と云へば之を崇拜し乍ら自國人に向て冷淡なるには驚入るの外無御座候幾千萬の資財を投じて暗陸を横切るとの徒手人の奴隷となりて五洲を横行するとか申すとは決して難事に非ず唯貴君の如く弊衣垢面身外一友なく身外一物なきも猶能到處に奇利を博し日本國民の

資格を具へて彼等の間に對立し優々太平洋印度洋を横行したるか如きは到底碧眼人種の及ぶ處に非ず吾輩亦た阿信の比羅夫と共ふ女眞の地を收めたるもの、子孫なり加藤鬼將軍と共に馬を長白山東に躍らしめたるもの孫裔なり何條彼碧眼人種に後れを取らんや予爰に貴君か長途の遠征と奇利の取得とを祝し謹んで二代目呂宋助左工門今錢屋五兵衛の稱號を奉らん貴君其れ笑を含むや否や  
日印間貿易の事前途好都合……依て小生は試賣の爲め直に歸朝の途ふ就き一先つ貴下に面すべくと存候早々

二十四年一月十三日

三島一雄様

工藤義介拜



## 題三島君所著濠洲及印度

十

陸哉陸哉有斯大濠太利。日本男子請往矣。土藏黃金  
兮含煤炭。天開畫圖山海美。況有莽蒼之野欲吞天。綿  
亘四十八萬方里。菽麥可培兮牛羊可牧兮。三億生靈  
可住于此裏。好個山河欲付誰。似待我日本男子。須將  
汝略拓此國。須將汝氣壘此地。驅逐白哲人種是汝任  
日本男兒皆奮起。好拓此國兮壘此地兮。好垂鴻名于  
千秋萬古之大歷史。

二千五百五十年三月

矧川漁長

### 序

近時小説稗史ノ著大ニ江湖ニ行ハル世人稱シテ文學勃興ノ時トナス、  
今夫レ文學ノ勃興スルヤ余甚ダ之ヲ美ス然レモ其ノ弊或ハ浮誇ニ失シ  
靡薄ニ流レテ終ニ世ノ風教ヲ害スルニ至リテハ又大ニ議論ナキ能ハザ  
ルナリ、毎日新聞社員三島一雄君先キニ飄然去リテ海外ニ遊ブ當時余  
其ノ之ク所ヲ知ラズ、既ニシテ君カ紀行躍然毎日新聞ノ紙上ニ顯ハレ  
君カ經驗實歷スル所余具サニ知ルヲ得タリ三島君素ト詞才ニ富ミ文章  
ヲ善クス而シテ此紀行タル悉ク實地見聞スル所ヲ生寫シ來ル、是ヲ以  
テ筆々飛動シ句々聲アリ讀者爲ニ倦ムコト知ラズ蓋シ近來得易ラザル  
ノ文字ニシテ夫ノ靡浮ニ流ル、ノ類ニ非サルナリ近頃君紀行ヲ錄シテ  
一卷ト成シ題シテ濠洲及ヒ印度ト云フ、將サニ印行ニ付セントシテ  
余ニ序ヲ請フ、乃チ數言ヲ記シテ以テ卷端ニ弁スト云

明治廿四年三月

田口卯吉誌

十一



## 序

十二

海港開けとより天下遠遊を試むる者多し、祖先の餘財を提て月をテ  
ムス河橋に望む者あり、事を調査に托して花を巴里の層樓に折る者あ  
り、虚名を外遊に買ふ者、債鬼を桑港に避くる者、其の數擧げて數ふ  
可らず、而して其の得たる處を問へば空々如たり、其の十を費して五  
を得たるもの天下幾人かある、明治二十三年八月比叻金剛の二艦南洋  
に航するの擧あらんとす、三島君我に來りて曰く請ふ遠航を試みん、  
我曰く濠洲の海、天竺の山、錢ある者は友となり、なさ者は仇となる  
兄何に據りて此の敵地に行く歟、君曰く我に一莖の筆あり請ふ少しく  
意を安んぜよと、余其の志を壯なりとて而してまだ決する能はず、之  
を社友に謀る社友曰く、彼れ平生南圖の志あり之を許すも盲遊啞行の  
比にあらざらん、議此に決と同年八月君比叻艦に乗じ品川灣を發す、

君外にあること一年有半此の間汽船の吾邦に寄港するものあれば必ら  
す耳目の觸るゝ處を記して毎日新聞に寄贈せり、完全を望む者より觀  
れは其の記事或は慊然たる處なきにあらざるも無味の事物を記して太  
宰の味あらとめ讀者に利益と快樂を與ふるに至りては近事旅行者の記  
事中比類を見ず彼の盲遊する者啞行するもの君が紀行を見て赧然たる  
べし、近日君、濠洲及印度と題せる一書を刊行して世に公にせんとし  
序を需む余君が南遊の顛末を記して之れに送る嗚呼此の旅行や餘の旅  
行に非ず筆の旅行と云ふて可なり

明治二十四年三月

友人 肥塚 龍

十三



## 總評

十四

蓋し吾人世界は黃白黒三大人種優存劣滅の一大碁局中に坐せり、今や白人の勢ひ潮の方に進み風の方に發くか若し、而して黃黒の二人種は常に其後に瞠若たるの狀あり、嗚呼滔々たる亞細亞大洲處として渠か蹂躪の慘跡を留めざるはなし、即ち印度は世界の金庫と二億五千萬の生靈を擧て不列顛民族に隸屬し、安南は既に羅甸民族の蠶食に委し、暹羅尙ほ局外中立の体ありと雖とも撒遜民族の其富源に流涎するあり我か一葦帶水の高麗半島は將に薩刺瓦民族の別業地たらんとする者の如く、妖雲暗澹として一國獨立の命脉風前の燈火に鬚鬚たる者あり、此間に介立きて渠と輸贏權の對手資格を現存するものハ僅に支那と日本あるのみ、而て支那は嘗て佛人の脅嚇に遇ひ米利堅民族の厭嫌を受け、傍ら強魯の隣境に屯田を策として彼得故帝の遺詔を此宏域に向て敷

行せんとするあり、因是觀之は黃人種諸國は皆今日一大危運中に立つを免れず、噫何の日か又何の年か西北溟岸より滔天の猛浪亞細亞の大陸を掃蕩して東洋の瀕岸を席卷し來るも圖り難けん、股鑑近きにあり豈未雨に先つの計忽せにす可ん乎、豈我か三千九百餘萬の神洲民族は枕を高ふするの秋ならん乎、然るに此機に際し悠々焉として太平を謳ひ恬憺如として無事を装ひ、島國裏の小天地に蟄伏し徒に小名利の小輸贏に齷齪乎として伍々相仇視し朋黨相媚嫉し、却て宇内の大碁局を雲烟視して兄弟牆に闖くの狀觀を呈露するか如きは豈神洲男兒の体面に背戾するものなきを得ん乎哉、友人三島一雄氏蓋し嘗て茲に感激奮發する所あり以爲らく、方今我邦の急務ハ専ら貨殖の大計を講し元氣の喪衰を回復し國權擴張の基趾を補ふに在り、然り而て貨殖の要計と海外貿易に若くは莫し、海外貿易の道を伸暢せんと欲せば廣く四疆を經歷して、彼の事情を審詳にし而後ち事に從ふに在り、好し從今微軀

十五



を奮て衆に率先と彼の風俗商況を通觀して之を筆舌に舒へ、或は躬行  
 と以て我か貿易社界に外競の意向を起さしめ、傍ら夫の所謂蝸牛角上  
 蠻觸の争に違々たる諸輩の迷夢を醒覺し、此等の士をして眇爾たる東  
 洋天の外に挺身雄飛せしむるの材料を採撿し、嘗て委縮し來る大倭魄  
 を發揮し白人種社界の活劇場に臨みて彼を凌駕し、偉業を建る快男子  
 の輩出するを見るの樂さに若くは莫と、而て四海の廣き豈固より業を  
 一舉に期す可けんや、機會を得る毎に徐々冉々其部分を追て之に赴く  
 未だ晚と爲さる也と、爲に準備する所あり、君爲人剛忍不羈天才夙達  
 胸中浩々焉として萬篇の文章を貯へ、行爲往々人の意表に出るものあ  
 り、予初め其名を聞て未だ其人を見ず適々明治二十二年の秋比叡、金  
 剛の兩皇艦舳を並て大平洋諸島航海の舉あるに臨み、君奮然筆を載て  
 比叡號に搭し異俗を天荒萬里の外に探る、予も亦當時官用を帶て金剛  
 號に托乘し、爰に天涯の知己を得たり、予性迂粗善忘歸朝後未だ一周年

あらざるに當時の形跡半は茫乎として夢の如し但記す嘗て布哇群島碇  
 泊中君とカメハメハ費舎に邂逅し途に土人屋を訪ひ、本島の一奇傑維  
 兒額古士の叛狀を審聽し、去て鎖石山頭の月に傲吟し俱に磯岸に跌坐  
 して談笑自娛の際、椰子の漿液を啜て村酒に代へ、金波溶々海雲低迷  
 の處に扶桑の郷天を帳望して五洲風雲の變滅より東洋現勢の議論に迫  
 り、談甜なるに及び興に乗じて脚邊に狼籍たる椰殻を蹴り、突然瞋目  
 疾呼して曰く、東洋諸國の危運は猶ほ一片の冰塊に乗して太平洋に漂  
 漾するが如し、我か四千萬の大和民族は當に臥薪嘗膽の秋ありと、後ち  
 夜に入て君と蔗田椰林の間を且歩し且談し、ホノル、埠頭の端艇に棹  
 と袂を分て艦に歸りしを、後ち一月餘を経て沙莫亞群島「アピア」港頭  
 に會合す、君卒然告て曰く僕今日艦を辞して濠洲に赴かんとす、余驚  
 て其故を問ふ、君曰く常に世人か寶山瓊海視する所の南洋群島を今次  
 實踐するに嘗て聞く所と相違するものあり、此沙莫亞群島の如きも一



時獨米の占領事件にて世論囂々たりとに比しては吾人の深く望を屬するに足るべき價直を見ず、他の群島に至ても過半大同小異ならん、若かず濠洲の大陸に渡りて更に有益の件を探究せんにはと、余曰く大に善し但た夫の啖人性土人の宴肉に上るの不幸に遭ふなくんは他日復た快論を聞んど、此處に君と手を分ち予は非支及ひ麻利亞那の諸島を踐歴し、昨春歸京して無爲碌々將に一年を過んとし、除夜の前一日市井に逍遙す、街上の光景自ら平日に異り、到所人語喧噪車馬駁擊峩冠盛裝、滿城の汚塵雲霞の如し、日本橋を過ぎ將に江戸橋に向はんすとす、偶々見る一介の壯年身に鼠黒色の葛衣を穿ち天を仰て大笑し、新野市上の單福然として緩歩と來るを、余其奇裝に驚き暫く判定に迷ふ、其人卒然握手して曰く予は曾て沙莫亞羣嶋に手を分つ所の甕陽の僞仙天劍子ならずやと、因て瞭然語なるとの稍久ふして曰く、誰か期せん日本橋畔濠洲大王に謁せんとは、願くは其後の經歷を聞んど、君曰く濠

洲に在ること數月にして印度に渡り別後年を閱して如今歸り來ると、予曰壯遊ある哉爲に問ふ君は常に貨殖の大計を陳すと雖も、元と感情的の國家主義者にして自家の溪囊に至ては君が郷里の錢屋五兵衛白尾唐人屋と孰れぞ、願くは少く其秘密を啓けと君慨然として答へて曰く凡大丈夫たる者豈苟も區々として一物に拘はるを要せんや、宜く機に臨んで變に應すへきのみと、予地を蹴て歎て曰く快なる哉快矣、此膽識あつて初めて不測の域に入るへきなり、他日復た君の破天荒の快論を聞かんと、各東西に分る後ち竊に謂らく此寒威凜烈の候に當り、殊に人群雜踏の間を君か葛巾敝褐の古賢人然として大道濶歩悠悠自得の色あるものは、或は世の澆季を憤り特に匡正の意に出るもの乎、將た若意山那教の三味悟道に入て然る者乎と、後ち君か印度紀行を閱す中に言あり霜風肌に徹するの頃猶印度の夏衣を裝ふて、當時雄豪の意思を忘れざらんとすと、予於是大に其抱負の凡ならざるに感し、爲に意



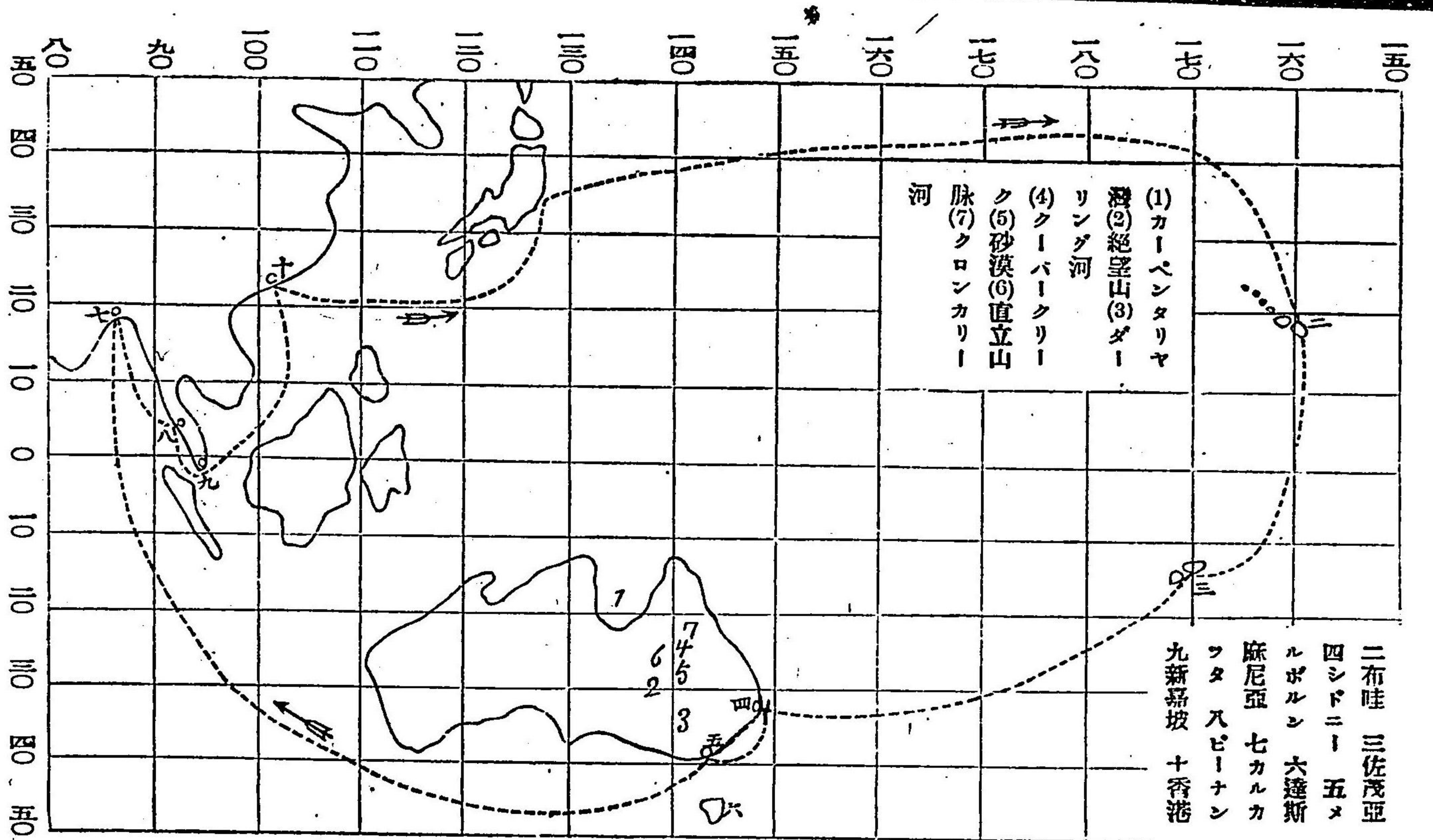
を起し全篇を玩閱すれば文章流麗、渾圓淡蕩、猶其人に接するの如き中に一種の奇氣鬱勃として紙上に躍發し、寫し難きの精神活如として人を動かす、議論痛快眼識高明、其布哇の衰滅を吊ふの筆は自ら悲愴の聲を發し、沙莫亞の蠻狀を寫すの筆は自ら鬼氣を帶ひ、濠洲の部は専ら意を經濟に屬し、商業上の關係と殖民上の利害を講究し、印度に在ての主として貿易の要況に着目し、傍ら風俗宗教を審察して、學藝社界に必要な材料を與へ、思を亞細亞大陸の現勢に潛めて危機東漸の源委を推究し、轍を忘國の遺民に鑒て東洋の將來に箴戒を授く、嗟呼君か子々たる孤躬を挺て萬里の險濤を冒し、蠻霧瘴煙毒草菁々の疆を跋渉して、到處器識の士を訪ひ、風を觀、俗を察し、山川恍惚の際に此雄奇快絶の鉅篇を留むるに至る、其精厲豪宕の氣象は眞に欽す可きあり、予曩に官命を帶て露國に遊び、所在を漫遊して佛國が琉球八重山島に志ある所以を聞知し、歸り來りて復た官命を帶ひ、八重山島の

寄居蟲を友とする者年あり、爾來心事世と違ひ復た豪快の志を馳するに由なし、爰に君に遇ふて志氣頓に暢發す、予不文と雖も聊か來歴を舒て、知己の情に酬ひざるを得んや、

皇歷二千五百五十一年三月

天劍子 田代安定識







本書目次

發端 布哇行

布哇の國勢○日布間の關係○布哇の獨立問題○雜記○叛兵王宮を圍む○ワイカハルの少年○クヌアキア親王○ヒロ港

佐茂亞行

パゴク港○パゴクの時雨○アビヤ港○サツアイ行○泰西館のグアム士人

濠斯太刺利亞行

見聞雜記

シドニーの繁華○メルボルン行○コーヒーの月○ポルト、ファイリ  
ノリスブライトンの九谷橋○セントキルダの感慨○ぶらいどんの月○ポルト、ファイリ  
の放談○達斯麻尼亞人種に就て

日濠間の貿易 勞働問題

殖民地特發の事情 勞働問題

濠洲大陸探險史

印度行

見聞雜記○昔時の印度人と今日の印度人と日本人との關係○カレカッタに於ける諸國民族の勢力○印度社會改良問題○宗教事情○印度の商業○印度貿易意見○ヘスチングス 地球館上の月

歸路

濠洲及印度

三嶋一雄 著

發端

布哇行



明治二十二年八月十二日余は南洋貿易組合の一員として當時の遠洋航海  
船比戲遊に便乗し十三日品川を發し十四日午後二時横須賀を抜錨す  
比戲遊の海軍樂隊比戲金剛の兩艦を追ふて別を送り告別の曲を奏して  
名残を惜む句調練なりと雖ども意匠頗る悲涼なり君不聞胡笳聲最悲紫髯  
羅西胡人吹吹之十曲猶未了愁殺樓蘭征戍兒と云へる古調も斯くやと思  
れたり總て彼の胡樂あるものと國情の然らしむる處沙漠的移住的漂泊  
地の性質に富み土着民族の得て知る可らざる趣味を存せり新橋より見送  
られて品川に至る時用務匆匆にして名残を惜む暇も勿りしが今此の境  
遇に接して事新らしく離別の情に堪へざりき斯くて午後七時頃となれば

濠洲及印度



房州の山々を後方模糊の間に殘し縷々絶へざる煙を故郷の方に送りて靜々と進み行けり

是より船は東北に向て進み金華山の沖に出で一直線に進行し東經百八十八度を越へ遂に俄然方針を轉じて南方に下れり此の間見るもの聞くもの一として異常の感慨を起す種子あらざるのなし黄金なす礎を踏み分る琵琶の春の竹生詣で、白妙の富士の高根を見上ぐる遠洲灘の夏の船路も航海と云へば氣象の雄壯なるものなるに況して是れは烟波一萬里雲寰を破りて赤道圏内に入るの行にしあれば其の風情ハ亦た格別なり夜は月光苦んで鳥影黒く波濤の碎くる音宛ながら千雷の一時に落るが如く晝ハ日色微にして狂瀾山を爲し飛沫粉散して甲板を襲ふと北極地方の降雪に似たり、青海原通ふ信天翁の鳴く聲に屢旅情を動かし故郷より吹き送る秋風に北緯四十度外の頃朝夕の肌寒く、千々に物思ふ思ひは黒雲の隈にさ迷ふ孤月の跡を尋ねて苦しく、故山に友を見る夢は沖津の外に蹈み迷ふ千鳥の影を追

ふて揺られ情思綿々として陸上の物に非らず時に海上の荒るゝに至りては食卓の彼方此方に動きて美汁の覆へると屢々あれハ佳味を嘗めん由もなく釣床の最と狭くして身動きだも出来ねハ過ぎにし昔を見なん夢もなしと雖ども之に馴るれば格別の苦も覺へず深夜濤聲に眠覺めて靜かに將來を思ひ過去を尋ねれば亦た思ひ得る處なきにしもあらず

比叡艦ハ九月十四日滿三十日の航海を了り二十一發の祝砲と共に布哇國

ホノル、府にぞ着しける

#### 布哇の國勢

ホノル、府ハ布哇全州十一ヶ島の首府にしてオアフ島中にあり四十年前に於りてハ加奈加土蠻の部落が處々に散點したる荒涼の土地なりしが今は輸出八百二十一萬六千四百五十八弗(一千八百八十七年の調査)輸入四百三十四萬五千一百五十七弗(同上)の良港とはなれり布哇全州の輸出入合計ハ一千四百五十萬弗(同上)を上下するものなるにホノル、港のみにて一千



二百五十萬弗の物貨を出入するとなれば同府が布哇全州に於る勢力の如何は推して知るべきなり、布哇全州の人口惣計は一昨々年の調査に依るに八萬六千六百四十七人に過ぎず、今此僅少なる人口を有する國が毎年一千五百萬弗の輸出入を爲し得べしと、吾輩の夢想せざりし處なりき、何となれば若し此の比例を以て日本を推せば日本の人口は布哇全州の四百倍に、適するもになれば其の輸出入は六十億萬弗に達せざる可らず、然るに日本の貿易物高の輸出入合計一億萬弗に過ぎず、布哇國民一人の富力は正に日本國民六十人の富力に相當するあり、去り乍ら爰に一の注意すべき事あり、布哇全州の人口總計は八萬六千六百四十七人なれども此の中には生存競争の舞臺より目出度く劣敗の悲運を取りたる加奈加民族(布哇の土人)四萬四千一百三十人を包含し居ると是れなり、元來加奈加民族は如何なる罪のある故にや、年々驚くべき速力を以て減少するものなるが故に、彼等は生産力を有する經濟世界の生物と見做さべからず、一千八百二十三年(六十八

年前)に布哇土人の惣計十四萬二千人ありしが、七年以前の統計にては十萬人、即ち全人口の七分の五を減ずるに至れり、誠に哀れなる事なれ、其彼等へ到底地上に其の跡を絶つものとなるは遠きにあらざるべし、左れば前に余が示したる計算の其實を得ざるものにして、布哇全島の人口惣計八萬六千六百四十七人より土人の數四萬四千三百三十人を引き去り、残り四萬二千五百十七人を純粹の布哇人口と見做し、此の人口を以て輸出入合計一千五百萬弗の貿易を營むものと見做すと、至當の見解ありとす、此の割合に依らば日本國民の富力は布哇國民の富力に比して、一百二十分の一に相當するものあり、豈に案外千萬の事共ならずや。

吾々日本國民の進歩の一點に於ては敢て他の人種に後れを取らざる覺悟なれども、試みに布哇國が近年如何ある進歩を爲したるかを問へ、亦た心易がらざるものあり、一千八百五十年(四十一年前)に此の國の輸出七十八萬三千〇五十二弗なりしが、千八百八十七年の調査に依るに十三倍の輸出



を見るに至れり又た同年の輸入は一百〇三萬五千〇五十八弗なりしが同じく一千八百八十七年の調査にては四倍の輸入を見るに至れり初め此の國の輸入國ありしが今は輸入に二倍の輸出を爲すの國とは成れり猶語を替ふれば三十七年間に輸出の輸入に三倍の速力(四)に對する十三を以て進歩したるなり斯の如き現象は他の國に於て殆んど見るべからざる異數の事あるが此の國に於ける砂糖製造の業が非常の進歩を爲したるもの唯一の原因なりとす即ち一千八百六十年(三十一年前)に、砂糖製造の惣高壹百十四萬四千二百七十一封度なりしが五年前の調査に依るに二億一千二百七十六萬三千六百四十七封度となれり右の次第あるが故に歲入の過る十年間に恰かも二倍の額に達したり豈に異數の進歩と謂はざるべけんや

斯の如く布哇國が過る十數年間の進歩の驚くべき程のものありと雖ども此の割合に依りて今後限りなく進歩をべきものとは思はれず何となれば布哇は唯だ一の砂糖製造に依りて其の國を維持するものにして其の砂糖

製造業の今後幾十年の後は最早新に耕すべき餘地なきが爲め大に其の進歩の度を減ずるものなるべけれどなり布哇全島の輸出にて九百四十三萬五千二百〇四弗十二仙の中砂糖の輸出總高は八百六十九萬四千九百六十四弗〇七仙なり知るべし布哇國の進歩の即ち砂糖製造業の進歩なることを

以上の所説に依りて讀者の布哇が一箇の勞働國なることを知るべく従つて勞働の價直が非常に高き國なることを知るべし此の國に於て最も世人より尊敬を受くるもの、勞働に依りて立身したる紳士なり此の國の勞働の外に需要あるとなし去れ、如何に此の國が富み居ればとて勞働者需用以外のもを供給するが如きとあら、忽ち非常の失敗を來すと疑を容れず是れ余がホノル、に於て實驗する處にして日南貿易者の爲に注意する處なり

### 布哇國の獨立問題



余輩がホノル、府に上陸するや否先づ第一に聴取したるハ布哇の土人獨立を謀りたるの報是れなり曰く

七月三十日土人三百名計り反旗を翻し王城に向てひしくと結め掛けたり是ぞ十數年迄ポイの外に美味あるを知らず椰子の外に木あるを知らず裸躰木槍の外防身の術を知らざりし加奈加人種が漸くに文明の風味を嘗め己れの國あるを知り己れの人種あるを知り己れの故郷あるを知り愛國愛族愛郷の念慮ハ勃焉として禁する能はず獨立自治の氣慨を惹起したるの一顯象なり此に混合人種にてウィルコックスある人あり爰に官命を帯びて伊太利に行き海軍を學び戦争の利器を知得し意氣慨然歸り來りて大に土人の獨立を宣言して曰く布哇の政權ハ總て白哲人種の手に落ちたり布哇亡國あり彼れ白哲人種は今王の暗愚を奇貨としてサンドウィッチ全州の全權を握り漸くにして我輩土人の自滅を謀らんとす今王の在らん翻りハ獨立の事難し今王ハ白哲人種の王なり布哇土人の王にあらず須らく

今王を廢し布哇土人の王を立つべしと今王及政府に背き一時人心を風靡せり此事を聞ける中にも土人中才學の聞へ高きポイドなる人ハ大にウィルコックスの志業を賛成し相共に謀りて遂に七月三十日反旗を翻し先づ其本據なるパラマを出て二人之れが指令官となり一百五十人の壯丁を帥ひて首府に推し寄せ午前四時王宮に到着し難なく宮門内に其地位を占めたり此時同勢諸方より駈け加はり見る間に三百人となれり緩歌慢舞凝絲竹盡日君王見不足漁陽鼙鼓動地來驚破霓裳羽衣曲とは今やカラカワ王の身の上と知られたり此日國王はボンチポール街なる皇后の宮に御幸ありて此夜を此に一泊ありしが夜半後電話機にて宮中亂賊濫入の報を得られしや否や之を顧問官ウィリヤム、ロベルトソン氏に通ず國王ハ終日十二の王宮護衛兵をして左右を護衛せまめたり王宮にては巨魁ウィルコックス王宮の守衛中佐パーケルに速に皇宮明け渡を命ずると數回然れどもパーケル泰然として動がず丸盡き身斃る、迄は彼等の要求を容れずとの決



心を顯へせり斯る中に電話機本局ハ此暴動を各所に通じたれば市中の恐慌一方ならずホノル、砲兵は出兵の用意を命ぜられ葡萄牙人支那人ハ各所に散亂し老幼は皆ボンチポールの丘上に逃れ米國の夫人女子ハ皆米國公使館に難を避け而して中佐パーケルの師ふる兵ハ僅かに十二人にてありたれども此間少も屈せず能く敵に當りて數時を支へたり此日午後政府ハ内閣會議を開きダモン氏使命を奉じ叛將に降服を命ずるととなり氏ハ命を奉じ王宮に入らんとせしに彈丸亂飛進むべからず且つ叛兵ハ野戰砲を發し官の銃隊に當り銃隊は狙撃兵をして敵を狙撃せしめ一時ハ勝敗何れに皈する歟と疑はれし程なるに官兵追々増加し衆寡敵せず午前十一時彼等は皇宮圍内の人家に身を潜め亦出戰の勇氣なし此間銃隊の一分ハ一の寺院に地位を占め他の一分は屈強の地の人家に地位を占め午後ハ叛兵降服を申込むより外に道なきととされり巡查屯所と此日警報の中心となり而して警察署ハ戰爭中官兵の本營となれり午後一時叛兵のパーケル氏

に違る者三十人彼等ハ直ちに武器を剝奪されし後ち獄に投せられたり斯くて賊勢次第に衰へ同日午後四時官兵は賊の本營を襲ひ且つ義勇兵の一隊ハ宮門の開け放しあるを幸ひ直に入り込み賊の全軍を擒にし七時に至り砲聲全く止み騒亂鎮定したりと余が布哇に到着したるハ此の騒亂後間もあき事なれば國人の志氣猶激昂の中に在りて内外の談話ハ常に此の事を中心とあせるもの、如く見へたり

ワイカハル、の小庵に少年を訪ふ 閑を偷でホノル、府外の村落に言問んと吟杖を曳てハルラ(檳榔子)の葉娑婆たる路ニユ(椰子)の實參差たる邊を徜徉し行くともなく金剛頂の左の手なる山麓に出でたり屢々路を失して幾度か土人の案内を乞ひ二三丁を走りて怪しかる太郎(ボイ)の生の櫻應に與り四五丁を行て異なる魚類の馳走を受け土人ならば頬を落し兼ねんずる美味を食つて九腸共に吐き出だすの思を爲し曲りくして漸くワイカハル、の瀧に到れり此瀧ハホノル、府中の水を供給する泉の下流あり水清ふ



して石出て憂々として巖に咽ぶ。此の地方に於て得難き納涼處なり先づ流れを掬して喉を潤し樹蔭に風を納れて休息す時に一人の少年顔貌頗る慧敏の相を示したるが余輩を揖してアロハ(ウエルカムに同じ)と呼ぶ依りて同人の住處を問ふに此の灘の邊に小庵を結びわびしき月日を送るものなりとの事なり同人の案内に連れて小庵に入るに室内の裝飾大に歐風を摸し四五脚の椅子を列してテーブルを供へたり坐定まるや同人の朋友とて亦一人の少年入り來れり主人と今年二十四歳にして實名をクワアと呼び普通學校に二ヶ年半私立大學に二ヶ年の月日を送りたるものなり能く英語を話し辨舌頗る流暢にして思想頗る緻密あり曰く願はくは貴下の紹介に依りて一度軍艦を拜見したしと熱心に日本國の大軍艦が當國に來りたるを羨み特に號令官の威嚴を稱揚し何卒吾々土人が一度貴國の軍艦の如き大艦を動かしたきものなりと云へり依りて思ふに此の少年ハ土人中には得易きからざるものならんと察し曩きに現政府に叛きて入牢せられ

たるウイルコックスの人と爲りを問ふに曰く氏はカメハメハ一世以來未層有の愛國者なり余も同氏の舉を賛成し七月三十日にハ小砲を携へて宮殿に亂入したりしが貴下の知る如く土人の總て軍事の教育に熟練し居らざれば忽ち敗を取りて愛國者ウイルコックスハ入牢を命せられたり今日に在りて吾々加奈加人種の獨立を計らんと欲せば先づ軍事の教育を盛んにせざるべからず君見ずやサモアに於る新王と舊王との争ひハ斷えてサモアの不利を來すものなりサモアが吾々加奈加王國に比して猶數層憫むべき位地に在る所以のものは軍事の教育を受けざる土人が相互に國權を争ふに在り今やウイルコックス氏をして此の王國の政治を執るに至らしめば大に加奈加人種の獨立を計り得べしとハ余輩が曩に信じ居たる所なりしがウイルコックス氏一人軍事に熟練して餘の土人は總て不熟練なりしが故に遂に今日の結果を來すに至れり到底今日に於て吾々土人に尤も必要あるものは一般の教育なり二年前舊憲法の行われたる頃は執政大臣



總て土人なりしが今言ふ如く土人の無教育なれば其の爲す處は吾々土人の少年に尤も不利益なるのみなりき去れば吾々は國の獨立を愛すれども今日の有様にて獨立するを欲せずと流弊滔々論鋒火炎を發して勢當るべからず余も只管に同少年の心中を察して哀れを催し國を思ふ真心の何れの民とても同志事なれば意氣頓に投合し談益進み支那人問題に移りたり時に傍に控へたる少年の最と落付きたる口調にて嘗國の獨立を計らんと欲せば先づ支那人問題を決せざるべからず見らるゝ如く此の小庵の周圍に散點する家屋は多くは支那人にして田畝と皆な支那人に屬せり支那人の唯に農業に於て吾々の生業を奪ひたるのみならずタウンに行けば彼等が吾々の生業を奪ひたると言語に絶せり今まより十年前に在りて毎日三弗若しくは三弗半の給料を得ると難からざりしものも支那人の爲めに一日の給料一弗以下に減せられたり如何なる事あるにもせよ加奈加人種が相應の生業を得ざる限りは決して此の國の獨立を維持すべからずと

議論確乎として頗る據る處あり前の少年は氣銳にして急げども後の少年は頗る實際の考案あるに似たり吁若し余をして詩人ならしめば滿腔の熱血を漑ぎ盡して兩少年の志氣を助くべけれども熟々今日加奈加人種實際の有様を見るに如何に千言萬語を費し如何に悲歌慷慨を唱ふるも最早回復すべからざる悲運に陥り居るものにして此の人種の滅亡は余輩が再遊の頃必らず實際を目撃し得べけん彼等は今や兵糧征めに征められ居れり陣營暖かにして喇叭聞こへず茅屋蕭然として砲聲到らざれども戦征最後の手段たる兵糧征めに到底堪へ得べしとも思はれず余は生れて以來此の悲境に遭遇せず今日實際を目撃するに至りては實に從來の感慨に異なる深き分別を生ずるに至れり吁圓々たる青空の月はワイカハル、の水を照して何か故に此の兩少年の心事を照さるや爛熳たる地上の花は米國處女の衣裳を飾りて何か故に此の茅屋の庭園を飾らざるや鳥の將に死なんどする其鳴くと悲しく人種の將に亡びんとする其の訴ふると愈悲し



加、奈、加、人、種、滅、亡、の、恨、み、の、此、の、兩、少、年、の、口、を、藉、り、て、日、本、の、旅、客、に、訴、へ、ら、る、手、の、正、に、兩、少、年、が、議、論、を、以、て、加、奈、加、民、族、な、る、既、滅、の、魂、魄、が、白、眼、に、彼、自、哲、人、種、を、疾、視、し、悲、涙、血、涙、を、垂、れ、て、恨、を、永、遠、無、限、の、地、下、に、吞、む、も、の、と、信、ず、る、なり、

加奈加土人の既に生産社會に敗北を取りたるが上今や彼等が使用する處の言語も亦た將さに敗北の悲運に遇はんとす思ふに土人が巧みにオホヨサヨナラを語りモーニンググールドバイを叫び揚々乎たる間に己れが本來の言語の歩一步其の生活を縮むるなり嗚呼言語の勝敗の人の勝敗なり亂りに本國の言語を侮慢し外國人の鳩舌を摸するを得意とするもの、實に年少なる加奈加土人に異ならずホノル、府にエレレ新聞ある者あり半バ土語にして半ば英語なり中に一文書一歌曲の中に土語と英語と混合し居るもあり予はワイカハル、の少年に汝等が最も面白しと思ふ加奈加の歌はと問ひしに書して示したるものを見るに左の如し

## Sweet lei Lehua.

1ST. Be still my punuwai E nae iki nei Haru malie hahenahē sweet lei Lehua.

2ND. Ever flesh my memory of dream of thee my sweet at morn and sunsets rays Sweet Lei Lehua.

斯の如く彼等が心情を吐露する歌迄も五分の英語を加へて本來の土音を消すなり是れ蓋し止を得ざるの數にして加奈加言語の如きハ到底生存すべきものにあらずと余は斷信して毫も疑はざるなり

守舊黨の首領 十月十二日當國の舊皇族クマアキア氏に面したり同氏はカメハメハ第三世の子にして正當に云はゞカメハメハ第六世の王位を受くべき人なりカメハメハ第四世ハ同氏の兄弟にして五世と甥なりと聞けり然れども品行修らざりしが爲めカラカワ今王に其王位を取られたるな



り年齢三十七歳一人の妃を有し博識多辨にして能く英佛露其他獨逸の國語を話し今の外務省の秘書官たり余輩同氏に問ふに當國の支那人問題と加奈加政府の獨立とに付き貴下は如何なる意見を有するやと云ふを以てせしに氏は大に世人と見解を異にし加奈加政府の獨立即ち余が王位に上り得るの手段は國內の宜教師を放逐するに在りと思考せりと答へたり餘り意外の答辨に驚き貴下は如何なる宗教に屬するかと問ひしに余は無宗教なりと答へたり其れより同氏に宜教師放逐の理由を尋しに眼を圓くし手を振りて大に宜教師を罵り彼れ宜教師はバイブルを携へ來りて上帝を崇めよと教へ外面には非常の慈善を唱へて何時の間にか土人より土地を奪ひ身代を造りたる後ハ用捨なく歸國するあり愈土人を苦しむるあり到底彼宜教師を放逐するにあらずんば決して加奈加土人の獨立を維持すべからずと論ぜたり元來氏は當國頑固黨の首領なれば斯く論ずるハ無理ならぬとなれども其言ふ處全く理由なしとすべからず亞米利加人が布哇の

土地を占めたるハ九分通り宜教師なりと云へり

左り乍ら思ふに氏が王位を得ざる所以のものは實に始めより宜教師を嫌ひ基督教を罵倒したるが故なるにハ自ら心着かざるもの、如し氏に進んで支那人問題に就てハ大に支那人を稱揚し余ハ支那人と結合し支那人の助力を得て加奈加の純粹なる政府を造らんと思考せりと云へり夫れより話頭を轉じてウイルコックスの事に及びしかウイルコックスは火曜日に宣告さるべき筈なりとて大に憂愁の顔色を爲せり依りて余は同氏にウイルコックスの處刑は如何が想像さるゝやと尋ねしに多分死刑に處せらるならんと答へ同時に氏は落涙せりこは氣の毒の事よと思ひ貴下はウイルコックスを能く知り居らるゝならんと話し掛けしにハウイルコックスハ余を王位に即けん爲めに現政府に叛きたるなりと氏は答へたり氏がウイルコックスを依頼し居ると斯の如し亡國の王孫憐むべきの至りなり氏ハ右に記したるが如く白人に對しては非常の頑固家なれども人を



遇する頗る深切にして能く歐米の交際に慣れたる人なり氏は幼時英國に留學せりと云ふ

今やカラカワ王ハ米國滞在中俄かに崩御しリリユーイオカラニ妃王位に即けり而して妃の夫は即ち米國の一市人なり布哇の獨立問題も爰に至て既に決定せられたるものと謂て可ならんのみ

#### 日布間の關係

明友新聞の記事　ホノル、府に發兌する新聞中朋友と稱するものあり其の朋友新聞の一千八百六十年六月一日の新聞に大字にて日本遠征船の成行と題したるものあり恰も今を去る三十年前の事にしあれば日本に取りてハ長夜の夢を一攪したる驚天動地の時に當れり其一項を讀み下きに記して曰く過る一千八百五十一年一月九日發兌の朋友新聞にハ日本遠征隊と題したる一項を掲げたり右ハ吾が朋友愛讀者の熟知する所ならんが左に其の一項を抜出すべしとて萬次郎傳藏、五右衛門の三人が難船の後無人

島に漂泊し船長ホワイトフィールド氏に助けられサンドウイツチ島なるホノル、府に來り内傳藏、五右衛門の二名はホノル、に残り萬次郎氏は亞米利加に行き高等なる實業教育を受けたる頗末を記し後萬次郎氏が冒險丸にて船長ホワイトモリア氏と共に日本に歸りたる次第を詳記し冒險丸が琉球、薩摩、長崎、江戸と轉航したる面白き記事より萬次郎氏が元の漁夫に非ずして船長萬次郎となり江戸府に於て兩國の通辨を勉めたるを記せり  
 吁余輩ハ夢にも思ハざりき此のホノル、に四十年前堂々たる英字新聞あらんとは又た此の新聞が日本の昏々と睡魔に襲はれつゝある間に開國主働者の一人なる萬次郎氏の紀傳を記さんとの實に意外千萬の次第あり萬次郎氏は航海學校に生徒たりし事ありしと見へサミユエル、デーモン氏に向け一千八百六十年に亞美利加航海學理の書及其附録ある大冊の書二卷を翻譯し贈物となせり其の贈物及び朋友新聞ハ總て萬次郎氏の師サミユエル、デーモン氏の二男なるデーモン氏が好意に依りて余に示したるもの



なり  
 以上の所説に依りて、讀者はホノル、府が數十年前より吾が日本と密接の關係ありしを知るべく米國が吾日本の海門を叩たるは日本がホノル、行の航路に當り居たる故なりしを知るべし布哇島と日本との關係既に斯の如し去れば今日日本が布哇島に於て意外の勢力を保有し居るを幸ひ今一層其の勢力を高め太平洋群島貿易の全權を掌握する地歩を此の島に得ざるべからず

出稼の日本人 現今ハワイ島に出稼する日本人ハ壹萬人以上ありと聞けり因みに曰ふ今まのハワイヤン島ハ元とサンドウイッチ島と稱せり然るに群島中最も大なるハワイ島の名を全島に冠してハワイヤン群島と稱するとなりしなり余輩が碇泊中山城丸にて來りたる出稼人ハ總計一千人内女子二百人なりとの事なりしが一日右出稼人の寄宿所に行き見るに中には妙齡の田舎婦人一群を見受けたり蓋し婦人をして此の地に永住せし

むるハ恰かも男子を此の地に繋ぎ留むるの好器械なり從來出稼に來りたるものと誠に少なからずと雖ども此地に永住して布哇群島の住民とならんと企つるもの、少きは思ふに日本婦人の此地に永住せんと欲するもの少なきに依るあらんホノル、府にハ日本人にて白人を娶るもの十名計りあり右ハ明治元年此の府に來りたるものにして今日出稼人の情態とは大に異れり亦出稼人中年季明きの後猶ほ此の地に留るものは或ハ土人の婦を娶とり或ハ葡萄牙土人の雜混種を娶るなり然れども右の如き永住を企つるものは實に稀少にして數ふるに足らず去り乍ら日本の女子中布哇ハ婦人の最も暮し易き處なりとの事實を知り得たるものありと見へ在布哇の獨身者に嫁せんとて態々渡航するものあるに至れり喜ぶべき事と謂ふべし

此頃移住殖民論の漸く盛ならんとするに當りて一言注意すべきとあり他なし移住殖民は女子の助を得るに非ざれば毫も其の歩を進むる能はざる



の一事是れなり、志氣堅固、雙腕、兩足を以て實際に、移住、殖民を企てんとする人も、女子の如何にするやと問へば、漠として應ふる處なし、男子の剛氣は能く、諸多の難業を成功し得べしとするも、獨り移住、殖民は、慷慨、冒險の氣象のみを以て爲し得べきものにあらざ、蓋し彼の西班牙、葡萄牙、佛蘭西の諸國民が移住、殖民の事業に失敗を取りしハ職として冒險の氣象にのみ富みて家族の快樂なかりしに依る彼英人は到る處を故郷とし(Comfortable, happy)の境に達せざれば止まず是れ即ち彼等が移住、殖民の事業に勝利を博したる所以ハ早聞く所に依れば布哇在留の出稼人中婦人の爲めに騒動を起し醜体を白人の前に現はしさても日本人は左程に不文明なるものかとの疑を發せしめ折角得たる從來の好評を落すの傾きありと諸君請ふ男子ハ決して獨立たず先づ婦人の助力を仰ぐべきものたるを忘るゝ勿れ

## 雜記

當府の南端にワイキ、ーと云ふ處あり金剛頂の山麓に當り一帯の沿岸波

靜かにして激濶驚濤の觀なし山麓には競馬場あり競馬場の外をカペオラニ公園とす公園は經營頗る見事なれども掃除少しも行き届かず熱帶的の牧草恣まゝに繁茂し池には日本の蓮に左も似たる蓮のはびこるを見る園中を行くに行き逢ふ少年と大抵腰を屈めてオハヨと禮するなり次に當府の北端にカメハメハ學校あり博物館の附屬建築物あり講堂寄宿所等随分行き届けり此の學校には兼て日本の學習院に勉強したる土人の子供兄弟二名あり日本語を能くす生地ハマウイナリと云へり其他エンマ區トーマス區は小公園にして散歩に宜しハワイヤンホテルは結構稍行き届けり湖ハ山鹽の結晶したる小湖にして英人の所有に歸し頗る奇觀ありパリー山の險峻にして風勢非常に強く立つて歩し難き處一ヶ處あり當國の政府ハ王宮の前面に在り中に博物館あり加奈加土人古代の生活の狀態を知らんには極めて便宜の處なり日本宮内省より贈りたる金燭の切地を陳列したるを見たり



當ホノル、府の商業の實に繁忙を極めたり日本雜貨店一軒出稼人食用原料取扱店一軒の頗る收得ありと云へり當府にて物品を買ふに一物として日本より廉價なるものあるを見ず左り乍ら店の躰裁と云ひ信用貸の有様と云ひ洋物の陳列と云ひ日本の銀座に勝ると千々萬々なり當府中最も盛んなる町をフォート町とて同町のルーキ雜貨商店の最も繁昌せる店にして荷馬車四臺秤五六臺あり店の一隅に大抵二三分間に電話の通ずるあり其の繁忙あると實に非常にして大丸店節季前の比にあらず然れども手代主人共四人使役せる土人四五人にて用を辨じ居るの驚くの外なしキング町のジョンノット店の頗る壯麗なる金物屋なり其の躰裁の見事なるは當府第一ならん次に記すべきは支那町なり當府の住民二萬五千の中過半数は支那人なれば支那人の勢力の殆んど白人に劣らざれば支那町にも随分壯麗なる店あり西洋物を尋ねるも日本物を尋ねるも支那店になきもの殆んどなかるべし彼れ支那人が商賣に長し居るは兼て聞く處なるが日

本の特有物産迄をも其の店に陳列して白人の顧客を待つとの随分行き届きたる手際と云ふの外なし

十月十四日比敵金剛の水兵一中隊當府外マキの横手なるプウアイの廣野に葬りある日本水兵の墓に參詣せり右の墓の龍驤艦の水兵十二名が明治十六年當地に於て脚氣病に罹り死去したるを葬りたるなり外に明治九年筑波艦の一員が死去したるを葬りたる墓もあり當府に於て一中隊の兵卒が列を整して行軍するが如きは珍らしきとなれば戸毎の人は總て門前に佇立し支那人の荷物を卸して仰天し土人は直立してあきれたる者の如く馬は狂ひ犬は逃るなど此地に於ては最も面白き新聞にして甚だ大なる出來事なり喇叭齋々マキ、に至り一回の號令を合圖に參拜を了へたり墓のプウアイ野の高處眺望絶佳なる處に在り前面は漂渺たる太平洋の波、後面は崖嵬たる金剛頂、涼風オハイ樹蔭にそよぎ、金花斷蓬隙裡に開き、意思凜として千古の曾遊境に行きたるが如し聞説龍驤艦員の死をるや慘を極め



たりと魂魄結んでアウアイの光景斯く悲惨なるものか魂乎歸り去るを休めよ希く此の地に留りて永世外遊日本人の思氣を鼓舞せよ吁男兒死なば須らく異境に死すべし豈に空しく故郷の土に骨を埋めんや

龍蒸艦員の墓の傍に出稼日本人の墓數多あり各墓表に大日本帝國の五字を認む此の五字能く彼等埋骨の亡者が魂を慰籍するに足らん國を去りて忘れ難きもの大日本帝國の五字あり大和人種の四字なり

ヒロ港 廿二年十月十五日午前ホノル、を發して十六日午後ハワイ島ヒロ港に着せり此島の群島中尤も大なるものあれば従つて其名を全群島に冠らしむるに至れりヒロ港の風波荒くして碇泊中も航海中と同様痛く船舳を動せり十七日端船にて上陸を試みたるが成らず一度他のポイントと衝突して殆んど危かりし其れより路を轉じて對岸に着せり尤も此處も岩礁多くして屢々失敗し辛ふじて上陸するを得たり此岸よりヒロの町迄は海岸通り凡そ二哩もあらん海岸は黒砂にて一面墨を流したるが如し此海

岸にハ葡萄牙人及土人の家數多散在せり全舳ホノル、に於ける土人の生活は舊時の面目としては殆んど皆無の有様なれどもヒロの土人の大に舊時の風を存せり余輩は此の港にて多くの土人がカノノ船を用ひ恣にポイを料理し行々フラスコ踏りを爲せるを見たりカノノ船は丸木をくりて兩端を薄く平たく削り之に先づ二本の曲れる横木を右船の兩穴に通し其二個横木の先に眞直なる棒を結び付るなり之に用ふる楫と稱する者ハ日本の杓子の二三倍もあるべきものを以て水をこぐに矢を射るが如し之に時々土人は三角形の帆を用ふるとあり快疾目を驚かせり又横木の一端にある一本の棒ハ全く獨木船の顛覆を支へんが爲めの必用より出たるものなり此棒あるが爲め少々の波あり共兩方にて平均するが故に頗る安全ありポイの料理方は先づ日本の里芋と同じき太郎と云ふ芋を取り來りて小石を集め此の石を以て焼き食ふべきものとなしさて其れより皮を取りて大なる石の上に之をツプシ粘着性の團塊を造り後に水を加へて五六日も經



て後食ふなり土人が赤裸にて椰子樹蔭にボイの園塊を造り居る様は随分稀代なり、葡萄牙の貧民の生活は殆んど土人と異なる處なし海岸の處々に散在せる同國人の家屋と云ふものは凡て一個の豚小屋と同様なり無智の頑民の何れも同ぢきものと見へ甘蔗の中に蹲まりて三日に一度の骨を噛り夫妻相笑て日を送り居れりヒロの町は荒涼ある者にて三町以外の悉甘蔗を植へたる田野なり此にアイスクリームを賣る家あり定めてホノル、と同様の味ならんと急ぎて命すれば菓子に既に塵を交へて三年の古色を帯びクリームは解けて水の如く流れて衣服を穢せりこの叶はじと支那人の店にラムネを二本傾けたるに頗る善し之に息を得てヒロ町大抵は歩き廻りたるが先づ三十分位にて見物の濟む處なりし此の港に於ける日本人の勢力は随分盛んなり一萬以上三萬以下の財産を有せる日本店三軒あり一は明治元年ハワイに來りたる鈴木と云ふ人の店にして一と出稼人中新瀉婦人の店なり此の外日本人の基督教會あり東京より送れる基督教の新聞

雜誌を供へたり、サテ此のハワイ島は即ち吾が同胞一萬人の出稼をし居る處なれば余輩が此の地を見るも幾分か感覺を異にせり此の島は全島高山を除きて其他は耕地と牧草地との二箇に分れ居れば全島更に曉明の地なしと言はざるべからず而して島の長さ九十里幅は七十哩幅員惣計四千二百十萬哩二百五十萬エーカーと云ふ廣き島なり人口を今日未だ三萬に満たず産物の饒多にして砂糖を始めとし總ての家畜類、諸般の植物等年々増進するを見る、當地には珍らしき噴火山あり名をマウナ、ロアと呼び高さハ一萬三千六百尺計りにして二箇の大噴火口あり頂上にあるをモツアウエオウエオと呼び南東に當れるをキラウエアと呼び共に噴火口の口徑ハ三四哩四方もありキラウエアには登るを得べしと雖どもモツアウエオウエオの方は容易に登り難しと稱せり尤も此の頂上の分ハ始終噴火するにあらずして時にハ猛炎地軸を溶解するかと思はる、程の噴火あれども又時とまては止むことあり依りて態々登りたる旅客は失望するとも非無之



と謂へり聞く處に依れば此モクアウエオウエオこそ現今世界第一の噴火口にして闇夜萬丈の大噴火宵漢を焦し溶けたる真紅の熱汁が大河の倒まに落つるが如く流るゝを見れば如何なる者も其奇觀に驚絶せざるもの非ずとの事なり去れば此道の學者も或ハ歐洲より或は米國より態々登山する由なり吾輩も此大奇觀に接して平生より奮勃せる心胸を開きたしと思ひたれ共遂に其便を得ざりしは實に遺憾の事にてありしヒロ港に碇泊せると僅かに三日此間始終雨降り續けり

布哇物價一覽

布哇ホテル一泊	三弗	家内勞働	一月	十五弗	安全マツチ	一個	五仙
イーグルハウス	二弗	電信屋	一週	十二弗	牛肉	一斤	十二仙
貸間一週	二弗	大工	一日	三弗	野菜品	小量	五仙
西洋人料理屋一食	二十五仙	鍛冶	同	同	菓實	同	同
支那人同	十五仙	洗濯一ダース襪衣	五十仙	日本雜貨	原價三倍以上		

馬車最近路

二十五仙

人足

一日

三弗

洋服仕立

通常

理髮

二十五仙

○佐茂亞行

十月廿日サモアに向つて航路を轉せり航海中別に記事なし十一月三日は船中一般に幸福なる天長節を迎へ皇帝陛下の萬歳を祝したり五日にハ赤道を横過せり九日には水兵及候補生合して六十八計りの病人を生きたり然れども何れも輕症にて直に癒へたり本國にて聞きたる處に依れば赤道直下若しくは太陽直下は非常に炎熱にして船中の金物は焼けて赤色を帯ぶるに至れば決して之に觸るべからずなんと謂しが之は全く島國營居的人民の臆病より出でたる大妄想なり吾輩の經驗する處に依れば海上ハ何處も決して熱きものにあらず太陽直下も赤道直下も共に涼しき事なりし兩直下共に八十度より九十五度迄の温度なりきかくて二十七日目即ち十一月十六日午前十一時サモア國ツ、イラ島のバゴくと云ふ港に着せり



此港の頗る良港にして兩岸の山の屏風を立てたる如く深さ二十五尋以上なり凡そ世界の廣かるべしと雖ども此のパゴック程野蠻なる處の實に稀れなるとならん土人の男女共に赤裸にして腰部に草類若しくは破れたるリンネル類を纏ひ居るに過ぎず男は臍下より膝迄全く入墨を爲せり髪は皆な直立にして赤色なり元來彼等が髪は黒色なるものなるをライム其他種々の染料油類を塗り立て、遂に赤色に變ぜしむるなり土人の身軀は頗る強壯にして皮膚の一種の獸類的避熱作用を有せるが如し足の長きとは白人も一步を譲る位なり此のサモア人種が何れの人種に酷似せるやと云ふ問題の起りたる時同行者の中二派の議論を生じたり一は曰く勿論加奈加人種に屬せり一は曰く日本人に酷似せり此の最初の説は余輩が執りたる説にして今猶無數の証を有し居るなり然るに日本人に類せりと云ふ驚くべき説も亦全く理由なきには非ず其説に曰くサモアの土人は加奈加人種に比して頗る白し現に反對論者の面色の如きは少しもサモア土人に異

る處なきにあらずや(蓋し余輩が面色の黒くなりたるを笑ふなり)又サモア土人の唇は加奈加人種の如く厚からず顎骨は甚だ高からず畢竟日本人と異なる處は身軀が長大なりと云ふ迄に過ぎず加之其語學上に於ても全く加奈加人種に非ずして日本人種と同人種なりと云ふことを證明し居れり加奈加の發音に従はゞ $\text{Hoi}$ の音を爲すべきにサモアは全く日本人と同じく $\text{Hoi}$ の音を爲すなり加奈加人種の常にカキクケコの清音を發し得て其半濁音がキクケコを發し得ざるなり此半濁音を發し得る國民の世界に於て實に稀少なるに今サモア人の能く此の半濁音を使用し得るあり又サモア土人が萬般の情態に於て非常に野蠻を極めながらも美術の一點に至りては驚くべきものあり即ち手巧の秀ひでたる一點は正しく吾日本人と同様なりと以上の説をして夢にも眞ならしめば我等の好兄弟を南洋の中心市場に有し居るなり然れども余輩は未だ此の説を信する能はず論者今數十歩を高めて幾多の確證を積まば或は之を信せん



此のバエークの人口は僅々四百人計りなる由家屋の皆な粗末なる棒と椰子の葉にて組み立てたるものにして家の内にはパンダナの葉にて編みたる席を布き下には小石を集め濕氣を愛げぬ様に成し居れり家の道具と稱するものハ先づ椰子の實にて造りたる水入道具同じく椰子實にて造りたる食器、カバと云へる酒を貯ふる日本の足附洗面盥様のもの、竹枕此の竹沈ハ長さ或ハ一間もありて兩端に二本宛の棒を以て之を支ふる様になせりシヤボと稱する木製紙の衣服に代用され居るものハ日本の楮紙と同じきものに漆に似たるものを以て綾取り或ハ寝着となし或ハ腰に巻くなり此他種々なる武器あり武器ハ悉く木にて造りたる棒には相違なければども其形ハ千状萬態十人之を所持すれば必らず十種の相違あり或ハ打つに便なるものあり或ハ敵の皮膚を引き裂くに便なるものあり或ハ槍の如く衝くに便なるものあり或ハ頭を割るに適當せるものあり或ハ耳を削り取るに適當せるものあり何れも其の細工の巧みなる事ハ驚くの外なし木ハ大抵

フエマオと稱する紫檀にサモ似たる堅牢無比の木を以て造れり土人の男子ハ起臥此の武器を離さず恰かも兩刀は拙者の魂で御坐ると威張りし昔時の日本武士の如く夜にもせよ晝にもせよ行けば必らず此の武器を携ふるなり土人が飲料に用ゆるカバ酒はカバと云ふ木の根の汁より製したるものにして少量を飲用せば血液の循環に非常の益ある由なれ共彼等ハ之を多量に飲用するが故に其齒ハ先づ黄色となり其身軀ハ漸く麻痺して慘毒を受くる甚しきものあり

サモアにはモリパイ、及びカリヤガエーと稱する舞蹈あり此の踊りも布哇のフラク、踊りの如く腰を振るなり唯異なる處ハ別に左手を以て臀部を叩き右手を上下するなり其醜態なると目も當てられず此に一間題起りたり若し此の赤裸なる土人をして白人のダンスを踊らしめ男女相抱合してハネ廻らしめたらんには何れが多く醜態なるべきかとの一問題なり先づ余輩は白人のダンスを踊らしむる方多く醜態なりとの説を取りたり凡



そ大日本帝國の國風を除きて其他の國々は總て舞踏の如きは悉く男女交接の慾より由來したるものにして種々なる方法を以て其慾を遂ぐる順序を示す一の遊戯に過ぎず然るに其が中にも最も激烈なるハ白人のダンスにして男子のみで踊る能はず女子のみにて踊る能はず男女相抱合してハネ廻らねばならず其の醜態なるとハ道理上素よりサモアのモリパイより幾層を起へたり

パゴク 港の時雨

世にも名高き南太平洋の航海島とハ如何なる處にやあらん哀れ鬼界が島にも増される鬼魔の世界にこそあれがしと祈りし希望ハツ、イラの岸邊を洗ふ波と共に水泡に屬し去りぬ觀れば此處も同玄く人生の巢窟ハ人生——吁人生とハ何物を實に優しく哀れなる者哉見渡せば時雨濛々として椰子葉柳の如く亂れカノノ船散亂して海士の小舟の打捨てたるに似たり彼地此地に聞ゆる土人の歌も仔細に論じ來れば物の哀を歌ふにやあらん

パゴクにては殆んど交易の術なく能く貧しき處と思へハ中頃交易を止めて日々處々を徘徊せり見よ此の荒磯島の隅に米國人パイキの悠々閑日月を送りモルモンの宣教師二名ハ遠く米國ユーマーの市より派遣せられて熱心に多妻の主義を傳道せりパイキの妻ハ英人とタヒチ島土人の混合種族にして夫人ハ文明國の交際に慣れたる女子なりポーターはパイキ夫人と前の佐茂亞領事なる米人との雜種にして兄弟四人ありポーターの夫人ハサンデー島の産にして黒人と英人の混合種なりポーターに使はれ居る奴隸ハ新西蘭の産にしてマオリハ土人なり僅か人口四百の小乾坤に此處彼處より集まれる異種民族が分れつ合ひつ結びつ離れつ見も知りもせぬ他血人種と混合して無罪なる生活を送るを見れば人生は誠に異なもの味なもの天地到る處人情にと區別なしと不思議の感覺を起したり

あびや行

十一月廿七日パゴク 港を發して翌日ウポル島のアビヤに着せりアビヤ



港に洋物舖十四軒あり大抵同様のものを賣捌せり而して諸般の洋品は非常に安價にして之を日本に比するに二三割廉價なる方あり右と英國より直にシドニー港に輸入し來り無税にてアピヤ港に來り又た無税にて陸揚げするに依れり去れば佐茂亞島を認めて泰西の風物を知らざる土蠻のみ心得洋品を携ふるが如きとあらば非常の失敗を來すべし是れ一行の經驗に依て知來りたる處なり又た日本雜貨中高價なる贅澤品若くは日本煙草の如きものは更に需用なし土人及び在留の白人に適當せる粗末の雜貨は物品交換に依て相應の利益を見るなり而して其の利益の時として二十倍若しくは三十倍に及ぶとあり然れ共市場の區域元より狭小にして多額の貿易の思ひも寄らざる事共なり

佐茂亞のアピヤ港の聞しに違はず南太平洋群島貿易の中心市場あり當港に佐茂亞タイムス南洋商業廣告新聞と稱する一週間發兌の新聞あり南太平洋島の貿易に關しては殆んど洩れ處なし新聞社の庶務を兼ねたる部

屋一箇を有せるのみなり余が此の社に至るや二人の植工の協目も觸らず字を拾ひ一人の男子の頻りに組板を整理せり依て記者は何れに居るやと尋ねたれば植工の怨ち手を止めポケットより鉛筆と手帳を取り出し成程貴下の日本人ありして軍艦の重なる人々の名如何次に航海の目的の如何貴下の何人なるや日本の商業と左程に進歩し居るやと悉く手帳に留め了るや忽ち字を拾ひ始めたり重ねて參るべしと別れて泰西館に歸宿せしが翌日午後六時頃前面より二人の亞米利加少年余を呼ぶものあり願みれば曩の植工なり否記者なり彼等自ら文章を綴りて自ら字を植へ自ら群島を跋渉して自ら報告を造れり其の忍耐なると其の勇剛なると實に驚歎の外なし余も久しく記者の生活を試みたるものあれ共彼等が熱心と勇氣とには只管感服の外なかりき

夫より右二人の旅行を開きトンガソロモン、サンデー、サースデト諸島の報告を集め兼ねて泰西館に具へある新西蘭星、シドニー、ヘラルドの二新聞を



閱讀して調査等閑ならず貿易の一事に於てハ非常の利益を得たり右の如く繁茂ハ日を送りしが爲め遂に當地の政治問題を棄却し舊王に見ゆるの意思なく二三町を隔てたる新王を訪はず最とも冷淡に日を送れり  
 アビヤ港の輸出入ハ大約拾萬弗に上下し椰子油珈琲木綿木材藥料とすアビヤ港の繁昌なるは産物の爲めに非ずして地理の形勢に由來せり若し南洋諸群島の椰子油を一手に占めんと欲せば必らず其本城を此のアビヤ港に占めざる可らずされば佐茂亞は英米蔓三國の争ふ處とあり伯林條約を訂結したる後も苦情更に絶へず日耳蔓の領事ハ只管叛將ママツセセを煽動し勢に乗じて新王ママーファアを感はしめ痛く舊王マリエトアを窘辱し計畫至らざるなく眼中英なく米なく殆んど佐茂亞全島を呑み盡したるの勢あり余が投宿したる泰西館の主人は即ち當國の日耳蔓党に屬しスカンヂナキビヤンの生れなり毎夜獨逸の軍人酒宴を張りて意氣盛壯高歌放吟して沖合滯泊艦の喇叭相和し佐茂亞占領を祝するものゝ如しチエ

トニツク民族の氣象誠に剛毅と云ふの外なし

○サバイ行

本國を出立せし時同行者ハ六人なりしが二人と布哇にて別れをけ告げ一人ハ軍艦に乗せてフィシイに走り残り三人ハ佐茂亞に上陸せり然るに三人共商用の爲め相合はず寂涼の日を送り居りしが一日館主と共にサゲアイ島に行けりサゲアイ嶋とウポル島は僅かに三哩を隔てたり満潮の時は全く別島なれ共干潮にハ陸續きなり朝十時頃徒歩して潮引の跡を進めり無数の小蟹千萬の小穴を穿ちて此に住めるなり斑紋頗る美麗にして右のハサミは總て其の全体よりも長大なり生物進化學の理に照せば此の種の蟹が常に他の劣等虫類を捕獲せんと試みたるものが自然の慣習となりて斯る奇怪の利器を得るに至りしものと知られたり  
 島に近きて清泉に浴し頓て純粹なる土人的の饗應に預れり曰く椰子實曰く芭蕉實曰く滿號菓曰く麵菓曰く生魚悉く土人的最上の馳走に非るハな



し中にも生きてる蟹の馳走に仰天せり先づ生蟹を捕へ來りて悠々室内を歩ましめ一杯のブランドーを呑み一片の麵菓を喰ひ乃ち生蟹の一足を剥き取りて其儘口中に入る、あり斯の如く順次に其の全足を剥き取り遂には其の甲を剥ぎ其肚を喰ふに至る元來佐茂亞人の料理を知らず魚類の悉く生鮮の儘之を食ふを常とす

南緯十六度の孤島に吾れ一人味氣なくも土人の饗應に預り昔じ以來の因縁を聞けども心の遠く北半球の日本に在れの氣もそゞろにて夢路を辿るが如く覺ゆる其の時二隻の白船長蛇の烟を曳て遠く前面を走れり吁之が久しく住家となせし比敵艦と其の妹船金剛艦とが今まファイシーに行くの路かと思へば剛情宇内を呑むと大言せし者も不思哀れを催せり此夕寂涼甚だしく薄暮舟を漕して歸宿せしが人事の随分不可思議のものよと感ふたり

泰西館のグアム土人 此に一話あり余の余が旅館に於て一日如何にも

日本人に能く似たる年頃三十四五の男を見たるが同人はグアム即ち今度軍艦が最後に寄港する處の小島の土人なり同人の捕鯨船に乗組みて函館に四五度も往復したるとありて少し計りの日本語を試みしが随分可なりと言ひ得たり同人の説く處に依れば見らるゝ如く吾々グアム土人の骨格は貴國人と異なる所なし吾々の飽迄吾々グアム人の大日本國民に属せるものありと信じ居れり此頃迄の貴國と吾島との間に往復なかりしが爲め其れ等の事情も分らざりしなれ共今日に至りては最早吾々グアム人が貴國人に属せりとの事の疑ふべからず吾が島今は西班牙の管轄に屬し西班牙の支政府教會學校等の設けあり去れども吾々の異色民族の管下に属するを欲せず云々と反覆丁寧に此事を論ぜり余輩は同人を見て儘かにグアム人の日本人なりと信じたと同人の説を聞きたるを喜び直に其事を河越氏に報きたるに氏亦大に喜び互に海圖を按じて一夜を語り明かせり十二月十日余と河越氏とハ口耳曼の蒸氣船ルーベックに乗組み濠洲に向



つて解纜せり井手氏は此島に残りて南太平洋群島の貿易を詳細に調ぶるととせり別に臨んで心腸共に断つ是が國の爲め事業の爲めあれば煙瘴雨の中随分氣を着けらるべしと互に心を勵まして遂に二人は佐茂亞を見放したり

佐茂亞物價一覽

ホテル	一泊	五 弗	日本雜貨	原價の五倍以上
料理屋	一飯	七十五錢	人 足	土人日給 五十錢
理 髮		一 弗	魚類牛類	罐詰 五十錢
大 工	日給	五 弗	牛 肉	一斤 二十五錢
鍛 冶	日給	五 弗	牛 乳	一パイント 十錢
寫真師	日給	七 弗	洋 物	並價

通貨は日本智利墨西哥其他何國の貨幣も通用せざるなし相場は大抵智利銀二十八シリングスを英米の一磅(二十志)とす

濠斯太刺利亞行

見聞雜記

シドニー府の繁華

明治二十二年十二月廿八日余ハ佐茂亞島のアピヤ港より十日の航海を経てニューサウスウェールズ州シドニー府に上陸したり此の時に當りて余が想像の中に畫く濠洲なるものは風物疎々たる南半球特特の光景にして文物壯大將に北半球の生民を凌駕せんとするの勢あるが如きは余の夢想せざりし處なり然るに瀛船ルーベック號の甲板に立ちて岸頭を見渡せば但見る巍然たる壯闊雲表に聳へシドニー十萬戸の煙突規則正しく屋上に林立せり先づ眼を遮るものハ曰く羊毛輸出會社曰く熟皮會社曰くニューカスツル石炭商會一として商業旺盛の証左を表示するものにあらざるはなし若孫港頭無數の瀛船ハ出入往來朝霞の間に隱顯し意氣壯大真に南半球の大都會たる面目を現せり依りて思ふ一千七百八十八年一月廿日フイ



リップ氏全權委員として、廻隻船十一隻、軍人二百人、罪人七百五十七人を卒めて此の若孫港に着したる時の感想は如何なりしならんと又た思ふ金山發見以前の漂流人民がボタニー灣の畔りに寂涼可憐ある生活を爲し轉た母國を望で郷思の情に堪へず、則ち路遠し、路遠し、吾が英國までは路遠し、と歌ひし時の感想は如何なりしならんと十日以前南太平洋中の鬼界が島と聞へたる佐茂亞より來れる身にも今昔の懸隔轉た絶大なるに愕き只管アングロサツソン民族の經營に舌を震ひたり

抑も濠洲のニューサウスウエールズ、ヴァイクトリア、クイーンズランド、ニュージーランド、西濠斯太刺利亞、南濠斯太刺利亞の六殖民地を以て成立ち面積三百萬方英里達斯馬尼亞新西蘭を合すれば、十九億九千萬エーカーに達せり其の幅員は英國に廿六倍し大印度に六倍し歐洲全土の五分の四に相當せり

而して此大洲に殖民を始めしは一百年以前の事にして殖民の地歩を得て

より僅に五十年に過ぎずと雖も今や人口は四百萬に垂んとし輸出入は日本に六倍せり而してニューサウスウエールズ洲は六殖民地中の長老にしてシドニーは其の都府あり始めシドニーに上陸せるやそも如何なる天魔の力を藉り來りて彼れ等へ僅少の年月に此の大都府を經營したるかど只管に驚歎堪へず先づ其の繁華を構成したる處の遠因及近因を考究するの念を奪はれたり

曾て本國を出立して布哇佐茂亞に至るや國勢手に取るが如く社會構成の諸原因前途貿易の見込代るく視察の上に浮み不完全なるかは知らざれ共思ひの儘國勢の全班を窺ふを得たり然るに文明の大都會に至りては事物轉た複雑を極め心中既に充分の驚歎を生じたれば先づ専務に調査し親しく實地の試檢を爲したる上に非れば何事も判断し得べからずと決心したり

シドニー府の小倫敦と呼稱し都府の性質倫敦と毫も異なる所なしされば今



此の都府の繁華を評記せんとするは倫敦巴黎の事情に通したる讀者諸君に向つては無用の事に属せり唯願ふは大都府の繁華に心酔せずそが繁華を來したる遠因及び近因を考究し特に此の大都府が日本貿易の前途に如何なる關係を有するかを明らむれば即ち足れり

余は上陸して后直にキング町のホテルに滞留し日本より携へたる雜貨の殘品を處分せりサモアにては非常の利益を得たれ共此府にては非常の利益を見る能はず先づ相應の賣口を得たり用事終るや市中の巡覽に日を送れり今日は勸工場に行て場内のガーデンに噴泉迸り電燈影青きに驚き明日は珈琲御殿に行て五百の客房數千の人を容れ室内壁なく戸なく姿鏡四方に反映せるに眩目し聖マリーリイ教會の壯麗なるに膽を消しプリンツ芝居座の盛大なるに魂を飛ばし見聞の事一として東洋の孤客を驚かしめざるはなしシドニーに二箇月間滞留して直に他の殖民地に向へり

ルックウードの林跡

シドニーの見聞も稍片附きたれば爲すともなくキング町のホテルに閑日を送る中愛爾蘭黨の機關雜誌フリーマンの寄書家に交を結びしが爰にヘラルドと呼べる濠洲産の小年に遭へり同人の巧みに路遠し〜吾が英國迄の路遠しの歌を能くせり自分ハルックウードと稱する片田舎に詫住居するものなれば郭外の散歩に一度參られずやと懇望して止まず依て日を選んで同處に赴けり先づ瀛車にてルックウードに赴き沿道を音づれしが如何にも寂涼たる片田舎にして一哩に二軒半哩に一軒と稱する片田舎なり植民地開拓の模様を知るに究竟と徒歩して行け共〜廣漠の林跡あり濠斯太刺利亞の元來森林に富み屢々林火起り甚だしきは近傍の空氣を變えて百六十九度の高度に達せしめたるもあり火は五晝夜を経て猶ほ止まず幾多の畜類無數の大木悉く灰燼に歸したるときへあり今ルックウードに至るの道は即ち此の林火の跡にして木燼累々として處々に散點し新木僅かに此間に停立せり路程の餘り遠きに草臥れたる折柄馬車を駈



り来る少年あり物をも言はず之に打乗りしが這は如何に此の馬車の牛肉配達の馬車ありき少年の笑ひあがら何處に行かるゝにやと尋ねたれパルツクウードの端に行くなりと答へ六片を與へたり少年は幅三寸許りの板に突立ち馬を鞭撻して林跡を驅逐し余が抛け出だされんとすると屢々なるも物の數ともせず最と愉快氣に走り出せり依りて殖民地の兒童の又人格別のものと思へり車を辞して又た二哩斗り徒歩し辛ふじてヘラルドの家に着せり同人は相變らず面白く路遠し〜と歌ひ少女は日本傘日本箒を示して誇れり傘とて羽もなく箒とて足も無に此處に飛來るを見れば需用の廣大あると以て知るべきなり一週間滞在の後シドニーに歸れり途中林跡の一軒屋に立寄り水を求めしが老夫婦にて子供なく竈と寢臺の外何物もなし遠來の客を勞ること分に過ぎたり旅に鬼のなきもの世の情けと云へる語も思ひ出されて哀れなり

メルボルン行

二十年一月廿七日余ハシドニーを出立して同廿九日メ

メルボルンに着きたりシドニーよりメルボルン迄は瀛車にて五百七十哩なれば大に疲勞を覺へたり途中の停車場にて辨當を執りたるがパンにバターを塗り付け何か鹽肉の切れを副へ少し苦味を珈琲を飲むなれ共其美味云はん方なし瀛車に揺られてひもじき故あるべし此の長鐵道にて一驚を喫したるは濠洲の地勢が實に雄大なる是れなり時に斷崖削るか如き處を通るとあれ共一度もトンネルを通りしとなし尤も廿七日の晩の夜通しに馳せられたれば慥かに斷言出來ざれ共ステーションの雜沓に遂にまごころまず思ふに各處共日中の景色と同様ありしならん廿八日アルバリーに着きたるが此處はシドニーよりメルボルンに到る真中の驛なりアルバリーは四方小岳を以て圍み一方に鳥翼山と稱する高山を控へて風景絶佳なり廿八日の全くアルバリーに滞留したり日曜日にて瀛車の通行なかりしが爲めありシドニーに着するや同行者河越氏と手を別ち全く天涯の孤客となり一度も日本人に逢はず此處ハ馬子に挨拶して通る中山道や東海道の驛



々々の大に異り身は恰も夢中に在るが如き感を起せり夕暮叢にすだく虫の音の曲亭翁の耳を借るもかごとがましくこの形容の出来ぬ音なり曉ユイカリマス樹に啼く鳥の聲は鏡山の下女の初の耳を借らぬもいどいどあわれに聞ゆなり今ま故山の夢醒めて夢痕は猶ほ寢臺のフランケットと共に暖かなれば睡眠をこすりつゝ天外の孤客なるとを忘れ全く花の都の東京と思ひ乍ら部屋を出づれば七面鳥は膽玉も破裂する計りの大聲上げておどろくしく鳴き出せば恰かも爆裂弾を耳の癩に投げ付けられたるの心地して故山の夢は七里蹶波逃げて跡も留めず中宵苦熱に堪へられずアルバリーホテルの三層樓上起きて涼を納るれば南天の孤月の沈々として孤生が心裏を照らし前野を眺むれば早や露や降りけん草の上は薄くきらめき渡れり此の境に接しての感情全く順序を失し半生の感慨一時に心頭に集り筆には盡されぬ心持するなり廿九日同處を發足したるに瀛車の通路處々に薪木伐截場あるを見たり蒸氣器械にてマキを切り割るなり

漸くメルボルンに近づきウオンドン停車場に來れば四面岡陵なく全く平面の原野ありシドニーよりメルボルン迄の原野は總て牧場にして幾百千の牛馬の外に生物なしと云ふて可なり牧場の恰かも綠色の紙の如く牛馬は此の紙に散る蠶種の如し廿九日メルボルンに着せり

月日の早き者送るともなく秋の半ばとなりたればメルボルン城の風寒し過ぎにし年の三四月は小向井の梅見や小金井の櫻見に浮世の苦を忘れたりしが今の濠洲の野煙に捲かれて花見の夢を見なん様もなし本國を出立したるの去ぬる八月苦熱に堪へられぬ時あり斯くて布陸に來りサモアに來り又た濠洲に來りて一夏を暮したれば全く一年の夏を送りたる都合なり去れば身軀も自然熱帶的の氣候に馴れたるものと見へ秋の寒さに閉口せり陶々兮孟夏草木奔々傷懷永哀兮泪分往南土と離騷の賦にあらねども已れが前途の運命を太平洋裏の波に委ね風に鞭て當國に來り今や草木黄落して雁北より飛べり勤めて膽を張り膺を練るもいかで千々に物こそ



悲、し、か、ら、ざ、ら、ん、我、身、一、ツ、の、秋、な、る、も、の、を、本、國、の、時、事、心、に、掛、ら、ぬ、に、あ、ら、  
ね、ど、も、雲、霞、千、萬、里、郷、思、悵、と、し、て、已、め、り、

コーフィールドの競馬事情

二十三年一月より六月迄過半のメルボルンの東部村落コーフィールドに  
遊べり此地に於て競馬事情を知り得たり

抑も濠洲の地たる世界中最も牧畜に適したる地なれば牛羊馬の悉く世界  
最良のものならざるはなしさて牛羊の二者は一はフランクェットと變じて  
世界の市場に好評を保ち一は凍肉となりて熱帶國を横切り歐洲に輸出す  
るなり然るに馬の一に至りては其の變化極めて奇妙にして一種の矮人種  
を造り出せり是れ實に驚愕すべき奇怪の現象にして社會學人種學に志し  
あらん人の眼には最も面白き現象なり請ふ先づ其の變化の順序を述べん  
所謂良馬なるもの其の肉の良好を指すにあらす其マテガミの長さを指  
すにあらす驥足千里駿骨稜々死生を托するに堪へたる馬を指すなり去れ

が良馬を産すると云ふ一の原因は必ず競馬の盛大と云ふ一の結果を來た  
さざる可らず當洲にて競馬の盛あること豫想の外に出でたり各停車場  
中の大ある所には必らず競馬場の之れなきはあし右の競馬場の競馬俱樂  
部に屬し月に一度若しくは二度と競馬會あり馬を一度に三十若しくは四  
十も走れば其の觀極めて盛なり此の競馬にて或は一度に數千磅を利し或  
は一度に數萬磅を損し或るもの家に歸へりて自殺を企て或るものは盛  
なる園會を起すなど甚だしき浮沈を起すなり此の競馬會の帳面方とも稱  
すべき處にハ(Book Make)と稱するものあり右に賭博の親方に類し法律上  
正當の權利を保ちたる紳士あり此のブックメーカーハ諸種の園若しくは  
某の馬を指點することに依りて若干の金子を受け取り園に當り若しくは  
指點したる馬勝てば五倍或は十倍の金子を返へすなり  
左れば苟くも入場金を拂つて競馬場に入る程のものハ大抵賭を試みざる  
はなく競馬場内激昂を以て満ち時には激しき争鬪の起る事もあり今押し



並べて云は、濠洲人は世界中最も賭博心の多き人種なるべく何人も賭けを試みざるものは之れなきが如し

右の次第なれば新聞紙面に之を常に競馬の世界なる一欄あり別に競馬専門の新聞數種あり

余ハコーフィールドに於て馬の仕立方競馬會の模様等取調べたれ共委しき事ハ此にて用なし唯此の競馬會が如何なる影響を人事に來すかを知らしむれば足れり

一昨々年の統計に依れば馬より落て死したる者四十八人なり或は足を折り手を折るものは無數なるべく日々の新聞に報道する入水自殺等の三分の一ハ競馬の結果と想像されたり去りながら斯の如き影響ハ余の更に驚かざる結果にして最後に尤も驚愕すべき結果を控へたり右の結果と稱するは他にあらず曩きに余が述べたる矮人は是れなり

世人も知るが如く競馬にハ其馬の良好なるを擇ぶは勿論なり當洲にて一

疋の馬に四千六百磅米金二万三千弗を拂ひたるものあり斯の如く良好の馬を擇ぶと同時に乗手の良好なるものを擇ばざるべからず如何に驥足千里の馬も小栗判官の乗手を得ざれば勝利を得ることハ覺束なし是に於てか展轉して良馬を擇び展轉して好乗手を擇ぶに至る

さて競馬俱樂部にては馬を試檢して某の馬は十四石(一石ハ十四封度なり)を負ふて自由に走り某の馬ハ七石を負ふて自由に走り得と免許すれば右の十四石を負ふ馬と七石を負ふ馬と同時に競走を試むるなり左れば某の馬は七石を負ふて能く某との競走會に勝利を得たれば七石の乗手を求めて猶ほ競走を試みたしと望むもの愈出て、自分事ハ六石幾封度の目形なり望みに應じて競走を試みんと稱するもの愈々多くなり行くなり

右の乗手こそ當州の語にて(Pretty little Jock)と稱する一種の矮人なり

所謂シヨッキーと稱する矮人は其の種アングロサクソンに屬するハ勿論なれども唯其の容貌がアングロサクソンと同様なりと云ふまでにて体量



に至りては殆んど別人種なり余は今爰に統計的の説明をあすこと能はざれ共其實験の儘を掲げん

コーフィールドに於て七人のシヨーカーを試みたるが身長は中四人ハ四尺八寸に過す後三人ハ四尺五寸より六寸に出入せり年齢ハ七名共甚たしき相違あれ共何れも鼻下に美はしき髯を生じたるもの共なれば二十五歳以上たるハ勿論なり体量ハ五石幾封度より七石まゝとす時に余ハコーフィールドに於てシヨーカーに關する統計を得たしと種々工夫したれ共遂に之を得ること能はざりしが其の中に尤も驚きたるハ此のシヨーカーの生みたる小兒に遇ひしこと是なり

其年五月の央バ一日六七歳計りの小兒二人が互にシガトを煮らし如何にも成人らしき話しぶりにて歩行し居たるを見て疑訝に堪へず呼び止めて之に問ふに一人は既に十二歳二ヶ月なりと答へ一人は十五歳なりと云へり日本をらば十三と十六(或は十七)なり余は餘りの事に抱腹に堪へず二人

の中若き小兒ハ當州流行の小兒(六七歳)の用ゆる廣襟を附けたれば如何なる人が之を見るも六七歳の小兒と見るは勿論なりさて汝が父ハと問へばシヨーカーなりと云へり兄弟ハ幾名あるかと問へば今年十五歳なる兄を有せりと答へり其の兄の身長及体量如何を尋ねたれば彼れハ誇り顔に吾等と同様なりと答へ今日兄ハ某の競馬會に行き某の馬に乗るなりと云へり嗚呼無罪なる小兒の返答と余をして泣殺せしめんとしたりき

蓋し人類は生活なる自然力の下に使役さるゝ動物にして此の大自然力にハ一指をも加ふると能はず若し此の大勢力が東せよと命すれば人類ハ腫んで東し西せよと命すれば人類は喜んで西するなり去れば人類が其の族を分ち白黄赤黒の區別を爲し文明野蠻の變化を起すと即ち生活なる大勢力の活動したる證左なり

見よ角力を爲すことが生活の道ならば人の身体と自然に長大肥滿のものとなり輕業を爲すことが生活の道ならば人の身体ハ自然に矮小輕快のもの



となる左れば日本人の身体に當り日本人的生活より化成したるものにして此の生活なる自然力に順應したるの結果なれば此の生活だに變化するの方あらばその身体は一命を待たずして變化せん人種を變化せしむるとの難きが如く見ゆれ共生活ある自然力の眼より之を觀れば老翁が飴を結んで人形を造るよりも易し讀者諸君處世の秘訣は唯此の生活なる自然力に従順するにあり學者思想家が腦中より編み出したる諸種の勢力と稱するもの此の人生に於て一も生活なる勢力に及ぶ能はず生活なる自然力の諸多勢力中の大王なり故に能く此の勢力を追ふもの地球世界の上に繁榮し之を追ふ能はざるもの即ち人種滅却の悲運に遭遇するなり今や各種民族の中に飛鳥を落すの聞へあるアングロサクソン種族の如きも其生活力に對するの結果は斯の如し去れば吾が大和民族の繁榮の望み甚だ多し只能く其生活をして地球最高の民族を造り出す様に變化せしむるに在り

のーすぶらいとんの九谷焼

メルボルン滞在中恐るべきストライキ起りたれば是れを避けて北部ぶらいとんに遊べり主人公はアレキサンダーフレージャーと稱する銅商にして豫て日本銅取引の事を懇望せる人なりき此頃ハ久敷日本語を使用せず故郷を思ふ心は日に念頭に縈回せる折柄差出を名刺受けの日本製漆器なるに嬉しく思ひしが饗應の茶碗ハ九谷焼なり取り上げて下部を改むれば九谷と朱書せり焼ハ九谷の本場なるは勿論なれ共畫ハ寺井粟生近邊と見受けたり主人公ハ余が驚きたる体を見て取り如何に日本の陶器は美事の者に候はずやと云へり質は良好にして紙の如く薄く満足に焼き上らずして彼此取合せたるなれ共外人の目にこそ一様と見ゆるなり直段は頗る高價なる由に聞けり案するに陶器の原質を髓に入れて焼きたる勞夫も古代の意匠を參酌して古畫を寫したる畫工も其の己れの手より成りたる茶碗が北部ぶらいとんに飛來り再び日本人の目に觸れんとは夢想せざりしならん



然れども需用の市場の奇々怪々にして廣大なると大海の如し彼れ英人の吾が日本を輕蔑し得んも其の需用する絹製物生糸には頭を垂れん彼れ米人は吾が日本を恐れざるも其用ふる茶の爲めに降参せん衣食住の三者に何人も頭を垂れざるべからず是れ蓋し生産商賣の事業が天下に大王たる所以なり今余が草しつゝある一文章は英米濠の人之を讀むと能はざるも一枚のハンカチーフに何人も能く之を使用せん商賣の眼中國家の差別なく需用の世界民種の區別なし蓋し生活なる大王の力に至強至大にして人類を支配せると古今東西同一様なればなり去れば今後處世の目的は斷然生活の力に準據し萬國の人民を支配する需用供給の世界に入らざるべからずと日頃の決心愈堅くなれり

## セント、キルダの感慨

のーをぶらゐどの沿岸セント、キルダの海水浴の名所なり夏時の頗る繁昌すれ共冬時は閑靜なり俗場の遠く沖合に斗出し冷浴あり温浴あり海面は

漂渺たる南極洋の大海沿岸は白砂綠草相映して風景絶佳時に八月の中旬(嚴冬)此郷に遊ぶ數多の小公園ありて散策に便なり此の地の公園は平野を圍み牛羊を放ち椅子を具へたる迄なり彼れ等が遊園と牧場とを兼ねて利益快樂を共にするは感するの外なし園中乳羊の聲頗る悲しく園外繁華子の通行亦た壯なり蓋し此地は全くメルボルンと趣きを異にしたる別天地にして人情温雅意氣風流漫に故國に歸りたるの思あり讀者は濠洲を以て生産以外に趣味なき殺伐の處と思はん然れども流石は文朋國の民だけありて一方には殖民地本來の特性に驅られて煩茫困亂の生を送り乍ら早く已に風流快美の生活を求め悠々自適口舌遂にホームの語を發するの用なきに至らしめたり之を彼の東洋諸國が數千年來の經營を積みながらこそも父子轉溝岳今年も兄弟妻子離散と故郷に在りつゝ常に異國の天を望んで終年針の上に坐するの思あるものに比すれば民族興敗の區別果して如何感慨措く能はず此事を在シドニーの河越氏に通知したれば氏より



草枕旅より旅に行き呉れのきるだの里に憂きや止めん

と物してよこされたり同地に在ると須臾にして歸府せり其日寒風雨を交へて通行者も少なかりしがステーションに來り瀛車を待ちし午後十時過ぎなり時に乗客待合所にヘラルド、オア、スマンダードと耳馴れたる新聞賣子の叫ぶありストーブに身を暖め今日の新聞を得んと中に入れば一の少年の叫びあがら頻に石炭をストーブにくべ居れりこの如何に能く能く見れば吾が同宿の少年にてダークレスと稱する學校通の生徒なり余が宿にて奇妙にもヤモメの子を携へたるもの三組あり繼母を迎ふるは子の爲めに面目あしとて謹慎に其子を教育し亦た他事に餘念なきは賞しても餘りあり以上の兒童を何れも學校に通ひ乍ら能く働きて父を助くるなり此日も三十哩斗りの田舎に行き新聞を賣りたりとて涙ぐみ居れり去來歸るべしと少年を携て歸宿せしが殖民地の少年に返すべくも敬服の外なしと云ふべし因に云ふ濠洲學校生徒の無賃にて瀛車に乗るとを得るなり

フライトンの月

光陰は矢の如く九月となれば早や冬も過ぎ去りて稍春めきたれば今年も半ばを過しけり故郷にて冬と云へば人めも草も枯れ果てたる思ひすなれ共此のカンガロウランドの冬は千里の沃野雜草繁れる中に牛羊眠れる有様なれば冬と春との段落左程目立たず春になりたりとて春らしくもなしまして濠洲人に云はしむれば春の年の暮あれば陰ありなど、云はん苦々しき事共なり早梅と既に落花して葉のみを殘し遅き分は今を盛りと開き居るなり此ウイントリヤ中今咲き亂れ居る梅花の數も多き事ならんが賣めて一目なり共花を眺めんとするもの恐らくと大和の孤客斯く申す自分を除きて一人も是れあらざるべしこの如何に一週間以前枯木でありし柳は何時の間にか烟雨を含みて春芽參差と下れり斯く書き來れば不忍池畔の柳上野公園の櫻さながら目を舉げて見るが如し故郷と何に付けても忘れ難きものなり



メルボルン府の紅塵十丈春らしくもなければ見し事もなき小梅の里とやらんの夢でも結ばんと九月の初旬ブライトンは行けり府中のストライキ事件にて黑暗なれば結局此里こそ萬里の孤客にて憂きを慰むるに適當せり陽春九月南天の月の纖雲かゝらぬ青空に輝き面持故山の春に似て隈なく梅花を照らせり流石に我れも大和人なり此の良夜を空しくブランチの中を過ござんやと前庭に出で、樹下を逍遙すれば門外犬鳴の聲及び童謡の音殆んど故郷に似たれば友人(蘇國人)を携へて北部ブライトンの郊外を散歩せり余曰くブライトンの今月今日は儘かに我が故郷の今月今日なり今ま南天に輝ける月の儘かに我が故郷の友が眺め居る北半球の月ありそよよと吹き渡る微風は北も南も今も昔も同じ事なり童兒の歌ふ處其の舌ころ異れ其調さながら日本村落の若者が都々逸を歌ふに似たり人生の坦々平等にして水平線の如し友人曰く余は本國を出で、より十有六年を暮せり靜かに思ふに稱して故郷と云ひ稱して異國と云ふ是れ何等の

僻想ぞ蘇格蘭に在りても濠斯太刺利亞に在りても草は同じく茂り木は同じく芽立ち風は同じく吹き渡り人は同じく住む萬方同一にして異なる處なしと誠に然り詩人的の眼より觀察すれば地球の三帶を通じ到る所として詩囊に收むべき好風景あらるべきなし何となれば自然は區別なく自然は無罪なればなり宙に自然のみが萬方同一あるのみならず宙に詩人の眼より觀察して平等なるのみならず人類社會の状態も亦た然り其の生活力の下に使役せらるゝ状態の同一律にして生活の價直ハ厘毛の差異あるとなし譬へば我れ今ま聖ヒーターズブルグ府の町の四辻に驅り來る馬車を避け居ると假定せんか我れ今まコンスタンチノールのホテルの階段を昇り居ると假定せんか我れ今ま南洋群嶋椰子樹の下石上に息ひ居ると假定せんか若くは我れ今まパーク町のホテルにペンを執り以上の文字を認め居ると假定せんか其の視聽を呼び來るものは一として人類が生活力の下に使役せられ居る動作にあらざるはなし余が斯く認め居る間に日本橋の



四辻をなべやきうどんと呼び歩くと假定せよ其の瞬間の恐らくはニューヨークの大町の角にニューヨークヘラルド一ペニと呼ぶの瞬間なるべし自然が同一の美妙をもて天地を統括するが如く生活の大力も亦同一の法則を以て海の内外を統括するなり斯の如く同一又同一の世の中に血濁せる聲にて不奪則不飽と呼びしむる者何ぞや曰く所有の懸隔是れなり千年の昔し大儒蘇東坡ハ赤壁の風月に對して此の大真理を看破せり氏曰く唯江上の風と山間の月とは我と汝と執りて盡くるとなし是れ造物者の無盡藏ありと幼時赤壁の賦を學びて其の意を知らず今にして以上の文字が仰でチーチユアの同一を視俯して人類社會のミセリーを視萬古に亘りて解釋す可らざる大問題の淵に沈みたる大儒の口より出でたるを知れり

## ポルトフィリップの放談

ストライキ熱の醒めぬ中最早故郷に歸るべしと思ひ定め濠船バンドーラの來着を待ち詔び屢フィリップ港に行きしが不圖一美人の呼ぶあり何に

事かど中に入て見るに之れは近き頃倫敦より引き越したる母と一人の娘にてジョーヂ町に在りし頃は數多の日本人に交際せしが若しもや其の知人を知り居らずやとて呼びしなり其れより少婦に誘はれてフィリップ港の衡量室に行き婦人の友なる英人と談話せり少婦は去れり夫は眠れり主人も此頃はストライキの爲め閑暇無聊なりとて眠り始めたり余も眠り始めたり萬里遠來の身にも少壯の習とて一見舊識の如く黒甜郷に入るも可笑し目を覺ませば一人の佛人入來れり佛人の特性とて親切至らざるなく忽ち一場の快談を開き始めたり曰佛人は能辨にして談話及び交際に長けたり曰佛人は女らしくて男らしくなし曰英人は誇漫にして交際に長せず曰佛人は文明の何物たるを知らず彼等は鼠を喰ふ也曰元來英人は食物とは何ぞやと云ふとさへも解謎し得ぬ輩なり曰佛人が鼠を喰ひ英人が牛の尾を嬌こみ日本人が生魚を喰ふ何れも其の國の習慣なれば咎むべき謂はれなし曰貴客は佛語を能くせらるゝや曰く否曰日本の紳士が佛語を知るの



謂はれなし佛語は佛國だけの通用語なり英語は六大洲に跨りたる通用語なり曰英語は貧民土民の使用に通したる語にして高尚なる思想を言ひ顯はずに足らずシヤンペーンは貧民の口に入らずピールは何人の口にも入得べし英語が普通語なるが故に之を善良の言語なりと謂ふは恰もピールが何人も飲用するが故に善良なりと云ふに等し曰佛人は自ら共和政体を建つれ共貴族資本家の壓制甚はだしく言語の上にも普通の能力なしと見へたり見ずや此のストライキにてもユニオニストの勢力は逆も佛人には夢想の事なるべし曰甚だ然らずストライキの起るも畢竟雇主の殘酷に歸因せり勞働問題は何れに在りても難解の問題なるが英人が經營せる國土に在りては殊に甚しとす雇主が十六時間も雇人を使役するは佛人の眼より見て恥辱とする處なり思ふに日本に於ても決して左様の事なからん曰斷じて之れなし日本は多數小資本家の國にして無資本のものは誠に少なく又た飛上りたる大資本家も亦た甚た少し曰く是れ經濟上至完至善の

制度なり日本人が性質溫柔交際親切能く萬國人民の愛を受るも偏に其の制度より起因せり時に薄暮三人共に數瓶のビールを傾け西メルホルンに向つて散歩せり

#### 達斯馬尼亞人種に就て

ストライキ事件に關してポートメルホルンに八萬人の大會ありたる後は大水の跡に似て船は入らず人は通らず税關などにてハ空しく新聞を讀みて其日を消せり達斯馬尼亞航海會社は西メルホルンに在り行て船出の期日を尋ねたれども元より豫め期すべからざるのみならず同會社の今度のストライキの爲め非常の損耗にて倒産するに至るやも知るべからずとの世評もありたれば遂に達斯馬尼亞渡航を思ひ留まりぬ去れど同島に渡航せんと思ひしは一日にあらざりしあれば一言同嶋の事を述て名殘を留むべし凡そ日本より南方に降れば一步一步一段人種減少の傾きあり愈々降りて地球最南の地達斯馬尼亞嶋に至れば無慘や此の處ハ世にもためし少



なき人種滅却の國なり達斯馬尼亞人種ハ濠洲大陸の黒蠻とは全く其の種族を別にし髪は長く垂れて羊毛の如く柔軟、身軀ハ肥滿して濠洲の土人よりは長大なり常に火繩と槍とを以て護身の具となし白雪皚々の中を裸躰に暮らせし民なり既に滅失せる達斯馬尼亞人種(Lost Tasmanian race)と題せる書の著者は同人種に關せる材料を集め終りに達斯馬尼亞人種滅却の時日を記して曰く

一千八百七十六年三月(明治九年三月)達斯馬尼亞人種中最後の人と聞へたる老夫ハメルボルン病院にて没せり是れが達斯種尼亞最後の人なればとて其の骸骨を英國の博物館に送り永く同人種の紀念となせり嗚呼思ふに彼無罪善良なる吾々の兄弟が羊の毛をす髪を被り或ハガム樹白花爛熳たる下に其舞踏を樂しみ或ハカノ一船搖々たる處舷を叩きて其の國風を歌ふを見れば何人も此の民をして白骨と化せしめ人類學者の爲めに之を保存せんと試むる者あらんや全知全能なる吾々が共同の父

其の大なる聲もて汝等が兄弟と今ま何くに在るやと問ひせ玉ふ時に吾々は雙手を面に掩ふて哭せざるを得ず今まや吾々は其の兄弟なる達斯馬尼亞人種を愛せんとするも時既に後れたり

文章悲涼天涯の孤客をして一讀メルボルンのナツク、アイケドに涕泣せしめたり達斯馬尼亞に至らば山河丘陵の下に哭泣して今生冥土にためしもなき民族滅却てふ別世界の六道の辻にさまよふ魂を招かんものをと思ひ居りしが遂に其の事に至らず去り乍ら思ふに獨り達斯馬尼亞のみならず此氣運は漸く北向するの傾きあり不遠某の著者ハマオリ一八種カナカ人種の滅却を書き其の白骨を抱きて哭するとあらん此の氣運愈々北向すれば歴史家ハ記して曰はん曰く印度民族三億萬の名残ハ今まや歐洲某國の解剖博士の手に存せりと諸君若し此の氣運今ま一層其の勢力を逞せば如何請ふ試みに推思せよ

## 日濠間の貿易



國を出で、より隨所太平洋群島の報告を蒐集し兼て日本貿易品の試賣に従事し聊か南洋貿易の一斑を窺ひ知り思ふ所ありて軍艦を後ろにし河越余代氏と相携へてシドニー府に渡り二ヶ月の後メルボルンに來りて大に調査する處あり遂に日濠間の貿易に關し前途大なる望を屬するに至れり日濠間現在の貿易は左に示すが如く可言可行の事なりと雖ども後來に開始すべき貿易上の物品は多々饒々なりとす請ふ先づ現在の有様を示し實業家をして現在未來の貿易に向つて便益を與ふる所あらん

精米の今日の處大に望みあり四五年以前より注文續々増加し神戸精米會社の如き今やワイトリヤ商人の確く信用する處となり雙方の取引頗る整頓し居るもの、如し價格は一噸に付き二十一磅十志(百二十九圓)より二十六磅(百五十六圓)に達せりパトナ米ラングーン米の如きは遙に日本米の下位に在れ共價格の低さが爲め後來進歩せるの望なしとせず且つやアデレード(南濠斯太利亞の首府)の田舎ケーンと稱する處にてハ支那米に比較

すべき良米を産出し追々増加の目途を確立すべしと云へり去る二十二年中日本より濠洲に輸出したる精米は四千九百三十八噸にして價格ハ五十萬圓に上下せり余の見る處を以てするに日濠間精米の貿易ハ今後益其の歩を進むべしと信ぜり何となれば濠洲ハ勞働社會が多數を占むる處にして日本米は彼等がパンに代へてなりとも食用せんと欲する處なればなり日本魚油は將來大に其歩を進むるの望みあり價格ハ一噸に付き十七磅以上とす唯余の意見に依れば魚油を送らんよりの寧ろ魚油より分折したる白蠟器械油等を送る事甚だ佳ならんか而して此の事業ハ今後の日本に取て將に大に考究すべきものとす何とあれば日本は世界最一の海産國にして魚油の饒多なるとい世界無隻の國なればなり海産物の販路を支那に求むると同時に魚油の販路を濠米歐の諸州に求むるの策ハ目下の急務と謂はずして何ぞ

摺附木の現今の處安全摺附木一品にして幾々しからず價格は一グロツヌ



に付き一志六斤なり元來濠洲人民が黄燐マツチを好むの甚しき他に見ざる處にして安全マツチの需用者殆んど千人に一人の割合なるべし今や日本に於ては黄燐マツチの製造を禁止され居るが爲め止むなく安全マツチを輸出すと雖も日本政府の輸出の目的に向つては敢て黄燐マツチの製造を禁止せざるべく將來此の禁止の解くるとあらは摺附木の輸出は大に望みありと謂はざるべからず聞く處に依れば日本より送りたる安全マツチの中に船中に燃焼の跡を残したるが爲め税關に於ては有税品と認め之を通過するに非常の困難を感じたるものありと云へり斯の如き危き策を取らんよりは寧ろ黄燐マツチ製造の禁を解きて續々海外輸出の道を開くこと一舉兩得の策とす此禁一度解放されれば海外貿易の上に四百萬圓の増加を見るとは余の確信して毫も疑はざる處なり

硫黄粉末の一噸九磅の相場にして葡萄栽培の増殖と共に大に進歩の望みあり今後改良する處なかるべからず

魚類中鮭の如き鱈の如きは鑑詰の方法を改良せし需用莫大なり牡蠣も亦た然り鯛の如きも漬け方を淡くせば大に望みありと信ず

菓實類の中にて蜜柑若しくは金柑の如きは既に非常の好評を博しオレンヂと言はずしてミカンと呼稱すると婦女通例の言語となれり

雜貨類は中々向き宜し然れども今後頗る注意するに非ざれば時好に後れて大に損耗を來すとあらん就中美術に屬する物品の如きは其の趣向常に同一の物を輸出すべからず試みにエリサベス町に行き見るにメルボルン製の美術品中日本の意匠を參酌し原品よりは一層趣きあるもの少なからず一例を擧げて我が商人の注意を望むべし

一、同地製の水菓子臺に雪竹の趣向を執りたるものあり元來西洋人の雪に竹杯と云ふ風流心は夢にも知らぬ話しなり雪と云へば詩でも文章でも若しくは圖畫も必らず一二の櫛と犬とを附し之れにて満足し居りしなり然るに漸く日本美術の精粹を知るに及て始めて雪竹の妙味を解し直に



之を水菓子臺に應用せり臺は無論硝子を基礎とし臺の周圍は銀製の竹葉參差として舞下り降りしきりたる雪の竹葉を壓して堆く積り臺の下部に日本流の茅屋を造り其の竹をして此の屋後より生ぜしめたり此の景に對すれば思はず古里の冬ぞさみしさまさりける人めも草も枯れぬと思へばの古句を思ひ起さしむ

二、花瓶の綾模様は古色揃すべき日本趣向を附したるものあり花瓶と日本流の花瓶にあらず頗る匾圓ある方なり品物は陶器なれ共地合は赤地の漆に左も似たり之に附したるは古昔日本の金襴地に織りなせる綾模様を幾通りとなく浮かせり中にも此の趣向の日本美術品より出でたる所以を證する一例の卍字形の模様綾織地の模様如き明々として掩ふべからざるものあり之に加ふるに下部に洋人得意の花紋を附したり美術品として頗る美麗なりき

其他柳に蕪梅に鶯月に時鳥などと云ふ趣向さへ實物に應用したるもの甚

はだ少からず左れば當地の人民が一度日本美術品の妙味を知りたると同時に之を咀嚼して已れが有となし進んで之れが應用を計り居る一事の著明の事なれば吾々は今后大に悟る處なくんばあらず日本美術品の趣向を日本人特有の物と信ずるは恰かも歐米人をして蒸氣電氣の文明を歐米人特有の物と信ぜしむるに異らず結局日本の雜貨品は世界の美術品に非ず日本の美術品の思想上の美術品にして應用美術品に非ず故に當國の人民の日本の美術品と云はずして唯雜貨と稱し居るなり正當に之を言へば日本に泰西向きの美術品なし唯だ彼等が好奇心を満足せしむるに足る奇怪の物品あるのみ通常美術品と云へば人生日用の物品に裝飾を施したるものを意味するあり然るに日本の掛軸や香爐や花瓶や金襴や帶地や果して彼等外人の日用品となし得べきか是れ誠に日本國民が非常の決斷を以て在來の觀念的の美術を排却して大に應用美術を興起せざるべからざる所以なりとす



了りに臨みて一言直輸貿易を志す人に注意すべし從來日本より自ら進んで直輸貿易を試み當地に來りて外人を相手にする分の前後不首尾の始末にて抄々しからず右の數限りもなき日本品幾百千種となく相分れ一纏めとしてマーケットに附すると能はざるものを輸出し來り止むを得ず店を開きて非常に高きレントを拂ひ洋人を雇ひ先づ世上の評を受くる以前に多額の入費を支出せるに由れりパース町にては一週間のレント五十磅以上及びエリザベス町スワンストン町にては十五磅以上に及び依りて第三等に屬せる町に店を持つも諸入費一ヶ月一千圓も支出せざるを得ず是れ策の得たるものにあらず日本商人中時として見本を贈り領事館に向つて其の相場を聞き合はすものあれ共小さき手荷物計りの物を贈りて相場を聞くが如きは驚きたる次第なり此頃も濠斯太刺利亞製のバタを英國に送り其の相場を聞き合せたるとあり日本商人ならば幾十卦度位にて其の相場を尋ねべけれ共當地の商人の事に熟し居れば見本として贈りたる

バタ十七噸の多額に達せり右の次第にて日本商人の爲す處兎角當地商人の相手とするに足らず規模狭小組織不整頓なれば何時も満足の結果を見たるとなし

且つや本邦當業者より送附せる各種見本を當地の者に示し注文の見込ありや否を問合すに當り先方の質義に答ふる能はざる種々の事項ありて爲めに不便を感ずる事尠からず就中其重なるものを爰に列記せんに第一の運賃にして從來の經驗にては運賃を報ずると甚だ稀れなり大抵は産地若くは製造所の元價のみを記せり然るに運賃の最も大切の事項にして之れを知らざれば元價を販賣地着の算するに由なく商況の見込を立る能はず尤も本邦當業者の未だ輸出業に不馴れあるを以て運賃等の調査に手数を要する事なるべしと雖も自己の商品を販賣せんとする方に於て斯る手数を厭ふときは購買せんとする者に在ては尙更の事なり然るに今一の見本を示し製造所の元價の若干なり之を注文するの意ありや否運賃包装費の



之を知らず注文者宜しく豫定算出すべしと云ふが如きは商を學ぶの道に非ず業に不深切なりと云ふべし況や運賃と大抵積出し港に於て定むるを常とするが故に濠洲に在て日本よりの運賃を知らんとするは難く日本に在て濠洲迄の運賃を調査するは容易なる可きに於てかや將來は成るべく見本と共に運賃を報告し且つ一噸は何箇入りの箱凡そ若干なりやをも記載すべし一旦見本を出し再應の照會を経て初めて運賃を開合するが如きは初めより是を調査して報告するに如かざるなり第二に代價仕拂の事ハ又運賃に續ひての緊要條件にして少しく望みある商品を示すときと此簡條を問はざるはなし今歐米より送出来る貨物の代價支拂を聞くに短かきも引渡後三十日にして荷主代理店には委託書ある時ハ固より直接に代金の受授を爲す事なれども全く書信而已にて取引するときハ荷主ハ注文先へ積出し案内狀を發し同時に當地の二銀行へ積荷証書と共に送附するの相場に従ひ英貨に換算したる手形を送付し代金取立を依頼するなり(荷爲

換との別なり)其手数料東洋銀行(横濱神戸に代理店あり)にてハ五厘乃至七厘五毛(百磅に付十志乃至十五志にて取扱也云蓋し必ずしも此方法に依らざれば注文者なしと云に非ず當業者の都合にて即金拂又前金拂を要するも不可なしと雖ども兎に角代價支拂の事を何とか記載せざる中ハ如何にも商賣的精神を欠くもの、如く大に先方の不安心を惹き起すの恐れあるなり第三は製造日數の事なり例へば幾個幾箱迄ハ注文到着より幾日間製造を終るべしと云ふの類なり第四は信用の事にして注文履行の責に當る者當地に在りや否若くハ當地の信用ある人物のレファレンス(保證ありや否是れ寔とに答ふるに苦しむ所の問題にして恐らくは除却し能はざるの困難なる可し畢竟見本取引の如きは双方信用厚くして而して後初めて行はるゝものなる可し故に一旦本邦當業者に於て其信用を廣く海外に得るの後は見本取引の事容易なるべしと雖ども此の信用を得る迄の間ハ到底責任者の彼地に來て經營するに非れば充分の好果を收むるを得ざ



るべし而して其事未だ行われずとせば機に乗ふ宜に従ひ時々多少の注文ある毎に誠實に之を履行し見本を示せに當りてハ商賣的精神を顯はし漸次信用を全ふするの他あかるべしとハ獨り余の意見のみならずメルボルン日本領事館員も亦切に唱ふる處あり

濠洲より日本に輸入すべき物品は簡單にして取引上頗る便利なり曰く羊毛曰く石炭曰く獸皮曰く獸類の諸品是れなり以上の諸品の何人が日本に輸入するも相應の利益は必らず擧取し得べきものとぞ一千八百九十年の調査に依るにニューサウスウエールズ州のみにて牧羊は過る十年間一千万頭を増加せりセイクトリア、達斯馬尼亞、新西蘭の三殖民地も亦た地方の支ふ限りは既に牧羊の地と爲せりクイーンズランドの如きハ年々五十萬頭の割合を以て進歩せんとす願ふに今後羊毛の供給者は彼オーストラ、ンヤンにして歐米の二大國は漸次に羊毛の供給を減ずるとならん蓋し人口の繁殖と羊毛の收得とは常に正反對の比例を有するものにして人口増

加し耕地擴延すれば牧羊の業は直に退歩するなり歐洲の牧羊は過る十年間に五千萬頭を減じ羊毛二億萬卦度の損失を爲せり又た亞米利加に在りてハ一千八百八十四年に隆盛を極め五千萬頭以上に進みたりしが今ハ既に六百萬頭を減じたり而して人口稠密なる新英蘭及び東部諸州は僅に七百萬頭を有し人烟稀疎なる南部及び西部諸州ハ大數四千萬頭を有せり去れば今後歐米の兩洲に於て漸く牧羊の數を減し獨り濠洲に於て其の數を増加するは照として火を見るよりも明かなり何となれば濠洲の人口は目下僅に三百七十九萬人に過ぎずして耕地乏しく牧羊に供するの土地は饒々多々今後尙幾百年を支ひ得るの見込あればあり

牧牛ハ新西蘭、ニューサウスウエールズの二州を最としセイクトリア、クイーンズランド之れに次げり今ま比年精密の統計を得ずと雖も濠洲にハ凍肉製造會社なるものあり南半球の牛を屠りて其の肉を凍結せしめ熱帯赤道道圈を横切りて歐洲に輸出せり又たバタの如きも現に多額の産出あり昨



年余がメルボルンに滞在せる頃歐洲の市場に於て既に好評を博し今後輸出の道に上るならんと云へり

馬匹のクインズランドを上位としウェイクトリヤ、ニューサウス、ウェールズ州之に次びり總て濠洲所産の馬は悉く歐洲印度に輸出するものにして全世界最長の馬匹とす英國の競馬に於て全勝を博するものは濠洲産の馬なり印度の競馬に於いて亞拉比亞馬に敗を與ふるものハ濠洲産の馬なりとすメルボルンより印度に輸出せる馬疋の數のみにてても一ヶ年十萬頭に下らずと云ふ且つ馬ハ濠洲なる殖民地の特性を助成する一原素にして馬市の如き競馬の如き盛大萬國に冠絶し人民舉げて馬の爲めに幸運を求め馬の爲めに性情を奪はれ馬の爲に新聞を閱讀するかと思ふ斗りなり

濠洲の商業は比年驚きべき進歩を爲せり輸入ハ已に三億萬圓に達し輸出ハ二億五千萬圓に垂んとす日本の人口は濠洲に十餘倍すれ共輸出入ハ四分の一に過ぎず國力の懸隔推して知るべしメルボルン府の銀行資本額ハ

十億五千萬圓に達し建築受負會社の資本も亦た之と上下し各種保險會社諸興業會社の資本も亦た此の上に出たり信用の道は完全完美にして金銀の貸借は雙方便を盡し貯蓄保証の道亦た驚くべき斗りに進歩せり濠洲ハ内地の貿易とてハ微々として數ふるに足らずと雖も海外貿易の盛大なるとは言語に絶せり試みにサモア島のサモア、ヌメヌメ、南洋商業廣吉新聞を緝かバサモア以南の諸群島は悉くシドニーに向つて輸出入の路を得トシガソロモン、サンデー、フィジーの諸島之れが中心たるを知るべく又たニューカレドニア、ニューギニー諸群島の輸出入ハクインズランド重に貿易の權を握り印度瓜哇及蘇門答刺諸郡島の貿易ハウェイクトリヤ之れが主宰者たり一口に言ハハ太平洋群嶋印度諸島南米諸國の貿易ハ半ば濠洲なる大市場に集るものと知るべし彼等が伎倆の程は驚くの外なしと云ふべし今此の章を終らんとするに臨み事の因みに濠洲商人の廣告に機敏なる點を掲げて讀者の參考に供せべしアイヌグリーム屋、花屋、肉屋の如きは水利



を應用して人氣を引けり其の趣向は何れも天井より水を引き一枚硝子を傳ふて下り水激して種々の廣告を示す様になせり寫真屋の夜に至れば十階以上の高樓に幻燈を供へ何れより見るも之を見得る様になし二分間毎に機器を轉じて種々珍らしき趣向を示せり書物屋煙草屋などにてハ彈器を應用して人形を動かし奇妙なる廣告を爲せり當地の獸皮會社に至れば七尺に餘れる袋鼠と之れと伯仲する駝鳥を店頭に供へ中に至れば總て獸皮を以て標本を造り恰かも動物園に行けるが如くかばんを携へたる猿巾着をくわへたる栗鼠千差萬別なり新幾尼群島貿易商會の前に至れば有名なる極樂鳥の標本亞非利加産の駝鳥よりも一層美麗なる羽毛を有せる駝鳥の標本を置き之より造れる婦人帽子を附せり其他白珊瑚土人が鼻を通きて飾りとなせる寶石等眞物の儘之を供へ一見ニユギニ大島の展覽會の如くならしめたり支那貿易商會重もに茶ハ支那の風俗中最も異様なる分を抜きて人目を驚かし印度貿易商會同じく茶には印度土人の理髮師

裸体にて他の頭を剃り居る額を置けり

支那茶は過る三年間に福州より輸出せる分の歐洲大陸南亞非利加濠洲全土を合せて三分の一を減じたりさて支那茶が左程に非常の顧客を失したるハ全く印度茶の好評を博したるに依る印度茶は少しく香ひあれと寧ろ芳香と云ひ難し支那人茶の顧客を此處に失したれば轉じて露西亞地方に其の損失を取り戻さんとす日本の茶業家大に考ふる處なくんばあらず兎角何事に依らず彼れアングロオーストラ、シヤンが銳意生産力の増進に盡力し居るは敬服の外なし元來濠洲ハ歐羅巴全洲の五分の四もある大平原にして新南威斯ウヰクトリア、グインズランドの中に二百五十萬の人口を有し殘る廣大の土地にハ僅かに五十萬の人口彼地此地に散點するに過ぎず就中クインズランドの如きは土地豐沃なれば農業の發達頗る盛んにして何人が同地に行くも勞働者たるの認定書を役所に受くれば同州の鐵道と所在一錢も要せずして乘るを得べし右の通り非常の盡力を爲し居



れば彼等は内地開拓の一點に注意して他事に餘念無かと云に甚だ然らず英國政府は各殖民地に命えて新幾尼大島内地開拓の爲め差向き金山開堀費として年々六殖民地(クイーンズランド、新南威克斯、ヴィクトリア、南濠斯大刺利亞、西濠斯大刺利亞、新西蘭)より五千磅宛醸集するとせり嘗に之れのみならずヴィクトリア、達斯摩尼亞の進歩を計るに怠らず新南威克斯はサモア以南の小群島との貿易を奨励すると一方ならず思ふて我が日本の生産世界に至れば膽裂け心破るゝの感あり世の君子らちもなき浮世の事を放棄して大に奮ふ處あり

### 殖民地特發の事情、労働問題

當洲の人氣は如何にも激しく總て殖民地に生起すべき流義は一として當國の津々浦々にまで行き渡らざるはなし先づ家を造るには玄關の方は硝子細工もて目を驚す計りに飾り立て奥の方は硝子瓶のカケと只今食ひ殘したる肉の切れと同居し居る有様にて其不潔なると又目を驚かす計りな

り何事も(早く遣れ)の一語を以て其秘訣と爲し居れば事物の抄取る事は至りて速かなる代りに粗末千萬の仕事爲し其れにて充分満足し居れりドニーの如き府民の口癖とする語は早く遣れ(Go on quick)是れなり食事を爲すにも早く爲すべく大小便を爲すにも早く爲すべし牛乳配達人パンヤ牛屋杯は總て馬車にて目を廻す計りに狂ひ廻り人足は一日一分間の休息時間もなく汗水流して働き猶監督人より苦情を言るゝなり之を吾が東京流義に比するに恰も彼のサモア、布哇の土人が四ツ五ツのパナ、(芭蕉實)を二人にて終日ナラ〜と擔ぎ廻るなまけ流儀と日本の大都會に朝十時豆腐を賣り晚四時に魚を賣り廻る有様とを比較したるが如し當國の労働時間は何れも甚はた永し童謡あり曰く

"Twelve hours for a man, Ten for a woman, and Eight for a awful lazy fellow."

男にや十二時女にや十時餘程間拔にや八時間

是れ當國に於て一般の人氣が定めたる労働時間なり去り乍ら今日の實際



は此規定時間よりも幾層永き勞働時間を執り居れり通例男子は十六時間婦人は十四時間非常の弱身にても十二時間は勞働せり右の次第なれば睡眠時間は至つて短かく春眠不覺曉などと云ふ事は當國人民の夢想せざる處なり童謡亦睡眠時間を規して曰く

“Six hours for a man, Seven for a woman, and Eight for a fool.

男にや六時女にや七時として馬鹿には八時間

斯の如く當洲の文明の働きつめに仕上げたる文明なれば勞働社會の苦情は隨て絶るの期あし余輩がシドニーに到着する以前の想像に依れば濠洲は今まや無限の土地を有し無限の勞力を要する位地に在れば勞働社會は満足なる形を示せるならんと信じたりしに事實は全く之に反對し余輩をして一驚を喫せしめたりメルボルンの年代新聞記者がシドニーのハイド公園に毎夜二千人の野宿者ありとの一事實を掲ぐるや此の事濠洲の一問題となりシドニーのヘラルド新聞記者は大に年代記者を非難し若しハイ

ド公園に毎夜二千人の戶外睡眠者ありとせば翌朝は二千人の貧民行軍を見る筈なり二千人の行列は中々長さものなれば行列の終る間は馬車もケトル瀟車も通行の叶はぬ次第なりと論じ最後に同記者の實驗と稱する小説らしき事實を記載しハイド公園には戶外睡眠者一人もあることなしと斷言したり右の兩新聞は當國の二大新聞と稱せらるゝものなるが他の一新聞は兩新聞を仲裁してハイド公園の睡眠者五百人と記載したり去り乍ら此の仲裁はシドニー新聞の口より出でたれば全く信を措くに足らず一般の風説に依ればハイド公園の睡眠者一千人より二千人迄とす是れ實に驚くべき次第なり右等の戶外睡眠者は何れも無職業者中の最も貧困なるものなれば何等の職業もなく働らかんとするに地を有せず賣らんとするに資本なしと云ふものは幾何なるべきか推して知るべきなり去ればシドニーには無職業者協會なるものありて種々保護の道を講ずれ共元より抄々しき結果を見らるべき様もなし余は曾て米國の開國史と濠洲の殖民



史とを繕き此の二大殖民地が貧民と犯罪者との一群より進化し來るものなるを思ひ起し貧困も亦た一種の勢力にして敢て恐るべきものに非ずと信じたりしがそは大なる誤解なりき凡そ十五世紀以來今日に至る迄歐洲人種が成し遂げたる殖民史と稱するものは純然たる異色民族滅却史にてありたるなり去れば殖民地に送られたる貧民は故郷に在りてこそ貧困なれ殖民地に在りては廣大の土地所有者なり廣大の土地所有者が是れ位の新開國を建設し得るは素より然るべき等なり然るに今や掠奪すべき程の土地は悉く掠奪したるが上の貧困彼等が頭上に落下し來りたれば鬼を欺く碧眼人種も此難解の問題には匙を投げて爲す所を知らざるに至れり

ヘンリー・ジョーヂ氏

斯る折しも有名なる米國の土地平權論者、Progress and poverty(進歩と困窮)なる書の著者ヘンリー・ジョーヂ氏當國に來り土地問題勞働問題社會問題に關する演説を爲せり今やシドニーの勞働社會は前に陳べたるが如き有様

に陥り居れば此の勞働社會の救主と崇められたるジョーヂ氏の事なればシドニーに於ては盛んなる待遇を受け三月九日ピット町のコングレギーショナル教會に於て演説せし時の如きは無數の聴衆戶外に靜立するに至れり氏論して曰く

今や勞働問題は最大問題として我等が頭上に下れり何人も其明を失せざる程の者は當世紀の文冊中其の根底に最も深き不安の存在するものあるを認めん當世紀の文明ハ非常の利益を我々に與へたると同時に一方には曾て望みたる利益を剝ぎ去れり……今日の大問題は必らず解釋さるべきか或は當世紀の文明が全く破壊さるべきかの二點に歸せり……土地は勞働者の所有たらざるべからず勞働者は其土地に休養を受けざるべからず今まや生産力と生産の源とは常に反對の方向に進み居れり此の相互の距離漸く遠かるに至らば土地と勞働との中間に一個の大溝を造り共に望みなき結果を來すに至らん……國民は



國家の土地に向つては同様の權利を有せり何人も悉く國家の土地所有者たり……去り乍ら平等に土地を分配するとは無用あり單に土地を分割するは恰かもレントを分割するに異らず……今此に十二人の者が一隻の漁船を所持したりと假定せよ彼等は此の一隻の船を一ダースの小切れに打ち砕くことは勿るべく必らずや此の一隻の船より生ずる利益てふを十二に分配するならん然らば我々コミュニチーも亦た斯く爲し得ずと云ふの理あらんや……土地既に普通財産なれば租税又た普通の負擔たり……斯くて今日貧富の懸隔の其度を止むるに至らん……我々國民は國家に向つて正當の權利を要求せざるべからず氏ハ三月廿五日メルボルンに來れり今やヴェイクトリヤ州は保護貿易の制度を執り新南威斯の自由貿易制度に打ち勝たんと試み居る時なれば氏の來着の如何あらんと思ひしにシドニーよりは一層の熱心を以て歡迎せられたり中にも地價稅協會(Land Values Tax Association)單稅同盟(Single Tax League)土地平權會(Land nationalization League)の委員は何れも盛大なる出迎を爲し氏に祝辭を捧げたり其祝辭の如きは莊嚴雄重を極め氏を以て經濟學の大改革者最も芳しき著者人類道德の頹廢を救ふ宗教家絶大なる能辨家として稱賛したり氏マウンホールに於て演説して曰く

……南洋の大都會は今や美事なる進歩を爲せり余は三十五年以前一度當府に來りし事あるが當時のメルボルンと今日のメルボルンとは驚くべき相違あり去り乍ら他の大都會に於けると同様當府に於ても亦畫の暗黒なる部分即ち貧困と窮厄の發達せるを認めり……最近の半世紀は英國に執りて非常の進歩なれ共勞働者に取りては彼等が聯合と罷工同盟とより何物も發達せず否な寧ろ北部蘇格蘭の貧民西部愛爾蘭の窮民の如きは文化の盛んなる發達と同時に反對の結果を得る難民の手本と稱して可なり……米國中最新開の州に於てらすも勞働の剩餘を舊開國に所謂過度生産と稱する現象の發生を認め此の結局の原因は



人類の自動的作動者が生産の舞臺に於て他動的作動者より離別され居るに依れり……愛爾蘭の土地問題は全愛爾蘭が愛爾蘭人民に歸するに非るよりは決して借地人民の要求を充すと能はず此の一事我々向に於て亦た正當の判斷なるべし……凡そ單稅の目的たる格段なる所有權の價直より生ずる利益を普通の利益に向つて地所の所有者に稅率の形を以て一の義務を課するに在り若し斯くせば稅は總て單純に地價に課せられ其の他の稅は悉く廢せらるべし此の結果は空しく土地を所有して地價の騰貴を待つとの弊を防ぐべく從て勞働が普通の財本に變成したるが上の課稅よりは遙かに得策なるべし語を替へて之を曰はゞ稅は人民が勞して得たるメ高の割合に向つて課するに非ず人民が所有せる普通財産の價に課するなり……今や當國濠斯太利亞も亦た合衆國が爲せし事業の跡を追ひ居れりそは他に非ず勞働の源たる土地を英國の侯伯に賣り渡すと是れなり……單稅は單に社會形骸上の藥石のみならず

同時に道德の退化を救ふ藥石なり……

ヘンリー・ジョー・チ氏と其頃メルボルンを出立して各所を巡廻せり同氏は元と船室の給仕を勉め續て植字人となり窮困なる生活を送りたる人なる由去れど今は五洲に其の名を轟かし天下の思想界に波瀾を與ふるの人とはなれり

爾後濠洲に於ける勞働問題の日に強盛の勢を示したりしが一轉して

### 濠斯太利亞全洲水夫ストライキとなれり

八月初旬より船主と船長以下の舟子との間に困難を生ゑ一方は勤務時間の減少勞銀の増加を請求し一方は是を拒絶したるより容易ならぬ葛藤と成り數十回の書面を往復したるが上にツレードユニオンはメルボルンに於て大會議を開き濠洲全土水夫ストライキを議決したり此の議決の各國に知らるゝや倫敦 Dock 勞働者ユニオンより同意の祝辭を送りアン・トウエルプ勞働者ユニオン長より激贊の電報を送りたりさて初回の議決



了りし頃のツレードユニオニストの方甚はだ手弱く見へたりしが幾萬のユニオニストは悉くノンユニオニストの中に一人たりとも船に就職するものあらば引く手は見せまを確く決心したれば暫時にノンユニオニストの勢力を撲滅し盡せり差ればノンユニオニストを力に頼みたる船主は大に驚く處あり濠洲全洲船主の大會議をアルバリー驛に開きたりしが結局手強き政略を以てストライカーの請求を拒絶をべしと議決せり其の翌日に再びツレードユニオニストの大會議あり眞自由の先鞭新社會の開拓の爲めに全ユニオニストを犠牲に供すべしと云ふ激烈なる決議を爲せりさて此のストライキたるストライキの歴史中には最も激烈なるものにして其の結果の慘憺たる事彈丸硝薬の戦争の比にあらずメルボルンは八月廿五日より全く瓦斯を點せずグイットリヤ百萬の人口四割二分の人民が占居せる大都會は黑暗城と變化し此の黑暗城の市民は今や一塊の石炭を有せずメトロポリタン瓦斯會社の全く瓦斯の供給を斷絶したれば瓦斯爐

より火食を仰ぎたる無數の市民も同日より全く火食せず鐵道も既に石炭を切らしたれば過半の線路は其の往復を差し止めたりグイットリヤを通じて苟くも工業に屬せる程の會社は日に土崩瓦解し無數の非職勞働者はメルボルン全市に充つるに至れり是れ實に意外千萬の大戦争にして倫敦のペルメルガセットが評したる如く濠洲の商業は全く地に落つるかと思はるゝ計りなり物價の當時平均三倍に達せりさて何が故に右のストライキが斯の如き慘憺たる結果を來たしたりしやと云ふにグイットリヤ全洲の石炭は總て其の供給をニユーカスツルに仰ぎ居るなり然るに今まや濠洲の全海岸を通じて一隻の船も動かざる事あれば俄かに石炭の欠乏を來たし斯る非常の始末とは相成れるなり尤も石炭に限るに非らず濠洲の輸出品凍肉牛馬羊毛等の物品の全く停滯して需要の口を失せり然れ其輸出品の如きは些少のものにして石炭の欠乏の如く激しき差響を來たさずグイットリヤの文明が工業文明なりとせば此の文明は石炭の文明なり



而して今や其の原素たる石炭を切らしたる事なれば其の結果實に想像するに堪へたり

此のストライキが母國に知らるゝや兩黨に向つて手強き應援あり英國船主は八千萬磅(日本金五億二千萬圓)の大金を以て濠洲船主の利益を保護すべしと決せり又た一方に於ては英國の艦隨院長兵衛と聞へたるジョーン・パルン氏は自ら大叫して濠洲のストライキハ倫敦ドックストライキよりも一層激大の影響を來すべきものなりと稱し畢生の力を揮つて是を助くるに至れり

八月三十一日にハメルホルン、フランダース公園に於て第三回ユニオニストの會合あり、該會ハメルホルン府建設以來最も大なる會合にして人數ハ四萬人の上に出で演說者ハ十二人に及び演說壇と數箇處に具へられたり此の會合に於て組合連中より非組合連を襲撃し事容易ならずと見へたるが特別巡查二千人の注意に依て事なく閉會せり此會合に出席したる演說

者は總て一人當千の剛の者博識雄辨能く此の四萬の人數をしてストライキの爲めに死を恐れざるの感動を起さしめたるが中にも遠く英國より出したる遊說家チャンピオン氏なるものあり今度のストライキに執りてハ一城の重きを掛けり氏ハ倫敦ドックの英雄と綽名されし人物にして東倫敦繩製造組合長なり職業組合助言者中には八時間制度論の巨魁として誰れ知らぬ者もなき有名の論者なり氏の當殖民地に來るや問もなく濠洲全洲の罷工同盟起りたれば氏は曩きに新世界の勞働制度を學ばんが爲めに來れるなりと謙遜したるにも拘はらず雲氣を得たる龍の荒れたるが如くユニオニストの大會にハ一度も欠かさず出席して慷慨なる演說を爲しユイナ新聞紙上はハ自ら筆を執りて殊に合衆王國船主大會の組織に評論を加へたり氏が二回目のユニオニスト大會に出席したる折は自ら采を執りて率ゐたる倫敦ドックストライキの事狀を評論し大にユニオニストを勵ませり氏曰く



彼等(倫敦ドックストライカー)は自由を信じたり然れども一百年以前の民が信ぜし處の自由を信ぜしにあらず彼等と單に名に於て自由を信ぜしにあらず唯其の物の實態に於て是を信ぜしなり彼等の政治上の自由と稱するもの即ち人をして他の抑壓より一の雇主若しくと某の人を投票せしむると云ふが如き投票權の下に置かれたる政治上の自由を信ぜず(They didn't believe in the political liberty which placed all the voting power in sn-  
 on hands as would make the men vote for one employer or another at their bidding)著者云ふチャンピオン氏信ずらく政治上の自由と稱するものは全く投票權の下に成立するものにして其の投票權と稱するものは實際地主株主等即ち總稱してエムプロイヤーと稱するもの、手に握られ居れば世の所謂政治的自由の單純なる名に過ぎずと彼等の人をして實際自由ならしむる處の自由を信ぜり此の自由たる彼等をして人と爲さしめ彼等の職業及び其の生涯を通じて自治の便利を與へ又た彼等に彼等自ら甘んじ

て従はざる可らざる法律を構成するに適したる實權と稱するものを與へ彼等をして眞實の市民と爲さしむるに必須なる教育と堪能とを得るの機會を與ふるあり云々

氏は此會に於て英語國民(英國印度米國濠洲)を通じて職業組合の大組織を組立つる事業の初歩は今度の濠洲ストライキが其基礎を爲はならんと云へり其經營の雄大なると推して知るべし此のストライキの人心に影響したるとい豫想の外にして當洲の思想社會は之れが感化を受け爰に

### 自由の新定義

を發見するに至れり今當殖民地人民の所説を掲げんに曰く古昔希臘の時代より十八世紀の了りに至る迄人類が自由に下したる定義は如何蓋し自由とは君王及び貴族の抑壓を排斥し政治上の權利を平等にせると是れなり斯くて或る時は無罪の王を斷頭臺に乗せ或る時は是非なく君王の首を斬り或る時と親友に向ふに刃を以てし或る時は哀れなる公達を放逐せり



而して此の自由を得る唯一の利器は代議政体と云ふもの是なりき左て首尾能く君王貴族の抑厭を排斥し代議政体を建築して満足に兼て望みたる自由を得たるかと願れば無慘やヒューマン・ミゼリーは依然として去らず否々人類の苦害慘虐ハ日に月に増長して幾多の罪惡無數の窮厄……人の生涯は生き存ふるに價直なま……と決心する迄あらゆる虐遇を受くるもの愈々多くなり行けり斯の如き慘虐を受けて慘憺たる生涯に埋められながら何人か鼓腹擊壤して吾等ハ自由を得たりと揚言するものあらん代議政治の祖國たる英國より將た日耳曼より魯西亞より米國より佛國より無數の人民無數の論客ハ大聲に稱道して吾等は未だ自由を得ずと繰り返せり彼の路易王の冠を失ひ奉りたる佛國の市民がバスマイルに進撃しつゝ吾れにパンを與へよと叫びたる其のパンは未だ得られざるなり嗚呼自由の定義ハ誤れり君王及ひ貴族の抑厭を排斥し政治上の權利を平等にするると自由を得るの道にあらず自由を得るの道は猶ほ他に是あらん當州

の新聞の如き龍動の新聞の如き孰れも既に自由と云ふ文字を政治上の權利を得るの道に使用せず自由の語は全く經濟上の使用語となし居れり諸君子眞自由を求むるの聲は今や碧眼民族が點居せる各國より起り始めたり新信仰の曙光は今や歐米濠の天よりほのめけり此結果は如何眞自由求められずんば此の文明を破壊せん新信仰得られずんば此の信仰の下に死なん此の結果は如何好し勞働問題は職業組合の制度に依て解釋さるゝも土地問題は猶ほ他の解釋を要せん好し土地問題と單稅制度に依りて能く解釋さるゝも社會問題は猶ほ他の解釋を要せん余も信ず學者の希望詩人の哀訴貧民の悲泣到底醫するの期なし然らば眞自由を求むるの咆哮ハ荒涼なる滅亡の墳の中に沈み果てんか曰く否々眞自由を求むるの道實際に於て唯一あり曰く

眞自由ハ異種民族の自由を剝奪して之を得るに在り  
是に於てか萬國中央勞働同盟ハ絶大の勢力をチユートニツク種族の中に



構成しつゝ、ウイール、ヘルム、三世を引て、其の味方となし、一方に於て、アンチセ  
 ミチック同盟なる根毒の協會を結び、彼れ異種民族の勢力を剝ぎ、之を苦し  
 め、之を辱しめ、……口にてそ言はぬ、汝セ、ミチック種族の自由を剝ぎ去る  
 に非ずんば、我等が希望する眞自由は得られずと……其全力を注で、異種  
 民族を滅却せんと、彼れ硬腦のハリソン大統領と、其の教書に於て、合衆國  
 の平和と自由とを保たんとせば、我等が造り成せる文明を攪亂すべき、異色  
 民族の侵害を防がざる可らずと云ひ、六千萬の半數にも垂んとするレ、パ  
 リカン、は擧りて、亞細亞民族を放逐せり、華盛頓領地にては、日本人も將に放  
 逐の辱に遇はんとしたるは、事實なり、而して此の多數のレ、パブリカン、悉  
 く労働問題に渴を訴ふる徒の組織せるものなり、嗚呼、労働問題と異種民族  
 却の問題とは何が故に斯く迄密接の關係を有せるものなるか、請ふ、江湖  
 の諸君子、高く眼睛を放つて、此の秘訣を看破せよ、彼れ労働問題に渴を訴ふ  
 るの徒の何が故に十八世紀の民が君主貴族を斷頭臺に乗せたるが如く、土

地所有者資本家を斷頭臺に乗せんといふ爲さず、強ちに異種民族滅却の事に  
 従はんとするや、

余も進んで英國人民が救貧の考案を解せん、彼等は我れに自由競争を與へ  
 よと叫びたり、其の競争に於て、全勢力を得るの見込ありしが、故に斯く叫び  
 たり、マンチエスマーの烟リ、グラスゴウの金槌の音、地下鐵道の響、悉く、全勝  
 の利器にあらざるはなし、彼等ハ人肉を食したる獅子の如し、異種民族の自  
 由を剝奪したる美味は得て忘るべからず、彼の愛爾蘭の荒野に、ジャガタラ  
 諸の墓を食またる貧困、蘇格蘭の濱邊に、木皮を削りたる困窮、威爾斯の城下  
 に、獸骨をカチリたる難儀、何れも或はアメリカインディアン民族を滅却す  
 るとに依りて、醫し、或ハ濠洲の土人を滅却するとに依りて、醫し、或ハ三億力  
 の東印度民族を征まるとに依りて、醫し、マオリ、民族、ヒルマ、民族、アビシニヤ  
 民族、エチオピア民族、何れも此の犠牲に供せられざるはなし、斯の如く、彼等は  
 既に人肉を食したるの獅子なり、其の飢渴堪ふべからざるに至りては、可愛



相なれ共詮方なしの一語を手向けに其の爪牙を露すなり  
 諸君子宇宙の空気が一變して天下の大勢は動搖せり政治問題は之れを解釋  
 したるが上に解釋せり唯最後に残れる難解の問題將に最大最強の勢力を  
 以て人類の動作に現はれんとす思ひ起る軟風そよぐワイキ、の刈野荒波  
 寄するヒロの磯邊晚烟籠れるマウナの麓椰子葉參差たるアピヤの孤村何  
 れも此激烈なる動作が悲しむべ結果を示さざるはなし涙だ片手に南太平  
 の洋を渡り南十字星下の妖野に來たればウルムル、の灣ワガ、の水  
 ャル、の河の空しく故主の遺名を止めて寄る邊なき藻草は古き世を  
 慕ふに似たり眸を擧げて大印度を望めばデルハイの月苦んでカシユミル  
 門の遺趾に怨鬼悲しみ王子皇孫の骸と荒れたる雜草の中に埋却して山河  
 長へに血食せずアラハバツドの廣野雲霧糾紛として當年慘虐の跡を殘し  
 カン、の血食せずアラハバツドの廣野雲霧糾紛として當年慘虐の跡を殘し  
 問はん由もあし苟くも此の慘憺たる跡を見ん程の人へ假令冷情氷の如き

人なるも如何で熱涙を絞らざらん況んや是れ既に過ぎ去りたる些少の齒  
 歴なり彼れ碧眼民族が政治問題に熱中したる時の出來事なり無告の困窮  
 は内國施政の方針如何に由て醫すべしと信じたる時の出來事なり未だ勞  
 働問題の盛んならざりし時の出來事なり是の時に當りて學者は未だ此の  
 世の食ふか食へるかの世界なりとの眞説を發見せず未だ人口の増加の  
 食物の増加よりも甚はだ速かなりとの事實を發見し得ず未だ天地萬物皆  
 歸吾有是人生行爲之目的也との哲理を確定し得ざりしなり當時は猶ほ辯  
 善主義博愛主義の盛んなりし時ありき然り而して民族競争の結果ハ以上  
 の如し嗚呼此の後此を問題を解釋せずんば當世紀の文明を破壊せんとい  
 ふ聲が轉一轉して此の問題を解釋せよ而も當世紀の文明を保てよとなり  
 轉再轉して此の問題を解釋せよ行て東洋民族の頭上に解釋せよとならん  
 其の結果ハ如何江湖の諸君子請ふ深思せよ請ふ深思せよ

濠洲大陸探檢史



汝が國內の經營朝四暮三の生計に汲々たる間は正に是れ剛膽なる碧眼種族が挺身して暗黒の世界を探検し居るの時と心得よ汝が此書を緝くの間、儘かに萬有歴史の開導者が酷風熱雨の間に自然の迫害と相争ふの時なりと記慮せよ嗚呼五十年前以前殖民の地歩を得たる濠州大陸も今や世界中生産力第一の新世界と化したり諸君此の長足の進歩の數箇の原因より成育したるものなる可しと雖も先づ暗黒の大陸を開きて世人の注意を惹きたるは第一着の功業とす故に濠洲の歴史を知らんと欲せば先づ始めに大陸探検史を一讀せざる可からず

曾てコリーランラッセル二町の中間に二十年間屹立せし濠洲唯一の紀念像と今ハ政府の横なる小園即ちメルボルン城の入口に移されたり是れを濠斯太刺利亞大陸を横切りたる二傑の永年なる記慮にして繁劇なるの商區の中に最も静かに最も嚴かに立ち居れり二箇の肖像ハ彼等が不運に陥りし濠州内地の平原を望みつゝ其寂寞可憐の意を示き者に似たり

一千七百八十八年若孫港に殖民を始めしより以來濠洲の暗大陸を開かんとの念ハ冒險者の心意に躍り一千八百十八年オグスレー氏がマックエーレ河の最大なる沼澤に注入する事を發見せしより濠洲の諸大河ハ必ず大陸中に存在する一大湖に流れ入るものならんとの想像を起さしめたり然れども此の想像ハ遂に世人の心意より消散するに至れり一千八百二十八年スマイト氏のダーリングと稱せる大塩河を發見せり其翌年同氏はアレキザンドリ湖を發見し進んでマランビツチ及びモーレーに達したり氏の記せし處に依れば湖邊の土地ハ悉く豊沃にして農業上最良の地ありと之れに依りてリベリナの野に耕作せし一群の民及び歐州より集まれる農民葡萄栽培者ハ先を争ふて之れに赴きしが彼等ハ遂に南濠斯太刺利亞の殖民を始むるに至れり一千八百三十六年ミチエール氏ハモーレーを経てダイリソング河に下り今の所謂ヴィクトリヤと稱せる地に來れり氏ハ之れを呼でオーストラリアンフェリックスと稱せり蓋し氏が眼に觸れし土



地の光景快活にして痛く氏を喜ばしめ氣候中温にして極めて身体に適したるを意味せしあり此の一報殖民地の一隅に傳はるや若孫港及びヴァンダイメンの旅行家ハ非常の決心を以て直ちに此の新顯地に移住したり爾后地味豊饒金礦發見の二原因より移住者踵を絶たず僅々たる歳月に同地を繁榮富裕ある殖民地と變化しメルボルン城は其の廣大無限の資本を以て世界各國の大都會に誇るに至れり

一千八百五十九年ヴィクトリアが稍殖民の形を爲せに及んで暗大陸探檢の舉起れり此の一舉こそ探檢歴史中も悲惨ある物語を残せる事實にして何人も涙を揮つて探檢者の不幸を慤まざるものなきなり

此の探檢行の首領をロバート、オハラ、パークと云ひ副首領をウィリヤム、ジョン、ウイリスと云へり首領パーク氏は曾て陸軍及び警察の事務に服しウイリス氏は熱心なる天文及び測量の學者なり探檢事業は一萬磅の費用を支出しヴィクトリア政府別に三千磅を以て印度の駱駝を買はしめたり一

千八百六十年九月二十日一行はメルボルン城を出發せりメルボルンの市長は人民と共に歡聲の中に送別の語をなしパーク氏は灰色の馬に乗りつゝ謝辭を述べたり意匠雄壯光景慘憺一行は靜かに遠征の途に上れり一行のダリーリングに着するやパーク氏ハ直ちに書を載して其の親友に寄せたり曰く

一千八百六十年十月四日ダリーリングに於て

拜啓貴下の書狀は今日落手せり當地に着して數日荷物の到着を待ち居りしが唯今到着したれば明日ハ早速クーパーに發足するの豫定なり余ハ愛爾蘭人たるの面目を以て爰に斷言すべし彼幾多の遠征をして失敗せしめたる困迫ハ一も余を零落せしむるとなからん余ハ逆も叶ハぬ迄一歩も退くものには非るなりと

一行ハ四百哩の路程を徒歩にて進み吏員も下卒も共に勞働者の位地を取りて總て荷を負ひ行くなり



御承知のヒ氏の身体堪へざる者の如く見ゆ惟ふに長くは續くまじ氣の毒の事なり

余は相變らず多望の中に在り萬一失敗の位地に陥るとあるも余は斷じて此の希望を捨てず貴下の仰せられたる自棄心と稱するもの若し余が心中に萌ゆしならば余の之を抉り出し可申候

貴下の親友

パーク再拜

一行のダーリング河に着する頃己に四名の逃亡者あり駱駝の監督者ラ  
ンデル氏の其任を辭して一行を去れり前路窈々として行程甚だ難く温帶  
的の風光は既に去りて綠草の代りに荆棘砂礫を殘し清泉の代りに泥濁の  
沼を殘せり元來此の行は濠洲大陸の南端なるメルボルンより直ちに北端  
に到達せんとの目的なればダーリング河に來るやパーク氏は猶豫なくク  
パーク河口に進むべしと命じ其路に上れり然れ共率めたる駱駝の不幸にし  
て飲料の不足なるが爲め其の旅行を永續するの見込なきに至りたればメ

ニンチーンに來れる后駱駝の新任監督者ライト氏を一旦ダーリング河に立  
歸らしめクパーク河に落合ふと定たり一行はライト氏と相分れて十三  
日の后無事クパークに着しけり扱て其后クパークに探檢行の屯所を定め  
ライト氏を待つ中に何れの方角を取りて大陸を横切らんと議起りウイ  
ルス氏の如きハ試檢の爲め北の方九十哩の間一點の水をも發見せずして  
深入せしが駱駝は逃げ去りて捕るに由なく遂に徒歩してクパークに歸れ  
り又別にキング氏の如きハ廣漠無限の小石原に出で望み茫として絶え  
りと報じ來れり是に於てパーク氏は別に一路を擇んで北進すべしと決せ  
り偕て一行の今日やライト氏の來らんか明日や駱駝の聲を聞き得んかと  
只管ダーリングの音信を待て共一ヶ月の後に至りて猶ほ來らざれば一行  
は待ち草臥れ遂にクパーク駐在の一群を二部に分ち一部四名ハライト氏  
を待受けて其處に留まり一部ハ一直線に北進すべしと爲せり而して其目  
指す處は北方海岸のカーペンタリヤ灣是れあり曩きにメルボルン市民の



望を負て出發したる一行は今や四分して一部はランデル氏以下五名の逃走とあり一部ハダーリングに立歸り一部ハクーパーに止まり一部と最後の目的なる暗陸に突き入れり此の人々こそ千辛萬苦を物の數ともせず疾くより已に其の身を公共事業に捧げたるの人々なり此の直突勇進の一行ハバーク、ウイルス、キング、グレーの四名を以て成立し何れもメルホルン城の方に向つて袂別の語を告げ一千八百六十年十二月十六日六頭の駱駝、一頭の馬及び三ヶ月の食料を用意しカーペンタリヤ灣を目指し何處ともなく前人未踏の地に向へり

さて進行の後ハウイルス氏毎夜天象を觀測して旅行の結果を首領バーク氏に報じバーク氏は稀れに其紀行を録したり一行の食物は一日僅かに肉及び麥粉各々一封度宛と定め時々米を用ゆるを許せり此の食物不足の一事は痛く一行の運命に悲しむべき結果を來したり蓋し一行が此の些少の食物を以て大陸を横斷したるは寧ろ通常人類の想像も及ばざる處にして

クーパー以北の廣野中猶ほ探檢者の跡を追ふこと能はざるもの今日に於て慄しとせざるなり

クーパーを出で、より一行ハ泉水に乏しからざる沃野に入れり此の近傍にハ到る處濠州土人に行會へり而して是等の土人ハ文明國民に馴れ易くモーレー及びダーリングの土人に比しては數等高尙の民と知られたり一行ハ是等の沃地を横切りて又も二十方哩の小石原に出でたり此の原野を經て九哩の間濕地を進みたるが頓がて清爽快美なる小川の畔に出でたり一行ハ小流に沿ふて愈北行し遂に茫漠たる豐饒の原野に到着せり此處にはガム樹ボクス樹等繁茂して綠草畫けるが如く鶩鴨の類彼地此地に彷徨せり一行ハ五日間全く此の肥沃の畫幅中を旅行し次で低窪なる砂谷を横切り遂に一條の山脉に向たり一行ハ此の山脉を呼んで直立山脉と稱せり一月二十七日クロンカリー河に達したりしが此の一道の小水ハ后ちにフリンタース大河に接續せる支流なりと知られたり是れより再び沿澤の地



出でしが駱駝は痛く歩行に苦み更に進行せざれば已むを得ず又も一行二部に分つの必要に迫られたり依てパーク氏とウィルス氏は馬に頼りて糧食と荷物を運び自ら海岸に向つて走るべく而してキング氏とグレイ氏とは後に残りて殆らく進行を見合すべしとなせり思ふに一行が此の廣漠荒涼の地に侵入し瘴烟瀟雨の間を冒し既に殖民事業のために其身を捧げながらも一は進み一は迷ふの場合に陥入りたるは其の情察するに餘りあり慙くてパーク、ウィルスの二氏と沿澤沮洳の地に進み入りしが馬足泥濁に没して如何ともするに由なく非常の困難を冒して馬を擲出すに至れり此の困難を犯せる后兩首領は平原に出づるを得たりさて平原を横切りし後は漣波打騒く水面に出でたり之を渉るに泥濁にあらずして底は極めて堅き砂にてありたり斯くて再び平原に出でしが幾多の士人に行會へり茫漠より茫漠に進み難路より難路に進み宛がら夢路を辿るに似たり爰に士人の教ふるが儘丘陵に上りて前方を望めば漂渺たる大海は遠く天碧に

連りて冒險家の意を迎ふる者の如く是れを日夜思ひ焦れしカーペンタリーの灣とて知られたり斯くて見ては須臾も猶豫ならじと直に歩を進めしにマングローブの森林蔚として前面に横はり端なく地平線を遮れり左れを疲れたる馬は一步も進み得ず止むなく二氏の馬を捨て、自ら森林中に飛び入りしが遂に思ひ切て元と來し途に引返へせり蓋し縦横無盡に打交る大木巨樹樾として寸地を餘さず世にも稀れなる厚密の森林を打ち過きんとは如何なる英雄も力叶ぬ事なればなり今や二氏の其使命を全ふしたり海岸を去ると四五哩の地に於て濠洲大陸を横斷し了りたり……

… The Victory was gained

一千八百六十一年二月十二日兩人はキング氏とグレイ氏とに邂逅せり當時降雨頻なりしが爲同地方は全く水に浸されたり依てグレイ氏先づ病に浸され次でバトリック氏亦病に臥せり蓋し氏は自ら殺したる蛇を喰ひしが爲めなり此時一行の糧食は強く減せられ無殘にも二頭の駱駝を殺すの止む



可からざるに至れり三月の廿日に至りてハ六十封度の麥粉は悉く腐敗に  
 属せり残りの馬疋及ひ駱駝は殆んど起つ能くざるに至りたれば再び三頭  
 を屠殺せり四月十三日一行は舊の小石原に廻り出で四氏共に非常の困難  
 に遭逢せしがクーパーに到着する前救助隊に出會するの見込を以て靜か  
 に進み初めたり十六日に至りグレイ氏の釣床に臥え居たるが爲め一日七  
 哩の割を以て進めり間もなくグレイ氏の最後の困迫に陥り不幸にして黃  
 泉の人となりたれば力なく砂漠中に彼が遺骸を埋め后ち二頭の駱駝及び  
 些少の肉を除きたるの外は一切所持の品を捨て、進行するとに決定せり  
 最早クーパーに程近く進みたれば廿日の夜の通宵の旅行をなし非常の奮  
 激を以て進めり翌日クーパーに夜營せば瘁にたる足疲れたる身体を休め  
 得可しと望みつゝ亦もあらん限りの力を以て進行し首尾能くクーパーに  
 到着せるに及んで元の天幕を見んと思ひしが這は如何に白砂散々として  
 亦一物の存するなし！驚きて四邊を見渡せば白く齧りたる大木の上に……

…掘れ……と書けるを發見せり何事の起りしやと直ちに其下を掘ずれハ  
 小包の糧食とフラー氏の手紙を封を込めたる一つの徳利とを得たり一行  
 は其沈める心より之を繕げば嗚呼無殘や待詫びたる救助隊ハ今朝此處を  
 去れるなり其文に曰く

一千八百六十一年四月廿一日クーパーグリーンに於て

拜啓遠征隊中の屯所組は今日マーリングに歸へるため當陣營を出立せ  
 り余はブルウー附近の舊道に近づくためこれより南東に進まんと欲す  
 るなり余と余が朋友二人ハ何れも健全なれば幸に休慮あれ然れどもパ  
 ッマン氏の不幸にして過ぐる十八日以前落馬のため負傷したるより今  
 は病幕に臥せり余等はマーリングよりの音信を待てども未だ何等の報  
 に接する事を得ず一行は六頭の駱駝と十二頭の馬疋を所持し居れば旅  
 行は頗ぶる安全なり頓首

ウエリヤム、フラー再拜



今まや一行の身体に全く精力涸渇の域に瀕し居れば殆んど藥石の功を頼む可き境に在りながら非常の艱難を冒し四ヶ月の間痛絶苦絶の旅行をなしたる曉に至りて此報に接せん事如何なる大胆の遠征家に向つても當さに望の絶え果てたる報道なりしならん

曩きにパーク氏の一行がクーパーパーククリークを發足する前氏の遠征協會に向つて書を認めて曰へり、余はフラーを信ずる事深し糧食は十分の用意を調ひ馬疋及び駱駝も亦甚だ壯健なり而して此地に於て土人より襲撃を受くるの憂も之なし左れば彼等の糧食が殆んど盡くるにあらざるよりは余輩勇進者の一行がクーパーパークに歸へるまで此地に残り止まり得られざるの理由なしと信ぜりとパーク氏がフラー氏を信ずる如斯深く而してフラー氏遂にパーク氏を待つこと能はずして歸へり去りたるに返すくも遺憾の事と謂ふべし前にパーク氏は遅くも三ヶ月間に歸へるの見込を以てク

ーパーを出立せしがフラー氏は四ヶ月と五日の間一行の歸營を待つに至れり此時に方りてフラー氏の配下に許多の患者を生じ而かのみならず土人との葛藤起りダリーリングよりの音信亦漠として聞くに由なかりければ寧ろダリーリングに下りてライト氏の行き先を探らんと決心にて遂にクーパーを出立するに至れり若しパーク氏をして今朝クーパーを出立したるフラー氏の一行がクーパー河畔四五哩の邊りに夜營せしを知らしめしあらんにはパーク氏と喜んで彼等を追跡したりしならん天此人に運を下さず夢にも此事を知らざればフラー氏の一隊より程近く數哩の内に空しく一夜を明せしとは聞くもうたてき次第なり

パーク、ウィルス、キングの三氏の二日の間クーパーに滞留し斯くては果てじと氣を取り直し曩きに前人未踏の地に分け入りたる當時の勇氣に立歸へり互に心を勵まして争ざと斗りに四月廿三日又も新なる旅程に上げれり偕て之れよりパーク氏は絶望山(Mount hopeless)の道に緣りてアブレイドに



進行すべしと決定せり蓋し此道に縁れば百五十哩の内には必ず綿羊ステーションへ到達し得べき預定なり然れどもウイルス氏の舊道を取りてダリングに立戻るべしと主張せり舊道の三百五十哩の遠路なれども沿道悉く水と食物の供給あり廣漠無限の原野に於て東西南北其行く處を知らざる時に方りては遠きに縁らんも寧ろ安全の道を取るこそ萬全の策なるに不幸にしてウイルス氏は首領パーク氏の裁断に伏従せり此事后に至りて一行の悲運とこそ知られけれ名にし負ふ絶望山也かりも悪しき道なるにさてハ天魔の道引きか浮雲のさ迷ふ碧空を目當もなしに進みけり將さに絶望山の道を取らんとするに臨みパーク氏ハ一封の書をクーパーに殘し去れり曰く余はカーペンタリヤ灣に到着するの道を發見せり灣は東徑百四十度に横とれり灣と小石原との中間には殖民に適當なる極めて良好の地積を認め得たり其地より熱帯圏までの乾燥にして而かも砂礫の地なり熱帯圏より灣までは多くの波狀地なれども清泉に富み綠草も亦繁

茂せり余はウイルス氏と共に二月の十二日にカーペンタリヤ灣の海岸に到着したりと蓋し此數行の報告ハ遠くはグイックトリア遠征協會の丹精より出で近くは絶大非凡の探検家を失ひし結果より出でたる者と知る可し一行は今やクーパー河の沿岸に豫りて進行せしが天日玲瓏氣候中温にして前途望を属するに勝へたり斯くて至る處の沿岸多くは牧草の土人に會ひ皮具及びマッチを以て魚類と交換し長途の旅行中初めて生魚を得たる事なれば益身体の快適を覺たり

斯くて六日にして糧食欠乏の爲め一頭の駱駝を屠殺し料食に充てたり此時クーパーの南流に沿ひ道を南方に取りしが此支流は遂に平砂漠々の内に没し去れり一行は既に水流を失ひたれば百方他の水流を搜索せれども滿目悉く白砂にして再び淺間しき砂漠の生活に立歸へりぬ一行は既に詮術竭きたれば三人の二部に分ちパーク及ウイルスの二氏ハ駱駝をキング氏に托し試みに遙か南方に下りて其地理如何を檢したるに土地饒



簡にして處々の壊裂蜿蜒として果つる處を知らず依て兩氏の再び歸路を  
 求めてキング氏に合せり是に於て一行の進退全く谷まり料食は日に減少  
 し衣服特に靴の如き殆んど寸裂し力と頼みたる駱駝も今は物の用に立  
 つ可からざるに至り殆んど力なく見へけるが二氏は今一層精密に水流探  
 検を試みんとて再び搜索の道に上げれり此度は轉じて他の方向を取りた  
 るが行々土人に會ひて土蠻の民には似合はぬ厚遇を受けたりナーツの  
 菓子及び生魚の如きに至る處飽く事を得又土人が供したる一種の飲料の  
 小量を飲用して直ちに微醉を催せる珍奇の振舞ひにも逢へり二人の旅行  
 家は親切なる土人に酬ゆるものとてもなければ唯涙を拭ふて感謝するの  
 外のなかりけり偕てパーク氏は手を分ちてキングの許に立歸へりウイ  
 ルス氏獨り北方に進みたりしが水流は北向するのみにて一も南流を發見  
 し得ざき依りてウイルス氏は亦た非常の失意に陥り空しく歸路に就けり  
 歸路も亦た土人の厚意に逢ひしが二箇の鼠の炙りたるを見し時の喜びの

飛び立つ如く思はれたりと后にキング氏に語れりと云へり土人はウイル  
 ス氏を哀れみ火を起し荷物を解き之を慰勞せり翌日ウイルス氏の情け深  
 き土人の手を緊握して分れを告げたり

三氏會合するに及んで日頃の望は全く絶へ果て逆も綿羊ステーションに  
 到着するの見込なきを發見せり一行は再び一頭の駱駝を屠殺して其の飢  
 を凌ぐに至りたり是に於て商議を凝らし救助隊の來る迄は土人同様の生  
 活をなして水流に漂泊すると一決せり偕て土人同様の生活を爲すに就  
 て何れよりナーツなる植物の種子を得べきか將た如何にして其の種  
 子を粉末にすべきかを知らざるべからず依てパーク氏とキング氏は土人  
 の住所に進行しウイルス氏は残りて駱駝の肉を調理せり同氏の天性快活  
 の人なれば網を張り罠を設けて小鳥と鼠を得んと企てしがカーペンタリ  
 ヤ灣を突き止めたる大事業の後に斯くの如き生活を爲さんとい自ら咎め  
 て許さず遂に自ら失笑するに至れり



斯くてパーク氏とキング氏は土人の住所に追ひ及びしが水草を追ふて轉居する人民の習ひとて彼れ等は既に去て跡をも留めず止むなく再びウィルス氏の許に歸へれり天一行の頭上に悲運を下す何ぞ斯の如く執拗なるや是に於て三人共に黒人の住所を探見せんとして一行悉く其の程に上ばりしが糧食荷物を携ふると至難あれパウイルス氏を殘して再びパーク、キングの兩氏の四日間の食物を具し最後の力を揮つて何處ともたく出で行けり然るに廣漠無限の原野に一群の土人を發見せんとは殆んど望みなきが如く兩氏は空しくウィルス氏に立歸れり最早詮術盡きたれば荷物を捨て、是非共絶望山に達すべしと決せり嗚呼絶望山……已に望の絶へたる名を負へば此事到底達し得べしとも思はれずフリンダースの水深からんフヘザトップの山高からん然れども三氏が艱難に比しては物の數とも覺へざるなり

兩氏の出立せる翌日キング氏は道にてナーツの種子を發見せり氏は痛

く喜んで最早里人の力を要せずして一行の生命を支ふべしと爲し直ちに歸へりてウィルス氏に報じ其の種子を集むるとに着手せしが案外の手數にて僅か斗りを集めん爲めに三人にて七日間を費せりナーツ草は幹葉短くして地に委し頗ぶる苜蓿に似たり苜蓿は三葉なれどもナーツは四葉なり葉の一面銀色を帯びて廣く平かなり實は其若き時は同じく銀色を帯び居れり此のナーツの種子を集むるの通例黒婦人の業にして集めたる后之を洗ひ二箇の石にて粉碎し炙りて一種の菓子となすなり  
一行の水流を尋ねて三日間の旅行を爲せしが辛ふじて草木散在の國に入れり久しき疲れ一度に出で最早艱難と相戦ふの勇氣なきに至れり是に於て一行は又も絶望山に到着するの見込を放棄したり后二日にして水流を發見せしが先づボクス樹下に伏して休息せり食事も已に盡きたれば曩きに集めたるナーツを煮て之を食せり再び水流に沿ふて進みしが土人の住家と思はしきものを發見せり人の去りて已に明家となり居れ共幸にし



てナイツーを粉碎せよき二箇の石を得たり三人の旅行家は打喜び之を碎きたるが面倒なる言と言はん方なし半バ麥粉を加へて之を食せり三人は再び舊所に歸へり乾肉其他の荷物を携へ來り入りてハ土人の明き家に眠むり出でハナイツーを集め能ふ可き限り良好の生活を爲せり  
讀者請君記者ハ今ま此の三人をクーパー河の下流に残し置き姑らくライト氏が如何なる故ありてダールリングより便りせざるやを語らざる可からず

ライト氏のメニンチーンに立歸へるや南濠斯太刺利亞のマクドネルド、スチユアート氏殆んど濠洲大陸を横切る迄に旅行せりとの一報に接し若し首領パーク氏にしてクーパーよりの道に困難を感ぜば西方に向つて走りスチユアート氏の取りたる道に依り北進することを萬全の策ならめと想像しパーク氏に此の報告を與へんため二人の使者と一人の土人を遣はしてパーク氏を追及せしめたり然るに使者ハ道を失して進退谷まりたれば止

むなく土人を還へして其の旨をライト氏に傳へしめたり土人は一葉の紙に救助を求むる旨を認めたる書狀を携へてライト氏に面せり依てライト氏は直ちに救助隊を送りしが二人の使者はメニンチーンより百九十哩斗りの原野に土人と共に生活せるを發見し十二月十九日同地に連れ來れり今やライト氏は無益の勞に時日を空費したれば此上首領の命に従つてダールリングに立ち歸り居らんハ何時クーパーに到着すべしとも思われず駱駝は甚だ休養したりといふハハあらぬ共斷然クーパーに進むべしと決心したり一月廿六日ライト氏とクーパーに向つて出立せり然れども旅行の割合は甚だ遅緩にして三ヶ月半以前パーク氏と手を分ちたるトロウオットに來りし時は既に二月の十二日となれり此の時は恰かも一年中最熱の時にして河畔を除くの外は萬象悉く焚けたるが如し去れば醫師ベックラー氏外三人は痛く壞血病に苦しみたればライト氏は止むを得ずブルより二十哩のクーパーアット河口に天幕を張りて病者を休ましめ直ちに



フルーに進みフルーより猶豫なくクーパーに着せんと企てたり路程は此れより殆んど百哩斗りなり然るに氏は土人の妨害に遇ひ止むを得ず再びクーパーアットに歸へり病者を携へて亦たフルーに着したるは四月の廿一日にして恰かもパーク、ウィルス、キングの三氏がプラー氏の出立したる跡クーパーに着して失望の涙に暮れたるの日なり

爾后數日にして二人の病者は死せり此時土人は愈妨害を企て、止まざれば止むを得ず倉庫を置きて糧食荷物の掠奪を防ぐに至れり加ふるに野鼠群集して畜に物品を損するのみならず一行を襲ふに至れり四月の廿九日に至りてライト氏は大に驚くべき事に遭遇せり、そは別事に非ずクーパーに留まり居るべしと信じたるプラー氏に出遇ひし事之れなりプラー氏は四ヶ月を経過せれ共更に勇進隊の報を得ずと聞き痛く心を悩ませり此時醫師マックラー氏の死去し翌日之を葬れり此に至りてライト氏の殆んど爲す處を知らず始めにはメニンションに歸り進んでクーパーアットに立

ち戻るべしと思ひしが萬一勇進隊の一行がクーパーに歸へり居るやも知れずと信じられたればライト氏とプラー氏と相連れ立ちて唯二人にてクーパーに進行したり五月八日二人はクーパーに着せり此時は勇進隊の三人が恰かも其の下流に土人の生活を爲しつゝ、絶望山の道に縁らんと企て居るの時なりき二人ハクーパーに着し同所の異状なきを見て勇進隊の一行ハ此に歸らざるものとなし必定北方に於て最後の運命に遇ひたるものならんと想像せり嗚呼ライトプラーの兩氏ハ此の時千秋の失策を残したり彼等は健忘者ありしか何ぞ曩きにプラー氏が残したる食物と手紙の事を思ひ起さゞりしか彼等は盲目者なりしか何ぞ曩きに埋めたる土地を掘りて残し置きたる物品の有無を検せざりしか況んやパーク氏が留めたる書状をだに發見し得ず空しく歸らざりし者と断定せしは眞に二氏千秋の失策にして聞くさへも残念至極の次第なり

恁て二氏の不注意なる檢分を了はり詮方あしと諦めて直にクーパーアット



トに立ち歸り全隊を率ゐてダールリング河に進行したり一隊のトロウオツトに來る迄には幾多の不幸に遇へりパットン氏の如きハクーパー發足以來不健康の様子ありしが遂に黄泉の客となれりライト氏の一族ハ六月十八日ダールリングに着し直ちに急使を以て勇進隊救助組の發足を遠征協會に申も出でたり

さてホトク氏の一族ハ鎮を離れてより已に一箇月餘を經過じたり依て一行と萬一救助隊が鎮に向つて來りしやも知るべからずとなし疊きにハクク氏が手紙を埋めたる場處に立歸へりカーペンタリヤ灣に行きたる路程表をも埋めん爲めにウイルス氏は自ら挺身して鎮に歸へる可しと言ひ出だせり憶ふにウイルス氏が此の舉を主張したる所以のものハ一は勇進隊の運命盡きて萬一其の骸骨を砂漠に埋むるとあるも一隊が爲し遂げたる大業ハ必らず世に示して其の芳名を後に留めんとの慮りより出で一ハ萬一にも救助隊をして一行が何れに在るやを知らしむるとあらんを慮りて

斯くハ決心したるものと見たりウイルス氏は八日を期して同地に着するの豫定にて三封度の麥粉と四封度のナイツトと一封度の乾肉とを携帯して出立したり

ウイルス氏が留守中ハーツキングの兩氏は土人と一方ならぬ葛藤を生じ財産を掠めらるゝに至りたれば已むを得ず銃を放ちて彼等を懲らしむるに至れり後ち過失よりして陣營に火を失し一物も餘さず悉く燒盡し僅かに小銃其他二三の物品を救ひ得たるのみなりき

さて剛膽なるウイルス氏ハ些少の食物を以て如何にして旅行を企てしか是殆んど驚くべき次第なり氏が書き残したる日記に依に出立の翌日ハ不快を感じ二十九日に至りて殆んど飢餓に禁へさりしが鳥の食ひ残したる魚肉を喰ひ鎮より十一哩を隔てたるミヤミヤといふ處に一夜を明かせり三十日にハクーパーに着せしが幾群の土民此處に居を占むるのみにて亦た何等の痕跡をも止めず此日はライトブラーの二氏が鎮を訪ふてより二



十二日を経過せりウィルス氏の旅行記と勇進隊の哀れなる有様を記したる一封の書を埋め翌日此處を出立せり此時氏の身体を甚だしく衰弱して亦た昔日の人にあらず其日は漸く森を尋ねて隠れ場を求め翌日の土民に逢ふて其の飢を凌ぐべしと希望せり翌日土民の村落に行きしが既に引き拂ひたる後にて已むなく彼等が食ひ残したる魚の骨にて僅かに朝食を了したり此の日薄暮に及んで土人に逢ひ非常の厚遇に預かりナイツールと魚肉は共に喰ふべからざるほど供せられたり氏の歸路を續けて六月六日パークキングの兩氏に會せり

是れより二十四日に至る迄三氏のナイツールの原野に止まり之を集め之を煮る事に従事せしが少量の乾肉の外に一物も白人の身体を養ふに足らざるを知れりウィルス氏は痛く衰弱して三十封度の袋を荷ふと能はざるに至れり二十四日に至りて氏は殆んど膝行に苦しむに至りたり氏乃ち其の日記帳に記して曰く此の困難の場合に何か一の機會ありとせば唯土人の

救助を得るの外なしとウィルス氏の衰弱は全く食物の故のみに非ず衣服の足らざるとも亦た一原因なりしあるべし二枚のシャツは既に袖を失し一着の股引は寸裂して僅かに其の形を具ふる迄なりコートは既に捨て、唯だチヨッキのみ残り去れば夜に至りては逆も寒氣に堪ゆる能はず一且衰弱し始めれば其の寒氣の爲めに恐るべき攻撃を受くるなり

此時三氏の心事を果して如何なる者なりしや之を想像せんと頗ぶる難し十ヶ月以前多望を負ふて出立せし遠征の荒涼なる漂泊の中に終りを告げ今は恰かも其極度に達し速かに救助隊に遇に非るより到底漠地の鬼と化するを免れざるに至れり

此に至りて三人再び協議を遂げ居ながら其の餓死を待たんよりの土人を尋ねて能ふ限り其の生を持続すべしと爲せり依てウィルス氏は後に残りパークキングの二氏の里人を尋ねる事と決定し用意を爲せしが二氏の其將さに死なんとするウィルス氏を見捨つるに忍びず幾度となく躊躇した



リウィルス氏の大に其の出立を促がし之れ今回一髪の機會なりと繰り反へせり依て二氏ハウィルス氏の寢床の傍に薪木とナーツトを置き最も悲しげに出でされり

ウィルス氏獨り残りて衰弱愈々増せり氏ハ臨終の前五日に記して曰く余ハ最早最後の衰弱に陥れり好しナーツトと魚肉とは如何程之を得能ふとするも其れのみにて吾々の身体を保養し得るや否やといふに至りてハ疑ハしき事共なり余が雙腕雙脚は僅かに骨と皮とを存するのみにて自ら身動きするさへも困難を感じり慥かに脂肪分と糖分との欠乏よりして余ハ此の衰弱に陥りたり余ハ食物の不良を言ふに非ず此の大陸の空氣ハ殊に脂肪と糖分とを要すと見たりと吁其身非常の苦痛に在りながら猶ほ後人を思ふて記する處科學上の問題に屬せり氏が高尚勇膽の氣象察するに勝へたり

後幾日も亦く死の手ハ氏が頭上に加へれり嗚呼今や救助隊來着の望の中

にありながら苦楚悲涼なる生活の中に朋友の聲を聞く事なく博愛の神に見捨てられ猶ほ若年の身を以て長逝す眞に哀むに堪へたり時に年二十七却説パーク氏とキング氏ハ出立の當日既に其力盡きたるを感じり第二日に至りパーク氏ハ背部と兩足の疼痛を起し第三日には二哩を歩行したる上最早一步も進む能さざるに至れり此時キング氏ハ猶ほ歩行の力ありパーク氏は先ちて進みしがパーク氏は遂に倒れ俯して起つ能はざるに至れり氏は是に至りて荷物を持つ力あしと云ひ所持の物品悉く捨て、唯銃を持ちたりキング氏も亦た之れに倣へりパーク氏は最早進行の勇氣なけれバ夜營の用意すべしと云へり依てキング氏はナーツトを集め蹊ち殺したる鳥と相和して晚餐を取れり此時パーク氏の容体は愈々重くなり自ら數時を期して絶命に至るべしと云ひ所持の時計と日記帳と遺言書とをキング氏に與へ且つ曰く余が充分死し終る迄願くハ子ハ爰に留まり賜はらずや誰れか一人傍に在りと知るハ死せる時に於て力あるものなり若し余



が死せしならば余の右手に鐵砲を持たしめ余が横はり居る儘に埋ます動かさず余の遺骸を残し置き玉はずや之れ余が臨終の願ありと其夜は辛ふゑて一二語を話し翌日の無言なりしが午前八時遂に溢然永眠不起の客となれり時に年四十キング氏の始らくは死骸に取りすがり泣き明かせしが思ひ切りて何處ともまゝく迷ひ出でたり後ち二日にして土人の住みし跡に來りナーツを食して二日の間爰に留まり二羽の鳥を打ち殺してウイルス氏の許に立歸へりしが思ひきやウイルス氏も亦墓なく不起の人となり居らんとは左れば氏の死骸を瞻もり身も世もあらぬ思ひをなしたりかくて之れよりキング氏の辛ふじて土人を見出し隨所彼等が行く處に行き救助隊の來るを待てり後ち土民に報せられて救助隊の來るを知り遂に生き存へて故郷に歸るの機會を得たり氏が土民と生を共にせしに殆んど二ヶ月に餘れり

扱て話頭を轉じて救助隊に移るべしライト氏はダリーリングに着するや否

や急使を派して救助隊の派遣を請へり是に於て濠洲一般大に激昂し吾もと救助隊を編制するに至れりウイクトリヤのロイヤルソサイチーのホイット氏を長として小隊を組織せしめ七月初旬クーパー河岸を探檢の爲めメルボルンを出立せしめたり

八月十四日南濠斯太刺利亞政府はマツキンレー氏をしてトルレン湖に緣りてクーパーに到着すべしと命じたり之れと同時に二隊の遠征組現はれたり共にカーペンタリヤ灣の周圍に到着するの見込にて一はランドスナロー氏の下に率ゐられ一はウォーカー氏の下に率ゐられたり然るに獨りホイット氏のみ大探檢家の運命に就て事實の報導を與ふるを得たり扱てホイット氏の一行はプラー氏を連れてクーパーに進みしが此の處に如何に不運の處なりけん曩きにウイルス氏が残したる書狀は遂に發見するとを得ず別に差したる事實を得るともなかりしが十月十五日キング氏を發見したりキング氏は二ヶ月餘黒人の中に住居し容貌ハ唯だ影を残す斗り



に瘦せ衰ひ殆んど開化せる人類なるや野蠻人なるやを辨別し難き迄に變化せしが唯だ氏が着せる衣服の跡形に由つて之れを大遠征家の果てなるべしと知られたり救助隊の氏を發見したり氏は救へれたり氏が蘇生の喜び想像するに堪へたり二日の間ホイット氏の同所に止まりキングンと共にウイルス氏の遺骸を葬らん爲め舊所に出立せり遺骸の既に散亂して哀れなる有様なりしが彼此相集めて其横たりし場處を定め一同涙を揮つて葬儀を擧げたり一行の砂中に遺骸を埋め灌木を植へて墓表とあし深斯太刺利亞の英雄ダブリン、セウイルス氏の墓と記したりホイット氏は猶ほ進みてパーク氏の遺骸を葬らん爲め進行せしがクーパーより數哩にして大なるボクス樹の下に之を發見せり手と足と胴とは別々に散亂せり鐵砲は彈丸を籠めたる儘其の傍らに横へり而して以上の遺骸は半ば土に埋没せり蓋し親切なる土人が形斗りの埋葬を爲せしなるべし彼等は始めにウイルス氏の死を見て痛く悲しみキングン氏よりパーク氏の死を聞知して一

同に哭泣したる程なりさてホイット氏はパーク氏の遺骸を集めユニオンジャックの旗を以て之を包み懇篤なる葬儀を終へ木標を立て、氏の名及び其の偉業に關せる短文を認めたり斯くて二雄の葬儀を終はりたれり救助隊の土人の親切黙止し難しとて其の探檢に出掛けたり  
ホイット氏の土人に向つて報酬を爲すべき旨を知らしめ先づ斧ナイフ鏡などを與へしが彼等の喜び一方ならず殊に鏡に對して彼等の驚きたるを失笑を抑ゆる能はざりしと云へり砂糖を與へて之を食せしめしに彼等は恰かも毒を嘗むるが如く僅かに眞似をなして止みしが後に其美味を知て感賞措かざりしといふ翌午前十時ホイット氏は土人を集めて廣大なる贈物をなせり今やホイット氏は首尾能く其の使命を全ふしたれば彼等のキングンを携へて歸郷の途に就けり此時に至りてキングンの喜びの形容の外に出でたりと云ふ一行がメルボルンに着するに及び悲しき物語は全濠洲に行き渡りて天地爲めに暗慘の色を帯びたるもの、如しヴィクトリア



の住民の凡べて悲しみに堪へず兩雄の遺骸を原野に捨て置くべからずと爲し再びホイット氏を遣はして之をメルボルンに取り寄せしめたり氏は一千八百六十三年の末に其遺骸を携へて着府せり  
 一千八百六十三年一月廿一日メルボルンに於て兩英雄の葬儀を営めり時に重なる店の凡べて閉鎖し公共の事務は悉く止めて禮意を表せり兩英雄の遺骸はロイヤル協會館に十四日間留め置きしが今ハ壯大なる棺に收めてサー、チャールレス、ハサムの肖像の傍らに送られたり先導者のメルボルンの紳士にして見送りの行列の殆んど半哩以上に及びり三發の葬砲と共に式は了れり人の散せり兩雄の死骸ハ靜かに寒冷なる墳墓の中に眠れり  
 后ちゲイクトリヤ政府ハ義捐金を募集し兩雄の遺族に與へキング氏に終身の養老金を與へ靜かに其の餘年を送らしめたり  
 二年后兩雄の肖像紀念碑は濠洲第一等の技術家チャールレス、サンマー氏に依て起されたり其の材料は凡べて濠洲の特産物を集め銅像に用ゐたる銅

はアデレードより取り寄せ之れに和したる錫ハピーチウオルスより取り寄せ臺に用ゐたる花崗石ハハーコートより取り寄せたり高ハ一丈五尺に及び下には縦一丈一尺横七尺の臺を設けたりウイルス氏の肖像は靜座しパーク氏の肖像ハ右手を朋友の右肩に置き直立して左方を望めりウイルス氏ハ膝に一卷の書を取り右手にペンチルを持ち方さに首領の云ふ所を認め居るに似たり墓側には青銅を以て四條に其由來を示したる淡書を施せり一ハ遠征隊がロイヤル公園より出立せるもの二はカーペンタリヤ灣よりパーク、ウイルス、キングの三氏がクーパーに歸りたるもの三は土人がパーク氏の遺骸を抱きて哭泣せるもの四はホイット氏がキング氏を發見したるもの之れなり  
 一千八百六十五年四月二十一日此の肖像の建碑式を行へりゲイクトリヤの大守サー、チャールレス、ダリリング氏ハ無数の人民と共に式場に臨み左の演説を爲せり曰く



淑女紳士及びウイクトリヤの住民諸君余は今ま國家の名譽を置くべき豪傑の悲運に就て諸君に語るを要せず唯吾々が今日に於て爲すべき事は能ふべき限り其の名譽を完たからしむるに在り而して今日諸君が各方より集會し余を以て其の式に預かるの榮を與へたるハ蓋し吾々が正さに盡すべき義務に屬すと信ぜり忘れもせじ一千八百六十年十月二十日今日パーク、ウイルスの遠征隊と呼ばれ居る一隊は濠洲大陸の南北を横斷するの重任を帯びて殖民地人民の祝聲の中に立せり(喝采)一隊の出立せしより日月早々一年を経たる後戰勝ハ得られたるならんが其の困難の極度最後の域に逼り居りはせずやとの疑惑は各方に傳れり爾后其の疑の全く晴れて事實の世に報導せられたる時は一般國民の悲と化成するに至れり彼等が死に逼りたる状態は實に世人の眼に畫かれて長く消へ去らず彼の冷淡にして哲學者的なる天文家ウイルス氏が其父に送りたる最後の手紙に左の如く述べたり曰く此の手紙は御身が最後に

落手すべき手紙ならん吾等は精神頗ぶる健康なれ共殆んど餓死の域に瀕せり食物の多量なれども滋養分不足のため今四五日の露命を繋ぐとの覺束なしと手紙を書したる后二日氏の最後の遺言を旅行記中に認めたり而して其言は食物の滋養分に關せる科學上の報告なり又たパーク氏が最後の語の如きと余よりして之を見るに實に慘憺を極めたりといふべし氏終りに臨みて腦中閃々として幼時陸軍の生育を思ひ起しボクス樹下に倒れたる身ハ總身血に塗れて倒れたる勇士の如く信じ余の銃を余の手に置き余をして此の儘に永く原野の骨たらしめよと言ひしならん斯くて公共の悲痛國民の葬儀は來れり去れば余ハ此の紀念碑を以てウイクトリヤの住民が夢にも己れが誇りの爲め又たは榮華の精神より建設したるものとの信ぜず現今の世代及び未來の世代に於て尤も高尚なる名譽を負ふ所の事業の成功を表證せん爲めの意匠より出でたるものなりと信ぜり(喝采)



眸を翻して、五十年前の濠洲を望めば、山野漠々として、カンガローの聲悲しく、人跡長なへに絶へて、ユーカリ、パタスの森深し、然るに今や、シドニーのシヨイチ町の悉く花崗石を以て之を築き、メルボルンのコーリン町の十六階の建築費を並べて、一直線に併行せり、蓋し斯の如き長足の進歩は歴史ありてより以來未曾有の事とす、是れ別に怪魔の力を藉り來りて成したる事業にあらず、其の主要の原因は實に濠洲金山の發見に由來せり、讀者左の金山史を一讀せば、日本今日の情態に照して大に益する所あらん。

一千八百三十九年ストルゼリツキ伯はニューサウスウエールズ遠征の報道中に左の事實を發表せり、曰く伯は同地に於て一種の帶金色硫化鐵を發見せしが之を以て金鐵含有の証とはなすべきも未だ以て此の鐵塊より純金を精製するの價值あるものとするに足らずと伯の時の政廳に申し出でしが政吏は此事實を公にせしならば千百の殖民移住者及び犯罪移住者

の心意を攪亂するとあらんを恐れて之を穩密にせんとを望みたれば伯は黙して世に公にせざりき、后二年にして有名なる地質學者クラーク氏は濠洲殖民地積擇扶の爲め各地を探檢せしがマックエーレー山の麓に於て金鐵を發見せり、氏は直に其の鐵塊を朋友及政廳に示し且つ英國の學術家に其の發見の事實を報道せり、氏は次で探檢に怠らざりしが數次其發見を重ね一千八百四十二年より同四十七年に至るの間度々金源の存在を宣言したる書を公にしたり、金鐵の存在ハ斯くまでに明白に赴きたれども何人も敢て金塊の採掘に依りて利益を得んと試みたるものはあかりき、蓋し時の政廳は此時に至るまで猶ほ移住民の激昂し易き感情を攪亂せんを怕れたるが爲めなり。

さてストルゼリツキ伯が英蘭に歸へるや伯ハ已れが試験したる鐵塊及びクラーク氏が發見したる金塊を携へ濠洲の地質が金鐵含有の性ある旨を世に公にせしに忽ちにしてサー、ロドリック、マーチソンの注意を惹けり、君



はロイヤル地學協會に於て此の事を演述し君が曾て千八百四十一年より同四十三年迄の間に跋渉したるウラル山と濠洲山脈系の類似とを比較して其金鑛含有地たるべき證左を列擧したり君は一千八百四十六年に及び再び其説を公にしクロンウオールの錫鑛探掘家に説きしかば探掘家の錫鑛を棄て、ニュー、サウス、ウエールズに移住し金鑛の探掘に着手すべしと決心するに至れり

爾後別に又他の金鑛發見の報道世に現はれしが何人もそれか爲めに安全なる職業を捨て、一途に此事に従ふの勇氣はなかりき何となれば金鑛は所在到る處に含有するものに非ずして之れが探索家の百人なるも利益を受くるものは僅に發見家一人に過ぎざればなり爰に牧羊者マクレツゴア氏は世上の報道を聞きて激昂措く能はずメル車に駕して處々を横行したり此の事世上に噂するに至りたれば飾師の中にて氏に奇貨を與へ其の金塊含有の地所を習得せんと申し出でたるものありしに氏は堅く之を

拒みしかば世上の評判は再び金鑛絶無の事となれり然るに氏が故なく多額の富を得たりとの事世に知られてより再び世の激昂を來すに至れり斯くて幾多の金鑛探索者は其の實行を試みしが失望の餘り宣言して言へり何人も金鑛の事を世に流布するものは安全なる殖民政策の妨害者なりと加之心あるものは轉た、殖民地の人氣を擾亂せしむるを欲せず最と冷談に之を看過し故さら其の虚報なる所以を明言せり且つや何者か濠洲發掘の金塊見本と稱するもの、其實時計師飾師が母國の金を使用しながら漫に虚言を構へたるものなりといふに至れり然れども年月を経るに従ひ學術家と濠洲山脈系統の理論より慥かに金鑛含有の事實を確信するに至りたればニュー、サウス、ウエールズの行政廳は殊に英國政府に請ふて其の道に明かある學術家の派遣を請求するに至れり英國政府は其請求を許容して博學多識なるサッチャーリー氏を遣はすに決し同氏は一千八百五十年九月英國を出帆せり



此時に至りて濠洲の農業家及び土地所有家ハ稍動くの色ありそが中に唯一人バサーストの邊りに非常の勤勉と堪忍とを以て金鑛開掘に従事したるもの起りたり一千八百四十四年より同四十八年の間に濠洲の各處大洪水あり牧羊牧牛家屋耕地委く荒廢に屬す各殖民地の人民ハ凡て其生活を變ぜざる能はざるに至れりエドワード、ハンモント、ハーグレイブス氏ハ即ち此の危難に逢ふて所有の利益を蕩盡したるの一人なりとす氏は此の時に至りて詮術盡きたれば恰かも同時に亞米利加之加里福尼亞に金鑛を發見したるの報を得たるを幸としサクラメントに行て金の開掘に従事し元の資産を取り返さんと決心し同地に向つて出發するに至れり偕て氏は同地に行て具さに艱難を閱歷し二ケ年の間果敢なき年月を經過せしが氏は遂に破れ果てたる域に沈めり衣服と欠乏して嚴寒を凌ぐに由るく降雨は頻りにして天幕ハ壞裂し森林獸足を空ふして食物に乏しく一群の勞働者ハ止を得ず其手を分つに至れり是に於てかハーグレイブス氏は重き精神と輕き財囊とを以て桑港へ趣かんとするに至れり曩きに氏が血液を温かたる金山開掘の望ハ今は全く鑛山生活の艱難に依て其の血液を凍らしむるに至れり

氏が桑港の波止場に下りつゝ……多分前の安全なる生活を思ひ起し今の困難ある生活に比較しつゝある間にシーラスの地が深く窪みたるを見て不圖其の心を動かせり氏深く思惟したりしに此地の形狀が甚だ其の故郷即ちニュー・サウス・ウェールズの近傍に髣髴し居るものなるを思ひ起せり是に於てか氏が二ケ年の苦楚艱難ハ氏に大なる實行上の智識を與へ其の腦力其の視察力を一層確むるに至れり氏は精密に金鑛近傍の地所を視察し土壤及岩石に至る迄痛く濠洲の碧山ブライム・マウンテンに似たるを發見し始めてニュー・サウス・ウェールズに於て慥かに金鑛の地所あるを信するに至れり氏は是を以て足れりとせず再びサクラメントに立戻り其の近傍を檢視し價値ある礦物を得たり此時故郷に於ける金山の事始終氏が眼中に彷彿し



居りしが世上の風説に據れば碧山の近傍に於て金礦を發見したりとの事なり依て氏の閃々たる想像に驅られ直に故郷に立歸りてバサー・スト近傍の丘山に於て益大利を攫取すべしと決心したり

然るに氏が朋友の何れも濠州の地質學者の隈なく各處を巡視し居るべく而して若し開掘すべき金山あらば必ず其事に従ひ居るならんに其の今日迄開掘に着手せざる所以のもの甚だ望みなきものたるを証するに足るべく此事に向つて畢生の方向を報るの不可なりと爲して再の議を容れず氏は是に至るも猶ほ前議を執て動かす地質學者の探檢の單に科學上の講究に過ぎずして實際開掘に着手せんとするに他の實行上の智識を要すべく如何にして金を掘るべきか如何にして砂金を精製すべきかハ別途の問題に屬すと主張し遂に朋友の止むるをも聞入れず唯一人ニコル・サウスウエールズに急ぎけり

氏ハ一千八百五十一年一月シドニーに着し直に舊友を集めて其の經驗を

説明し些少の金圓を借り入れて開掘に着手すべしと依頼せしに舊友ハ氏を目して誇大ある想像家となし冷淡に其請を拒めり氏ハ數度資金借入れの事を試みしが一も成功せざりければ自ら再び艱難を嘗め盡し獨力を以て地學者が指定したる處に行くべしと決心せり

二月早々氏は其の寂涼ある旅行に上れり讀者記憶せよ曩きにバサー・ストの邊りに唯一人金鑛開掘の事ハ着手したりと云ふは即ちハーグレイブス氏にして氏の今其の舊路を通ふり昔の光景を見て斷腸の思を爲したりと云ふ氏がエルドラドに近く迄と一歩一歩其の望を高め地形地質一として金鑛含有の証を示さざるはなし

二月十二日容体物凄しき騎者一人碧山の麓なる宿屋に着せりハーグレイブス氏ハ女主人に向つて來用を告げ幼兒を借りて各處の水流に案内を頼みしかば女主人と其の希望の雄大なるを感賞し直に之を許せり翌日氏の幼兒を伴ひ幾多の森林を超へてサンマーヒルの水流に來れり此處こそ氏



が目的の場處にして氏が從來の想像は逐一事實となりて目前に現はれた  
 リ氏は多年の苦辛其の功ありしを喜び先づ水畔に横はりて安悦せり此日  
 氏は五皿に滿つべき土壤を取りしが中五分の四は總て金素を含有せり此  
 日は一千八百五十一年二月十二日にして正に濠洲金山發見の紀念日とす  
 氏は之より二ヶ月の間毎日試験に従事し遂に土壤の表面より之を証する  
 に足るべき箇所をさへ發見するに至れり氏ハ其試験の満足なる結果に雀  
 躍し已れの名を世上に公にし且つ相當の報酬を受くるの見込を以てシド  
 ニーに歸れり

ニユー、サウス、ウェールズ、の政廳は此の發見を聞て且ハ驚き且は疑ひたり  
 蓋し從來虚報を傳へたる金山發見者の事實が痛く其の信用を害したると  
 幾多の地質學者が數度其の地を巡視しながら今日迄事實の世上に發表せ  
 ざりしとに依れるなり

然れども氏は保守的政廳の疑惑に屈すべき人に非ず氏ハ殖民事務秘書官

に縁て遂に政廳より報酬を受くべき保証を得て偕て地質學者の前に其の  
 秘訣を顯し且つ人を得て發見の箇處に伴はんとを約せり氏はハサー、ス  
 トに於て此事に關し公開の講義をなし若し貨本家にして其の事業の爲め  
 に合同するとあらば自ら政府に請ふて其の特許を得べしと云へり是に於  
 てハサー、ストの近傍ハ非常の激昂を以て充ち數多の牧者ハ青々たる綠  
 草の牧場を捨て、直に黄色なす砂土に突入せんとするに至れり是より先  
 き加利福尼亞に金山發見の報起りしより幾多の牧者は其の職を捨て、同  
 處に赴きしが爲め牛羊の持主は痛く損失を蒙むりしが今ま此の一報の起  
 るや牧畜社會の革命ハ再び踵を接するに至れり  
 ニユー、サウス、ウェールズ、の政廳は地質學者を遣はして實地を檢分せしめ  
 んとせらるに當り地質學者ハ堅くハーグレイブス氏の説を信用し氏を伴ひ  
 て同處に赴かば彼れが加利福尼亞に於て得たる實行上の智識ハ大に新開  
 掘を利するとあらんと助言したり



五月の下旬ハーグレイブス氏の一千の人夫を擇んで同處に赴くの計畫を終はりたれば此の報道と殖民地の各偶に傳はり殊にシドニーより幾多の群民日々同所に赴くに至れりニュー、サウス、ウエールズの政廳ハ此狂暴なる經濟上の動亂を靜めんと企てたれども總て無効に屬したれば止を得ず人別に金山採掘の免計狀を與へ免許狀なきものは騎馬巡查を附して之を取締るに至れり思ふに經濟社會の革命といは是等を謂ふならん

ハーグレイブス氏ハ先づ攝理役に指定せられ事務監督及金原擴張の任を受けたり氏は給料の外に直に發見の功としてニュー、サウス、ウエールズ政廳より五百磅を得たりしがシドニーの市民とメルボルンの市民とは各一萬五千磅の金を氏に報ひたりハーグレイブス氏は一千八百五十三年英國女皇陛下に謁見の榮を得大名全母國に轟き渡れり蓋し氏が智巧堪忍計畫ハ正に濠洲なる幼稚國をして僅々の年月に世界各國中一個の勢力と化成せしめたるものなり

偕て六月に至りハーグレイブス氏の金鑛場ハ大洪水のため荒らされシドニーより同處に走りたる幾多の牧羊者は空しくシドニーに歸るに至れり然るに七月の初旬又たも他の金塊發見者現はれたり右ハ濠洲の主人に係リチユーロン河の邊りに於て發見したるなり土人ハドクトル、カル氏の從僕にして牧羊に従事せしが常に斧を以て彼地此地を開掘し遂に一種の岩塊を掘り金色煌々たるものを得たり主人カル地と土人とは直に粗末なる器具を以て之を掘りしに二百ウエイトの大塊を得百〇六封度の純金を得たり依りて之を賣却せしに金貨四千百六十磅の多額を收得せり

此の報世上に傳播するや又も幾多の群民ハチユーロンに走り同所の地所と俄然非常の高價を呈し附近の土地も亦隨つて驚く可き高價に進みしかば土地所有者ハ金鑛採掘者が壟斷の利益を怕れてチユーロンの發見者と契約を結ぶに至れり

斯の如くニュー、サウス、ウエールズの動亂せる間にガイトリヤに於ても



亦た金山發見の事起り一層良好の金を得べしとのと世上に傳りたれば又もや群民のマツクエーレーの支流に屯せし原鑛を捨て、同地に赴くに至れり

新南威斯に於ける金山の事世上に傳はるやワイトリヤ殖民地にも亦た金山發見の希望起りフィリップ港に一の組合を組織して金鑛發見の事に着手せしめしがチューロン近傍の報一たびワイトリヤに至るや組合の中に同地に逃走するもの起り續てワイトリヤの住民は又た同地に轉せんと試むるもの起るに至りたり此時ワイトリヤは猶ほ新南威斯政廳の下に属せしが同地の人民の舉りて獨立の政廳を打立てん事を熱望し其問題の當さに實行せらる可きの期に際せり左れば志あるものは何れも之を憂へざるはあく殊に新南威斯の市民は金鑛の發見に誇りてワイトリヤを輕蔑するの傾きありたれば羨望と憤激とに堪へ難く遂にワイトリヤの市長と市民中の重なる人々を集めて金鑛發見に關する協議を遂げ

金鑛發見協會なるものを組織しワイトリヤ所在の地に於て金鑛を發見する者には二百ギニー(一ギルハ凡そ五圓)を與ふべしと懸賞したり此の會合の開かれし後一ヶ月を経てシーロングの新聞紙に重要なる報告を記載せり曰くゼームス、エスモンドなる旅行者は七月一日クランネスに於て金山を發見したりと蓋しエスモンド氏の懸賞の事を知悉せざりしなり一千八百四十八年の頃エスモンド氏はバニヤングとホースハムの間にて車馬の雇人たりしが若年の身を以て寂涼なる客送の日を消さんとを屑とせず加里福尼亞金鑛の事を聞き從來の職業を捨て、同地に赴きたり偕て氏は同地に於て姑らく採掘の業を取りしが忽ちにして困弊に陥れり氏の思ふ様ありとて又もや故郷に歸りたり蓋し舊職に満足して一攫萬金の望と失望落膽の悲とを併せて棄つるの意なりしあり氏はハーグレイブス氏と同船してシドニーに着せり右は全く偶然の機會にしてエスモンド氏とハーグレイブス氏と航海上語を交へしとあるや否やは疑ふべきとに屬



セリ氏の二ヶ月間シドニーに滞留し後シドニーより風帆船に便乗し三週間の航海日数を費してメルボルンに來れり偕て氏に直にバニヤングに立ち戻りしに舊職への他の占領する處となり居たれば曾て日々経過せしビレニの邊りに小屋を構へ大木を伐り倒して之を輸出し全く森林の生活に入れり氏は其朋友一人と共に森林に働きたり此時日耳曼の地質學者にてフルトンとさへありて轉たゞ寂寞を感きたり此時日耳曼の地質學者にてフルトンなる人此の地方を探索し一箇の金塊を近傍の地に得たり依て地質學者はハエスモンド氏に之を示し鑛山上實行の智識あるものハビレニの近傍に於て貴重なる金鑛を發見し得べきを以てセリエスモンド氏に再度一攫萬金の富を得んとの希望を拘き直に森林の生活を捨て鋤と鉄皿とを携へて其の朋友と共に一千八百五十一年七月一日金鑛の探掘に出發せり氏はロッドンの傍に流るゝ細流の岸邊に於て一塊の鑛物を掘り得たり氏の此の鑛物を携へてシーロンクに來り試金家の試験を請求せしに試金家

ハ此の鑛物を認めて稀有なる金塊なりとなし熱心に何處より之を得たるかを質問せり

氏と始めに金塊を得たる箇處を秘し先づ之れに關する器具及び諸般の條約を取り結ぶを急げり氏のシーロンクを出發する前に三人の同勢を得其の探掘の箇處を試金家に打渡したり蓋し試金家は其近傍に於てチユーロン金鑛よりも一層良好なる金鑛を發見し得るの見込あるを以てチユーロンに走らんとする労働者を此地に引き留むるの策を案出せしが爲めなり此時同時にメルボルンより數哩ヤルヲ河の支流アンダーソン河畔に於て金砂を發見したるものあり此の發見の主としてメルボルンよりチユーロンに移住せんと企だてたる大潮を支ふるを得たりエスモンド氏の金原には既に三十人の人を得て八月の末にハ好結果を收めり加ふるに河畔の金砂は非常の望を負ふて世上に顯はれたればニューサウスウェールズに移住したる労働者ハ先を争ふて歸れり偕てエスモンド氏の九箇の組に長と



してクラネスの地に勞働せしが氏の遂に一千磅の報酬を受け併せて最初自ら發見したる金原の近傍一帯の地を所有するに至れり

斯りければゲットリヤの人氣は亦た金礦發見の事に狂奔するに至れり爰にバニャングに住める人にてトーマス、ビスコックなるもの近傍の地を採檢して直に一塊の礦物を得たりしがシーロングの試金官は此の礦物を以てクラネスの礦物より一層良好のものと認めたり氏がシーロングに着したるハ八月十日ありしが此一報世間に傳へるやシーロングの住民は又も同地に走り始めたり然るに此時バニャングの地方ハ大水にて處々の泥濁足を没し氣候嚴寒殆んど堪ふべからず依て二週間の后四十人の探檢者の止むを得ずクラネスに移るに至れり此の探掘者の中にダンロップと稱するものありクラネスに到着するにハ四磅の費用を要せし聞き貧困の身なれば寧ろバニャングの近傍に於て今一度金礦の探索を爲すべしと決心し其の翌日ダンロップは影を隠したりしが晩景歸宿してマツチ

箱の中に半オンス斗りの金を盛りたるを示し今日小丘の外五哩斗りの地に於て之を得たりと云へり彼れが朋友は何れも笑つて之を信ぜざりしが礦夫ハ翌日再び影を隠し數日を経れ共歸り來らず依て其の友なるレガンハ一人の友を將てダンロップの探索に出立せりホテルにては三人の影を失したるを訝り事實一館に知れ渡るや別に四人のもの相携へてホテルを逃走し三人の跡を尋ねて幸運に有附くべしと出行けり然るに幾許もなくダンロップが發見したる地所の各人の知る處となりたれば忽ち幾群の土人を放逐し直に開堀に着手するに至れり

其后程なく有名なるゴールデン、ポイントの金礦世に顯はれたり右ハキャピナーの一族が竊かに金塊を得て其財囊を滿たしたるとより發見せられたるなり八月の下旬ゴールデン、ポイントの金礦世上に顯はるや爰に有名なるパララット金山採掘の始を爲すに至れり九月に至り又もアレキサンド山の金礦を開きしが群礦中第一等の稱を得るに至れり



斯の如く處々の金山を發見したるの影響は想像も及ばざる程にしてシー  
 ロングとメルボルンの恰かも大水の引きしに似たり此時ヴィクトリヤ全  
 州の殖民員數の僅かに七萬七千にして内三萬人と右二市の住民なり此の  
 三萬人多くは狂亂の姿にて恰かも號令の亂れたる戰場に士卒の逃げ惑ふ  
 が如く秋風の荒るゝ森に木葉の散るに似たり此時童謠あり曰く

“The diggings hoh! the diggings hah! Shout for the diggings shout harrah!”

其の狂亂の狀想像するに餘りあり又た一方にて各處の原野忽ち其狀を變  
 じ木の倒されて礦夫に與ふるの薪となり綠野の荒されて處々に穴を穿ち  
 市府より通ぜる道と絡繹として人跡相次ぎ富めるもの貧しきもの老たる  
 もの幼きもの強きもの弱きもの市民官吏各金原に向へり……天上より觀  
 察せる人類性情の學者の眼にて嘸ぞ不思議なる事共ならん  
 數群の冒險者は此間既に幾多の奇怪なる旅行を遂げたり道路泥濁森林交  
 密乘馬斃死天幕欠乏食物不給旅宿充溢到る處困難を感ぜり此時次で起り

たる一事變といふとヴィクトリヤ金原の發見にしてチエーロンの採掘者  
 の始んど内山の人を舉げて同所に移住するに至れり一年を経てヴィクト  
 リヤ金山の名は啻に濠洲のみならず全世界の各隅に轟き渡り歐洲の文明  
 國より航海毎に溢るゝ斗りの移住者を載せ來り一千八百五十二年にハッ  
 イクトリヤの人口全く前年に倍し同五十三年に二十萬の移住民あり一  
 週間一千八百人の割合にて増進したるものとす勇てロンドン、ポンチ雜誌  
 が濠洲殖民地の微弱なるを嘲弄し吾等の足の下に横はる南の國の肉と一  
 緒に飴ふにも足らずと云ひたるものをして此の狀を見せしめんにて驚嘆  
 して息を切るとならんと思へる  
 偕て移住民が斯の如く大潮の勢を以て押し寄せたるに及んでヤルラ河の  
 南方には俄かに帆布府なる稀代の町を現はしたり土地の俄かに騰貴して  
 家賃は一層激烈の價を示し從來高向なる生活を爲したる紳士すら天幕を  
 張りて露宿するに至れり而して其の天幕も不完全にして多くは雨を凌ぐ



能はざるもの若しくは坐ながら青空に洒さるゝものゝみとす次ぎて最も驚く可き出来事の起りたりといふに移民が續々到着するに就て其所有物品の始末之れなり彼等が荷物は波止場に堆積され殆んど道路を遮り運送に要する馬車の如きは既に礦山の道路に向つて隻影を留めず全く其の始末に困じたれば遂に右の荷物を競賣に附するに至り百磅の家具は一磅以下に飛び五百磅の飾物の二磅以下に賣られたれば忽ちにしてメルボルン市の營業者は非常の困迫に陥り市參事會の遂に之を停止せしむるに至れり

偕て金山にては諸種の人民混交して異様の情態を呈せり疎漫なる英蘭人諧謔ある愛蘭人沈重なる蘇蘭人粗忽なる佛人勤勉なる獨逸人一律なる亞米利加人各其國情を携へ來りて各自各様の生活を爲せり支那人は此時已に其豚尾を曳きて此一群に闖入せり乍ら幾許もあく此一群の雜種の混合攪和して遂に一種の勞働共和國を構成し純然たる殖民流儀を造り出

すに至れり就中礦夫の衣服は龍動の商會に於て別に之を製造し何人も凡べて其流儀に従はざるべからざるに至れり一人の紳士高帽を被りたる儘勞働の仲間に入りたるに各方よりジョーク(紳士の異名)と呼ばれ遂に之を打擲して失心せしむるに至れり當時の諸物價の驚くべき斗りにして下等の料理人すらも一日一磅にては請求に應ぜざりしと云ふ經濟上の大變動は實に恐るべきものと謂ざるべからず

## 印度紀行

九月廿二日漁船萬陀羅號のボート、フィリッパを解纜せり平生あれば數千の煙突數万の橋、朝霞の中に林立すれ共此度の只二隻の漁船フィリッパ港に在り一層の石炭を積み來りたるものにして今回一度にても十五萬圓の利益ありと云へりストライキの爲め石炭の價非常に騰貴したるに依れり今一隻の萬陀羅號にして乗客の外に四百二十頭の馬を積み以上の馬の